

T02
N 69
54

日本における統計学の発展

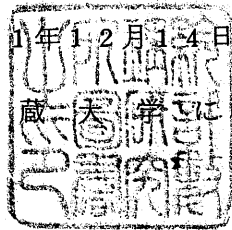
第 54 卷

第 53 卷よりつづく

話 し 手	内 海	庫 一 郎
聞 き 手	大 屋	祐 雪 美
	森	博

1981年12月14日(月)

武蔵大学にて



話 し 手	木 村	太 郎
聞 き 手	森 坂	博 慶 陽
	伊 藤	美 行 一

1982年3月20日(土)

法政大学にて

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀨信邦*、森博美*、山元周行(* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

内海 どこからやりますか。

大屋 満州の統計年鑑の話とか、満州の統計機構の話から始めたいと思います。

森 統計機構の詳しい話を聞いてないんです。

内海 いや、私も詳しいことは知らないんです。

大屋 そのあたりで、先生ご存じのことをざっと話してください。

内海 とにかく、満州国よりは満鉄の方が早いわけで、満鉄について私が知っているのは、福田勇さんと後藤憲章さんの2人が、私が行ったときの統計班の主任ですよ。後藤憲章さんが社内統計で、福田さんが社外統計とたしかいってたと思う。後藤憲章さんは大豆の出回りの大家です。

森 社内統計というと、満鉄の業務に関係のある統計ということでしょうか。

内海 そう、業務統計のことです。いつからか知らないけれども、業務統計の方は奉天に本部があった。ご存じでしょうけれども、結局満鉄は東支鉄道と対抗して、大豆を大連に集めるか、それともウラジオストックの方へ集めるかというので大競争をやるんです。そのうち、東支鉄道を買収で買ってしまったが、それまでは長春が境なんですよ。だから私どもが行ったときは、まだずっといまでもあるでしょうけれども、長春の駅のすぐそばに墓場がありました。ロシア人というのはすぐお墓と教会を持ってくる。日本人はすぐ女郎屋と飲み屋を持ってくるんだな。(笑)

それから後は満鉄が統計をつくっていたんです。もちろん、東三省のがあっただけでしょうけれども、それはもういいかげんなもので、みんな県単位ぐらいで表式調査でつくっていたんで、ひどいものです。人口が3000万というのが常識で、実際に昭和16年にとってみたら4000万で、1000万ぐらいの誤差があった。満州国の統計表には「発見人口」という欄がある。届け出られなかった人口が年々150万ぐらいあるんだ。（笑）年々150万ぐらい発見するんですよ。ちゃんと人口統計に「発見人口」という欄があるんだ。改めて追加していくわけです。

大屋 そうすると、一応満鉄の方でそういう国に当たるような統計の機能を果たしていた。昭和何年ぐらいに満州国統計機構というのができることになるんですか。昭和7年ぐらいですかね。

内海 満州国が6年にできたから、プーイーが皇帝になってから向こうで康德というんですが、康德年間になってからですね。私、それははっきりわかりません。

大屋 そうすると、満州国の方は満州国の方で統計調査は……。

内海 それは関東州を含まないんですね。旅順、大連は日本の領土ですからね。

森 満鉄の社外統計機構というのと満州国というのは、二重写しになっているんですか。

内海 そうです。二重写しになっていて、結局満鉄の社外がやっているのは、主に統計の編纂業務ですね。

そのときに、福田さんから、蜷川の統計学には統計編纂論というのがないけれどどうするんだといわれて、この間山目さんにそのお話をしたらば、オレ編纂論につい

て意見があるからというから、それ話してくれと頼んで、話すよといていますけれども。

大豆というのは非常に大きいんですね。満州というのは大豆とコウリャンで開拓されているみたいなものなのね。

大屋 小麦はもう全然できない。

内海 できないことはないですけども、つくらないですね。

大屋 満州国ができて、統計課としての最初の仕事というのは、恐らくそれは統計編纂になると思いますね。

内海 それも、東三省の統計を引き継いでやっ たんですけども、そのときのことは、古い日本統計学会の会報に、ちょっと書いてあったと思います。それから恐らく、統計局に出したもののの中にそういう報告はあると思います。そのときだれがどういうことをしたのか、私は知りません。

私が行ったときは、統計機構でいいますと統計局はいないんですよ。ここていうと総理府ですけども、総理府というものがありまして、その中に企画処とか情報処とか、幾つもの処がある。処というのは局ということです。

その1つが統計処なんです。ほかはみんな、処長が日本人なんです。統計処の処長だけが満系ポストなんです。中国人なんです。

大屋 それは政治的なポストではないという意味からそうなの、ているのか、それとも閑職だからですか。

内海 閑職です。

この間もちょっとお話ししましたけれども、とにかく総理府がありまして、張景恵が総理なんです。張景恵と

いうのは馬賊の出身ですよ。馬賊の出身といわないで、
 緑林の出身というんだね。彼がどこかで祝辞を読んだり
 なんかするのを、建国大学の講師で、孟子なんかをやっ
 ていた、大村さんというおじいさんがいまして、それが
 全部文章を書くんです。張景惠はそれを読むだけ。大村
 さんが建大へ来て、「きょうは早く帰らなくちゃなりません
 ン」というんです。「何ですか」っていったら、「いや
 、あした張景惠が祝辞を読むんだが、ちゃんと教えてお
 かないと、平気で飛ばしちゃうからね」と。(笑)
 そういうむちゃくちゃなもんですよ。その辺の事情は、
 愛親寛羅博儀の「わが半世」にずっと出てきます。こう
 いうふうにして日本人の書いたものを読まされたとか。
 勅語がち回出ているんですが、5回ともみんな大村さん
 が書いているんです。変なおじいさんでしたがね。

総理がそうでしょう。その下に星野直樹が総理庁長官
 でいるわけですよ。それが関東軍第4課の片倉表と連絡
 をとっているわけですよ。初め私が行ったとき第3課と
 いていて、間もなく第4課になった。それでいわゆる
 内面指導というやつで、向こうじゃ奏任官のことを薦任
 官というんですけれども、私なんか薦任3等で、一等下
 なんです。薦任2等以上の人事は第4課長の判がないと
 実行できない。任命できないんです。表では全部、各大
 臣も総理も、さらには枢密院もみんな中国人、当時でい
 えば満人です。それで必ず次長というのがついている。
 そっちは必ず日本人で、岸信介が実業部の次長なんだ。
 星野直樹が総理庁長官ですね。ずっと各ポスト全部いる
 わけです。それで、次長とか処長の下には科長がいるん
 ですが、日系の科長が1人で働いていて、本当の名前上

の偉い中国系の人は大抵日本の学校を出た連中が多いです。から、や、てきて「文藝春秋」かなんかを読んでいるわけだ。何にもない。それでフーッと書類持って行って、さあ判押せといって、バタバタと判を押す。実際の仕事は全部日本人です。

統計処は一等上の徐という人で名前は三國さんに聞いたんだけどもわからなかった。その下に、統計課というのと資源課というのがある。資源課長は日系ポストで日本人なんです。統計課長は、鮮系ポストで朝鮮人で、尹明善なんです。そこに事務官が1人いる。

森 それぞれのポストは、重要度に応じて人種が決まっているわけですね。

内海 大体決まっている。資源科長が日系ポストで、日本のまねした資源調査法を担当しているわけ。統計科の方は統計年鑑を、それこそ社外統計式にやるわけです。

その朝鮮人の尹明善が、どういうき、かけか知らないけれども、私のところへ訪ねてきて、おまえ統計科の事務官を兼務してくれぬかというわけです。はっきり覚えていませんけれども、その兼務をしたのは昭和14年の夏からじゃないかと思います。助教授になるのとほとんど同時でした。13年の5月に蕪州へ行ったんですから。

大屋 お仕事というのは、大体編纂業務だけで、調査の方はないわけですね。

内海 私のところにはない。資源課がやっているわけですね。

大屋 それは統計調査という形じゃなしに、資源のあり場所を押さえるという意味で調査みたいな、つまり大體検地みたいなもんですか。

内海 太閤検地まで行かないんじゃないかしら。

森 報告統計みたいなもんですか。

内海 報告統計です。「満州国統計年鑑」と、「満州国統計図表」というのと、それからあとは統計講習会の仕事です。ちょっと覚えてないんですけども、雑誌を出していたような気がするんだね。そこはは、きり記憶してないんですけども。

大屋 その2つの課の関係はさほどないわけですか。

内海 いえ、同じ部屋で仕事しているんですからね。

森 片一方はそういう報告統計を集めて、内海先生の方は年鑑をつくらしているわけでしょう。こちらにかなり数字が上がってきますね。その数字が来るわけですか。

内海 私、かすかに覚えているのは、工業調査をやったことがあるんです。その担当者が、どうやって工場名簿をつくらうかというんだ。工場で電話なんかないところが幾らでもあるわけですよ。電話帳調べてもダメなんだ。どうしてやろうかといって途方に暮れていたのを覚えています。

大屋 日本でもそうでしたものね、私の小さいころは。

内海 電話なんというものは貴重品でした。

大屋 そうすると、統計らしきものがあって、それに基づいて満州国を統治したというんじゃないしに、もう一方的命令で統治をした。

内海 だから結局、法律だけでやっていたということでしょうね。それで実際は、軍が星野やなんかと相談してやっていた。そのときの憲兵司令官が東条英機ですからね。憲兵隊から関東軍司令官になって、そのときの関東軍の副長が石原莞爾です。

満州国のいろんな計画は、いまここに残っています。日本にかなりありますが、企画立案資料というものがあるんです。それは大上末広を先頭とする滿鉄「マルキスト」といわれた人々が書いたものですね。その手法が、この間の木村さんの話と同じに、実態調査ですよ。

大屋 少し話がずれるかもしれませんがけれども、いつか内海先生が、満州国のバランス表の話、資料かなんかの話をなさ、ていましたね。

内海 そういうものをつくれということも私がいったというだけです。それから、滿鉄にいた飯淵敬太郎がバランス表の図式をつくったんです。

大屋 その中身に入るべき数字というのはかなり怪しい数字だった。(笑)

内海 怪しいもありゃしない。だから、企画立案資料というやつの付属統計書やなんかありましたね。むしろ滿鉄の方が、一所懸命そういう資料を作っていたわけですよ。特に大豆の出回り統計なんというのは、かなり正確なものですからね。鉄道が出てくるから、それを中心に調べる。それをだんだん普通の統計調査に移そうとしたのも、大東亜戦争が始まるころじゃないかな。

それで、対島忠行の兄さんの対島俊台とか、愛甲勝矢なんという人たちが——いま鹿児島にいますけれども、臨時産業調査局というところをつくった。それはつまり、岸がやったところの下ですが、そこで、特に北滿の農村の莫大もない調査、それも実態調査で——一つ一つ当たって、この家はこうだというようにやった。南滿の方は、わりと滿鉄の連中の古くからの実態調査結果がある。だから内容は、統計というより実態現地調査ですね。それが

つまり、満州国の政治的な戦略の基礎に使われていたというふうに思います。彼らののは帝国主義的マルキシズムですから、関東軍の4課と結びついていて、われわれには資料を見せないで関東軍には見せる。(笑)それで勝手なことをいっている。

滿鉄の調査部が壊滅されたのは昭和16年です。昭和16年の7月8日が「関東軍特別大演習」で、60万の軍隊をソ満国境に展開して、あしたにでもシベリアへ攻め込むというふうに見せかけたんですね。そのときに、そういうことで軍隊がたくさん入ってしまったんで、ソ満国境にいたゲリラが動きがとれなくなっちゃって、謝文東が手を上げて出てくる。そうすると、関東軍の入口のところで謝文東帰順式という式をやったよ。これは土竜山事件の指導者ですからね。思想的なイデオロギーのない、仁侠心の強い村長さんかなんかで、それが土竜山の下で、幾つかの村が連合して武装蜂起するんですね。それで、開拓政策と戦うわけですよ。そのとき塚本連隊長が捕虜になって土竜山へ連れていかれて、そこでなぶり殺しになったという話をききました。そのときの軍服が靖国神社にあるとのことですよ。今はみせないでしょう。

これが結局一等大きな、土地略奪に対する闘争で、それが、コμμニストがやっているゲリラと合流するわけですよ。楊靖宇という男がいて、それが第何軍司令官でいるということはある。その辺、私はよく調べてないんであれですが、その前に、イリノイ大学の卒業生で、モスクワ中山大学を出て、延安から派遣されて満州を統括していた楊將軍というのが出てきますが、それを、とうとういびり出して射殺するんですよ。このはな

しは沢地文枝の「もう一つの蕪州」に出てきますが私の
 きいていたのと少しちがいます。食糧基地を断たれちゃ
 って、人民がゲリウに——当時の言葉で匪賊というん
 ですが、食糧を与えたら一家皆殺しにされるということだ
 った。だから、畑のところに刈り残したやつを置いてき
 ちゃいけないんです。そういうことで、食い物がなくな
 ってとうとう出てきて、「オレは揚だ。腹が減ってしょ
 うがないから飯食わせてくれ」といったが、「おまえに
 飯食わせたら一家皆殺しにされるからいやだ。すぐに警
 察に通報する」「通報してもいいから食わしてくれ」とい
 っていたという。それで、飯を食わないうちに警察の手
 が回って、逃げて行って、どこかで射ち殺された。ハル
 ピンの博物館に、揚將軍遺品の部屋というのが一つあ
 って、そこに彼の死んだときの解剖の所見から、着ていた
 服やなんかみんなあるそうです。「物いわぬ農民」の大
 牟羅良なんか、そのとき揚を追っかけていた1人です。
 あれ協和会だから。大牟羅と私は収容所で同じ天幕にい
 ました。「物いわぬ農民」というのを見た？統計がどの
 くらいでたらめかということが書いてあるよ。私の論文
 にも引用してある。

それで、揚が殺されたんで、金日成がソ連領に逃げ込
 むんです。金日成の伝記にはそれ書いてない。これも当
 時聞いた噂話です。関東軍の展開によって、そのいわ
 ゆる匪賊ゲリウ部隊はほとんど逼塞しちゃうんです。こ
 れはもう権力の圧力の前には、レジスタンスというもの
 はやれないものかと私は思ったら、途端に、その年のう
 ちに林彪の部隊が山海関を越えて入ってきて、熱河地帯
 の3つの県を占領しちゃった。こっちでやったらこっち

へ出てくる。そういう状態のもとでの統計調査では、「発見人口」も必要なのだ……。 (笑)

大屋 そうですね。「発見人口」という言葉はいい言葉かもしれませんね。そのときにはやっぱり必要な概念だったのでしょうかね。

内海 ところがおもしろいんで、統計局官僚として有名な松田泰二郎先生が、満州へやってきて昭和15年の国勢調査をやろうというわけね。その時、はじめて満州国に「統計局」ができたような記憶がありますが、この辺は三国さんが誰かにきかぬかわかりません。在外日本人がどれだけいるかということが1つの目安なんです。つまり、在外日本人を動員することを、そのときはもう考えていた。

大屋 中国なんか、現段階でも「発見人口」という欄が必要なんでしょうね。

内海 恐らく必要でしょうね。それはそうですよ。

森 何千万単位で発見人口が出てくるかもしれません。中国ですからね。 (笑)

大屋 極端に出てくるんじゃないですか。

内海 4億3000万か4億5000万でしょう、中華民国が発表した総人口が。実際やってみたら6億。支那には4億の民がいるというわけで、いつでも4億なんですよ。あれ、もとの表に、どこかの省から報告があると、それで直すんですよ。少なくとも中華民国の統計では、はっきり覚えてないけれども、4億3000万か4000万だったんじゃないかしら。それで調べてみたら、6億だか8億いたんだらう。 (笑) 統計なんというものじゃないですよ。

森 そうというのは統計の原型みたいなもんですよ、支配

権が及んでいくに従ってそこが統計によって捉えられるようになっていくというのは。

内海 そうですよ。

昭和15年だったと思うんだけど、松田泰二郎が――これは高野先生の直弟子なんですけど、高野先生とはおよそ種類の違った人間で、だて者で食道楽で、この間中川先生がいていたけれども、何も教えてくれない人だったそうです。私が覚えているのは、とにかく食道楽で、一人で来ているんですね。そうすると、朝ご飯をヤマトホテルは満鉄直営の、駅のすぐわきにある最高のホテル。そういうふうに、しょっちゅうぜいたくな食べ物しか食べない。

私びっくりしたのは、満州というのは文盲が8割の国でしょう。例の識字運動で320覚えろというところから始めて、革命後に初めて大体みんなが字を読めるようになった。そこで松田さん、自計主義でやろうといい出した。(笑) 文盲に、自分で自分の字を書けというんだ。それほどそっくりそのまま日本のまねをするわけです。森 調査票なんて読めないでしょうね。

内海 読めない。だから結局、実際にはだれかが書いてやったんでしょうね。

そういう支配権が及ばないところへもってきて、やみがあるでしょう。昭和16年は事件の多い年だったんだ。関東軍の731部隊がバスター菌を新京でまいた事件があるんだよ。満人の方にはコウリヤンを配給しているわけだが、だれもコウリヤンを食っていないということがわかったんだ。全部小麦を食っているんだ。1つの町全体がやみで生きているんだ。

森 配給なんか当てにしていけないわけですか。

内海 配給なんというのはしらないとにらまれるからとって置くけど、どこかへ捨てちゃうんだらうな。

大屋 そういう実態はなかなかわからなかつたわけですか。

内海 それをポストで押さえてみたら、子供がコウリヤンを全然食べないというんだ。隔離しているところへまたやみが来る。(笑)

私の家が、奉天から新京へ入ってくるところにある歡喜嶺という岳の一等高いところで、その大きな街道のわきを、大八車みたいな、馬に引かせたターチョウ(大車)の「護送船団」が、毎晩大体夜1時から2時ごろになると、家のわきをがうがうと小麦を積んでいく。壮観だよ。ちゃんと護送人がいるんです。それで警察が見てとがめたりすると、賄賂を出す。賄賂を受け取らなかつたらやっちゃうんだ。そこで統計をつくって意味がない。

(笑) いまのインドやネシアなんかもやっぱりそうなんだらう。恐らく同じなんだ。それで産業連関表をつくっているんだからね。(笑)

森 本当はやみの方で連関表をつくらなきゃならないですね。

内海 そう。それでアメリカへ行っ、産業連関表とか国民経済計算を習ってきて、国連がこういうものを出せというから、作文で出すんだって。それをうのみにしてやってきて、この間インドネシアから帰ってきた、農業土木をやった貯水池なんかつづっている日本工営の社員が、われわれはそんなことしない、行って実際に調べるというんだ。彼らは、その政府の数字でシミュレーショ

ンをや、たりなんかしてる。何か見当違いなことばかり起こるというんだ。恐らく昔の満州と同じじゃないかな。だから、っぱな数字が出てくるわけですね。事実とは全然関係がない。(笑) だけど、とにかく字の読めないやつに自計主義って聞いたことあるか？結局、満州国の統計というのは、鉄道の統計とかそういうものだけなんです。だから、後藤さんの出回り統計あたりからいろんな推理を試みるよりしょうがないですね。それから、関東州というのはとにかく日本の統治下だから、ずいぶん古くからいろんなものができていますよ。

大屋 やっぱ、権力が及び得る範囲の中では信用できるわけですね。

内海 昭和15年だったか14年だったかな、神戸さんから引き受けてきて、蜷川さんにやらせた大連市事業調査局。そのときに岡部、有田、上杉と行ったんですよ。大連市の公園の真ん中の公園事務所の2階に、事業調査局という看板を出して、1年間大連を調査した。

そのときに上杉が大連市の工業をやったのかな。そのときの資料が、蜷川さんが死んだらみんな出てきた。上杉は、老古漂とかいう中小零細企業地帯のところへノコノコ行って、牛の首売ってたとかいうような零細工業の状況を細かく調べたんですね。満鉄がちょっとも調べないんだよ。大連調べたって出張旅費もらえないでしょう。それで、大連のことは事業調査局に聞けといわれた。つまり大連以外の、陸の方から朝鮮を通していくルートがだんだん開発されるし、北鮮3港が開発されるし、向こうの方に競争の巻ができて、大連はその危機感を感じるんですね。それで、大連の今後のあり方を諮問してきた

わけです。それを嵯川がとって、そのときに嵯川が私の意見を入れてくれなかったからよかったんだけど、どうしようか。おもしろくないし、しょっちゅういびられてばかりいるんで、京大やめて行こうかというわけだ。私がいらしゃい、いらしゃいといっただけでも、行かなくてよかったんだな。

大屋 結局、蕪州国というのは1回も国勢調査はしないままですか。

内海 だから、そのとき行ってやっただですよ。昭和15年に自計主義で。(笑)

大屋 それじゃ、話だけにとどまらなかったわけですね。

内海 ええ。それは、概略的にはちゃんと集計してあるんですよ。その数字は、たしか第2回の年鑑に出ているはずですよ。その年鑑は大蔵省にはなかったですから、

恐らく蕪州に行かないとないでしょう。大蔵省には第1回のしかなかった。在外資産調査会というのが大蔵省の中にありまして、私もその嘱託のまた嘱託みたいで、

小島豊さんは、そのときに、これで蕪州国の財産評価してみろなんていわれて出されたのが、自分でつくった白いページばかりの統計年鑑でした。この次があるはずだというんだが、ないんですよ。何しろ150部以上刷っちゃいけないで、それを全部キャビネットへ入れて、その鍵は資源課長かだれかが保管していて、私でもあけられない。関東軍の机の上にはバラバラ置いてあるんだよ。(笑)

そのとき関東軍の調査部に、根本竜太郎や勝間田清一と宇都宮高等農林の同級生で、国民経済にずっといて、死ぬときには東洋大学の先生だった佐藤武夫、それと、

この間死んだ山口善三郎もやっぱり関東軍の調査室にいた。財政学の方法論を書いた、神奈川大学の先生で、この間死んだ岡野鑑記、みんな関東軍の調査室の連中だった。

結局信用できるものは、満鉄の出回り統計ぐらいなものじゃないですかね。あとは関東州の中のもの。いまのレジスタンスとかゲリラの形態、そういうものを考えるときに、どのくらい満州国政府が浮いていたかというのね。何しろその当時いわれていたことは、中央が法律を發布すると、村の単位でそれを知るのに3カ月かかるというんだ。いまだったら、東京で出したら、その日のうちに沖縄でも北海道でも行く、そういうふうにわれわれ思っているだろう。違うんだよ。たとえば、アヘンつくっちゃいけないという法律が出てもそんな法律のあることを庶民は知らないといった調子です。これまた大きな問題で、つくっちゃいけないといいながら、実はアヘン窟を政府が経営しているんだ。管煙所というので、医者 の証明があればアヘンを吸わせる。クーリーを使うのにアヘンを飲ませなきゃダメだという考えなのね。

森 地方統計のある部分については、精度はある程度 の水準にあるんで、それを集計してしまうと全くでたらめ になってしまう。

内海 何が何だかわからないわけですね。

森 年鑑に出てくるのは、恐らくそういう集計された、信用のならないやつということですか。

内海 だから結局何をやっ たかということ、いわゆる実態調査ですよ。実態調査はとにかく自分で行って当たっているんでね。

大屋 モ沢東の興安県の調査みたいなことを、あっちこちでやっているわけですね。

内海 山田盛太郎が蕪州へ来る前ですから、昭和15年ごろですか。当時浙江省の財政課長をしていた大塚讓三郎という人がやたらと度胸のいい男で、綏化県農事合作社を佐藤大四郎につくらせたんです。それが山田盛太郎を招聘した。盛太郎は当時東亜研究所の嘱託みたいなことをして、第9委員会で仕事をしていたのがやってきたんですね。大塚讓三郎の案内で、ぐるぐる南北の農村を回りました。

北満に行きますと、100人ぐらいが1つの家族なんですよ。それで、馬を6頭つけたスキなんかで、こうやっているのね。これがつまり、鈴木小兵衛という、もと反戦同盟の書記長をしていて、転向しちゃって蕪鉄に行つて、後で裏切者というのでやられて自殺した人で、蕪鉄事件の記録にはSという名前が出てくるんだけど、その人が、北の方が雇用労働をいっぱい雇っているの、資本主義に近いんだ、南の方は小さい零細農業だというふうにとらえた。それを、山田盛太郎がやってきて、違う、これは資本主義の発展以前のものなんだから、家族経営が分解してくるんだ。北の方が生産力が低いんだ。生産力が高くなるとだんだん分解していくんだ。

森 北の方がまだ未分化だということですね。

内海 未分化だ。大家族制で維持されているんで、それに雇用労働力がくっついていても、これは資本主義じゃないといって、大騒ぎを起こした。

森 家父長的だということ。

内海 ええ、それはそうですよ。調べてみると、20人、

30人と雇農がいるんですね。明らかに年季奉公ですよ。しかも、平均年齢33歳とか35歳で75%が結婚の経験なしというんだね。そうすると一種の奴隷ですよ。

その中で、協力費もらっちゃ、あっち行ったりこっち行って、満鉄が莫大でもない調査報告を出しているんですよ。それが、いまホノルル大学にいるジュンヤンが、いまから20年ぐらい前になりますが、「Research Activity of South Manchurian Road Company」という、これぐらいの厚さの英訳したやつを出したんですよ。私それ持っていますが、ジュンヤンの助手としてやったのが井上照丸（晴丸の兄）なんですよ。満鉄の調査結果というのはそれを見ればわかるんですよ。大体実態調査ですね。

大屋 調査結果を要約してあるんですね。

内海 満州国のいろんな、たとえば営口における製油業とか、ハルビンにおける製粉業とか、それから糧穀の研究であるとか、みんな聞き取りで、見て聞き取ってやるわけですね。だから数字はもちろんその中に出てきますけれども、統一的な統計年鑑的なか、こうのものじゃないですね。いまでも、当時の満州を研究するなら、満鉄の資料で研究する。

それから、東支鉄道の買収のときまでは、ハルビンにロシア側の銀行があって、幅をきかせていた。「満州におけるルーブルのインフレーション」とかいう本がそこから出てくるわな。それからヤシュノフというのが満州の農業についての本を書いている。向こうのも若干あるんですけども、ほとんど圧倒的に満鉄のものです。何しろ6000種類あるんだからね。その中には、日本のこ

とだとか北支のことだとかあるけれども、しかし、中心はやっぱり蕪州。

そのジュンヤンの中に井上照丸のことが一言も出てこないということを私は発見して、皮肉まじりに「井上照丸の思い出」に書いたんだ。そうしたら、照丸のせがれがこの間ホノルルに行ったとき、ジュンヤンのところに行って、その本を帰るときまで寝さなかったというのね。飛行場に送ってきてから、これといって寝したというんだ。(笑) そうしたらそこを讀んだジュンヤンが、中国へ通報したらしいんだ。これは井上照丸が日本人側としてやったんだと。去年、吉林大学からその中国訳が出ているそうです。それにはちゃんと井上照丸の名前が出ているということも、この間伊藤武雄先生から聞いたんだ。伊藤武雄というのが蕪鉄調査部の大ボスで、九州調査協会の松岡さんやなにかの親分だからね。いま蕪州国の状況を説明したけれども、統計だけいっちゃいけない。実態調査の方が主で、みんな行って、そこからウロウロして聞き取ってきては、まとめて書いている。

大屋 そういえば、その影響なんですかね。九経調ができますね。そのとき蕪鉄の連中があそこに行、てきますね。そしてやるのは実態調査が非常に多いんです。

内海 そういうことについては名人ですよ。

森 松岡さんの影響があった。

大屋 そうでしょうね。

内海 松岡さんは、小山定知（「蕪州評論」の名義人）の家で酒飲んで、よく庭にぶ、倒れて寝たそうだから。(笑)

大屋 九経調の10周年記念ぐらいのときに、初めて九州の統計の編纂をやったんですね。まさに編纂業務です。

そのときに一々いろいろな類型でやったんです。

内海 そのときのことで私がいまでも覚えているのは、「満州の流通機に関する調査」というものを昭和16年に――満鉄事件は16年の末ですから、その直前に、共産党の調査部にずっといた吉原次郎や、経統研の会員で研究所の所長になった吉植、彼はゼミナーハウスの会合のときに出てきていたが、あの2人あたりが中心になって、新京支社で流通何とかという本を出したんです。私は本の名前さえ覚えてないんだ。一度見たんです。くれといったら、くれないんだな。

そのとき、何せ山田盛太郎一点張りですから、満州におけるインフレーションの指標というのは、完全に理論的なものが出てきて、その指標を何とか無理して探すんですよ。それで、インフレーションの指標というのがずっと出ている統計集。そのやり方をそっくりやったのは、吉植が当時の安本の統計課長だったときに、『日本経済年報』というのを「統計研究会かで作った、あのやり方が満鉄式やり方ですよ。おもしろいんで、まず理論的なことをいって、それに対する指標というふうにしてこうやっていくやり方ですね。その流通何とかというのが、統計の満鉄式の編纂のピークじゃないかな。

そのときは満州ははっきり悪性インフレになっていた。私たちはいまのアメリカ人みたいなもので、私の月給では中国料理屋へ飯食いに行けなかったことがあったな。昭和13年から14年にかけて、大体友達を2人ぐらい連れて中国料理屋へ行って、腹いっぱい食べて、お酒飲んで、5円。それが、翌年は10円になり、そういうふうにどんどん3倍ぐらいに上がっていった。こっちの月給は

そんなに早く上がらない。しまいにはずっと程度を下げちゃって、中国料理屋に行かないで、ギョウザ食いに行くというようなことがあったな。

大屋 ホテルなんかとても行けませんね。

内海 それからもう一つ、いまの関係の資料で、山田盛太郎が満州と中国にかけてつくった統計資料が、今度リプリントされます。

それと、いまの流通機構云々あたり、理論がワッと出てきて、それに実態調査の資料とくっついた資料が出てくる。われわれは本当に自分では無力感を感じながら統計の編纂業務をやっていましたよ。何しろ工場名簿がつくれないうたからね。それで工業統計ついたり、発見人口150万主義でやっているんだから。

人の配置では、資源課長におもしろい人が出てくるんですね。鮫島さんという人がいて、この人は三國さんの親分なんだけれども、どうもかわいそうでしたね。

森 三國さんという方は何をやっていらしたんですか。

内海 どこかの係の係長ですよ。松田泰二郎さんが来たら国勢調査局の方に移ったように記憶しています。それで日本へ帰ってきて、松田さんの世話で厚生省に行きました。それから富山大学に行って、そこを定年になって、いまは千葉の敬愛女子短大の統計の先生をしています。三國さんの教科書はもう全く「第1章 度数分布式の本です。そのころ見ていて、松田さんとはすごく仲がよかった。統計科では、高等官2人だけで、小説家の古丁と2人を並んで仕事をしていた。仕事といったって週に1度か、多くて2度しかない。

そこに、昭和15年ごろ、例の総化県農事合作社をぶっ

つぶすというわけですね。後でみんな引、張られちゃうんですけれども。緋化県というところはノルピンのすぐわきなんです。そこへ、大塚が佐藤大田郎を連れてきて、「人民の中へ（下屯子＝シャートンズ）」というわけね。村へ入っていく、シャートンズして緋化の農事合作社というのをやったけれども、それがにらまれた。というのは、いまの千葉の共産党をやっている元的全農青年部総本部の森さん元のプロ科の深谷さんとか、大変なやつがゾロゾロいるわけですよ。その連中が、こっちの大政翼賛会、向こうじゃ協和会というんですが、その協和会へワツといっぱい入っていったり、合作社をこしらえたりなんかして中国人民と結びつこうとするわけです。

大屋 そうすると、五味川純平の「人間の条件」の中に出てくる主人公というのは、先生にも見当がつきますか。内海 あれは架空の人物でしょう。背景はそのとおりです。やっぱり「人間の条件」じゃなくて、「戦争と人間」の方がよく資料を細かく調べています。あの小説の筋は、アプトン・シンクレアと「ラニー・バッドの巡礼」ですよ。あれはアメリカの飛行機王の庶子が主人公になっている。その筋をそのままねて、日本に移して描いている。

大屋 話はちょっと飛びますけれども、先生が建国大学にいらっしゃったころまでは、統計学については先生は蜷川理論……？

内海 まだそんな独立して考える能力なんかないんで、ただ私は、マルクスとか何とかやっ たときに――16歳の

ときからですけれども、フオイエルバッハ論から始まっているんです。それで蜷川さんの統計方法論を勉強しましたが、いわゆる唯物弁証法なるものと、統計方法とどういう関係があるかわからないんだ。ただ唯物論だということとはわかるわけですよ。だけど、存在たる集団は唯物論でいいけれども、意識的に構成された集団というのはわからないでしょう。

大屋 そこらあたりについての疑問はすでにおもちでしたか。

内海 ぼくはいまでもやっているわけですよ。

森 最初はいつごろからですか。

内海 もう先生の本を初めて読んだときからですね。「存在たる集団」は一遍にわかっちゃったけれども、「意識的に構成された集団」は、意識から来ているんだけれども、何だかよくわからないし、とにかく皆さんのような秀才じゃないから、わかるの遅いんですよ。(笑)

大屋 そのころ疑問を持っておられたことが、日本に引き揚げられて北海道に落ちつかれてから、だんだんと体系化が進んでくるわけですか。

内海 体系化かなんか知らないんですけれども、蜷川のいっていることはこういうことなんだというのが、よくやく少しづつわかってきた。

私が非常に気になるのは、統計学者全部についてですけれども、統計方法以外の方法のことを何にもいわないですね。抽象的分析的方法というのが基準なんで、統計方法は補助手段なんだということをおはいうんだけれども、それじゃ抽象的分析的方法というのはどんなことをやるんだというのはちっともわからない。オレは統計

だけやるんだというあの構えが、私は気にいらないんで、一所懸命そこをやっていたわけですけども。

大屋 北海道唯研をつくっていかれて、その中でだんだんと考え方が変わってくるということですか……。

内海 そうなんです。北海道唯研そのものは、私はそれこそ「その他大勢」なんです。その前に、大学村というところに住んでいたわけね。隣に岩崎充胤が住んでいて、こっちの1軒隣に、宇佐美誠次郎の兄の宇佐美正一郎が住んでいるんだ。裏の2軒隣に宮原将平が住んでいるわけです。そういう人たちを集めて勉強会兼漫談会をやろうというので、それも私がプロモーターなんです。それがちょうど15年続いたわけです。初めは毎週やったけれども、少し忙し過ぎるというので月に2回にした。その間に花田とか慶伊しかが出てきましたけれども、みんな一時来ていなくなっちゃって、いまの4人になった。それが「札幌唯物論」を出す母体だったんです。それが4号ぐらいままで出てから、札幌唯研に切りかえた。ですから大学村の会は名前もないんですが、ハーゲル会というっていた。そのハーゲル会が唯物論編集委員会なんだ。

私はとにかく、戦後に日本農民組合の研究所をつくらうと思ってやってみて、みんな戦前のことをちっとも考え直していないんで、これはまた負けた、しょうがないじゃないかとかっかりしまして、すっかり引込んでしまいました。平和アピールに署名するぐらいするけれども、組合にも入らなければ、あまり出ていかなかったんですよ。

札幌「唯物論」を出すときに私がいったのはお金のことはかりで、とにかく原稿料払っちゃいけないとか、同

人がみんな金出すんだぞ」というようなことばかりいったわけです。結局そいつも一所懸命中心になってやったのは、何とい、ても岩崎さんですよ。

大屋 そういえば、私の学生のころに「矛盾論実践論」とか、スターリンの論文、それから「言語学の諸問題」、そういうのが盛んに入ってきました。

内海 それを、いまのハーゲルやる前に1つずつみんなやっているんですよ。それで結局、こんなものやっても同じようなことの繰り返しになるというんで、小論理学をやって、それから大論理学の途中で、15年つづいた会がみんな方々に散っちゃいまして、大学からいなくなっちゃうし、私もこっちに来ちゃうということで、解散になっちゃった。

いまそのメンバーが全部東京にいるんです。みんな定年になりました。名誉教授で出てきているのもいる。それで今度またやろうというんだけれども、東京じゃダメですね。1つには、みんな偉いんで忙しいんだね。岩崎君のところには、いま一橋の社会学科ですが、大学院の学生が15人いるんだって。それがみんなテーマが違うというんだ。1人はハーゲルの美学やって、もう1人はアリストテレスやっているんですよ。それの対応で、内海さん、暇ないよというわけね。ほかの2人はそれほど忙しくない。しかし、宮原将平なんというのは、学術会議かなんかであばれているでしょう。とにかく家が遠いんです。だから結局それはあきらめちゃった。岩崎さんは、東経大でやっている北大の土曜研究会によく出てきていました。このごろそれは出てこなくなっちゃったな。経統研にも出てこなくなっちゃった。そのかわり、

モスクワへ行って演説したりなんかしているからね。ライプツヒヒにいるフィールドラーとびいぶん仲がいいようです。

大屋 何度か日本に来ましたね。

内海 私も一度会ったけれども。

大屋 福岡でやりました。フィールドラーは。

内海 北海道の統計家とわりと仲がよかったです。ずっと統計講習会なんか引き受けてやっていたして、そのときにつくったやつが、大橋の研究室の名前で出ている。統計学何とか要綱とかいうこんな厚い本をこしらえたでしょう。大橋たちの一番初めのテキスト。あれは私がつくったテキストに大橋がいろいろつけ加えて、それで経済統計研究会関西支部なんとか研究室って、4つも団体の名前くっつけて出したんですよ。

大屋 寺沢恒信の「弁証法的論理学試論」というのがありますね。あれは浜砂君たちのゼミのときにやったんですよ。有賀君、北海道の唯研に……？

内海 いや、寺沢さんと岩崎さんはあまり仲がよくないし、寺沢という人は非常に高姿勢な人らしいんです。というのは、年からいうと岩崎さんが上なんだが、岩崎さんという人は昭和16年に東大の法科を出て、勤めてみてうまくいかなかったかおもしろくなくて、戦後に文学部に入ったときに、寺沢さんが助手をしていたんですよ。助手と学生というような関係が何だかそのまま続いている。

大屋 寺沢氏が「実践論矛盾論」、それからいまは毛沢東の解説やっていますね。あれ間違っていますな。

内海 特に、寺沢さんが「ソビエト哲学」というのを訳したでしょう。私たちのグループのだれかが指摘したん

ですけれども、つまり統計的合法則性の方が力学的合法則性よりも深い認識だという論文は、ソビエト哲学に出ているんですね。それに反駁した「哲学の諸問題」という論文があるんです。それを寺沢が意識的に載せてない。それは北大の私のところか、岩崎さんのところの資料で印刷されていますがね。

大屋 そうですか。ぼくは一回お聞きしてみようと思っていました。学生連中に、矛盾論とか実践論の中で、寺沢氏がこういうことをいっているが、哲学者は哲学やっている間は間違いは出てこない、こういう問題に顔を出してくると、いかに自分の哲学的思考が間違いなのかということをはっきりするといふ話をやっています。

内海 京都の人で、ヘーゲルの論理学、岩崎さんはあれの方をむしろ読んでいたようですね。

岩崎さんはしょっちゅう家に遊びに来てましてね。あの人は、話をするときに「ちょっと紙と鉛筆」というんだ。(笑)あるいは自分のノートを持ってくる。それで私に思い出をしゃべらせるんです。こっちはバカだからしゃべる。そうすると女房に、「あんた、岩崎さんにみんな自分の知恵を取られちゃうじゃないの」といわれましたよ。(笑)だけど、「取られて何で悪いか。岩崎さんが書いたところから考えればいいんで、おまえは歴史家の娘だから資料を取られることを恐れる。オシはだれかが書いてくれるなら、喜んでみんなべらべらしゃべっちゃう」といいながら、べらべらしゃべったのを岩崎さんが更に調べなおして書いたのが「日本マルクス主義哲学史序説」ですよ。とにかく福本から始まっているんだ。私が福本の話をして、こういうことでこういう批判があってとし

やべる。ものすごいんだね、2月かからないうちに論文ができちゃうんだよ。実にすごいね。その能力たるや大したもんだよ。内海と知り合いにならなかつたらこの本はできなかつたろうと書いてあるよ。(笑)

そうしたら、山田喜志夫だったと思うんですけども、「岩崎さんの本を読んでみたら、先生から聞いた話がみんな書いてあるよ」というから、「おまえ、待てよ。君たちには岩崎さんよりもっと詳しく話したはずだ。だけど、だれか一つでも論文書いたか」と。(笑) 岩崎さんは、こっちが話した話で2冊本をつくっちゃった。「現代社会科学方法論批判」と「日本マルクス主義哲学史序説」、両方とも、少なくともそのアイデアについては、私は相当多く関与している。岩崎さんはそれをみんな論文にしちゃうんだ。ちゃんとこっちがいった文献を読みますからね。その上更にそれ以外の文献もさがしだして来て、独創的な論文につくりあげる。私たちとのそういう交渉を通じて、彼はアリストテレスから、ヘーゲル並びにマルクスになったと言えるかもしれない。

大屋 まだアリストテレスやっているかもしれません。

森 学問の出会いですからね。

内海 そのヘーゲル研究会のあるところで私も勉強してもらって、特に確率論に対する批判の問題なんか、やっぱり自然科学者2人、生物学者と物理学者がいるわけですよ。それに、こっちが言って、こう考えていいかといって確かめるんです。それでいいとか悪いとか確かめて、自信を持って書いたけれども、いまはそばにいないから自信を持って書けない。

蜷川は、いろんなことや。たわりには、統計学史にす

っぽり入り込んで目隠しして、それ以外のものを見てないという感じが非常に強い。

大屋 それは確かにありますね。

内海 統計学については本当に詳しいんですよ。だけど科学方法論なんということかというと、どうもあまり詳しくないんだ。それが気になって気になってしょうがないんですよけれども。

大屋 あの世代の統計をやった人たちに共通のものじゃないでしょうかね。

内海 だけど、とにかくやっていますね。コレクティブ・マース・レーシのあたりはまだだれもやってないでしょう。ずっと初めのころからああいう考えが出てくる。ツーパーかなんかが始まりですか。

大屋 やっぱり、先生たちの同世代の人たちに、科学方法論的な考え方が非常に強いですね。例の北川敏男なんかも、あれはあれなりに認識論を持っているんですよ。先生と反対になっているけれども……。

内海 あれはチュプロフ読んでいるのではないかしら。チュプロフは結局、ミルの論理書とかを統計学に入れてくるわけよ。

大屋 彼はミルの論理学も大いに読んでいる形跡はあるんですよ。

内海 それをやっているのはチュプロフなんだよ。

大屋 森君なんか習ったかもしれないけれども、九大の河野教授は、北川さんの弟子なんだね。河野君は数学者で、われわれと一緒に唯物論とか資本論とかやっていたんです。その影響を北川さんは非常に受けているわけですよ。だけど河野君がいつてゐるのは、とにかく北川さ

んが読むのがすごく速いというんですね。『資本論』とか『唯物論と経線批判論』とか、あっという間に読んでしまうというんですよ。それでパッパッと書いていくというんですね。いつの間にかそれが、弁証法とはこういうもんだと出てくるというんですね。

森 彼は彼なりに個性が強い人ですからね。そういう座標からガッと読むわけですよ。

大屋 速いんだってっていました。

内海 速いって、岩崎さんの速さと違って難ですよ。とにかく驚いちゃう。この間も、今度のやつにまた書いたんです。例の「蛭川博士」。あれ読んでないよ。調べてみたら、ほかのページも「蛭川博士」になっている。だから、あれ誤植じゃないんですよ。北川さんが蛭川のことを蛭川と思い込んでいた。(笑)「蛭川博士は昔から……」と書いてあって、その蛭川がこういうこといってるといふの。「存在する集団」と書いてある。「存在たる集団」じゃないんだ。それから「方法的集団」とあるけれども、蛭川は「方法的集団」という言葉使っていないんですよ。あれは大橋の「8000万人論文」だけ読んだんだ。

大屋 数理統計の人たちは後に帰ることはないですから、常に先入行っている。だから、後に出た論文の方が常に正しいんですよ。それこそだれかが間違えた統括をしていると、ずっとそれで行っちゃうわけです。だから、やはりこわいんですね。

内海 『統計学の認識』というのは、大部分は人のものをそのまま書いているでしょう。「統計学史」というのは、ウォーカーとかなんとか、ああいうものをね。

大屋 だから、それをそういうものでいいというふうに

割り切っているわけですね。

内海 自然科学の方はそれでやれるのかもしれないが。しかし、社会科学でそれやられちゃ困っちゃう。

大屋 だから、そこが根本的に違うみたいですね。

内海 私は、戦後の統計学は戦前の統計学の水準を下回ったという意見なんだ。つまり、明治以来ずっと統計学という知識を統括しようとしてやっている。それで蜷川さんの、もう一人の森数樹とかなんとか、統計調査法と統計解析法の二段構えというのは蜷川だけじゃない、みんなそうです。それで結局、英米派をやってみたらどうしても足りないんで、ドイツ派で補おうというのが、一般的な考えですよ。それを結局ドイツ派を切り捨てて英米派だけにしちゃったという意味で、要するに推計学の時代というのは、日本の統計学が占領政策によって墮落したというか、転落した時期だって、このごろ思い出したんですが、つまり統計調査法が消えちゃったということでしょう。ああいう考え方は、明治以来積み上げてきたものの抹殺ですよ。今度のあれもそう。工藤弘安君のテキストごらんになりました？あれが全く森数樹と同じでしょう。統計調査法がいっぱい入るんだ。それで統計解析法が一部になっちゃう。学校から出てきたときにはあれはホーエル、ウィルクスでしたよ。

私が自分の意見らしきものを書いたのは、やっぱり『物価指数における主観価値説と客観価値説』じゃないかしら。それまではどうもあまり独自のもんじゃなくて、蜷川に追随していたんだな。高橋さんや有沢さんほどじゃないですけども、やっぱり統計のプロパーというのからほど遠いんで、われわれの中では私が統計とわりあ

い近い。大橋なんかも。戦後に統計に戻ってくる気はなかったんじゃないかな。

東京工大の経営工学教室というのは今ではエリートコースなんだ。私がその教室に属したときは、経営工学の学科がないんだよ。機械工学の講座を1つ借りて、研究室が1つあるだけなんだ。何か知らぬけれども、いろんなことやらされましたよ。それだけじゃ金にならないから、英語も持てというのね。(笑) 何やるんですかといったら、バーナムの『経営者革命』やれというんだね。ブルジョアの立場とプロレタリアの立場と、経営者の立場というのね。初めの方だけやってやんな、ちゃって、ろくす、ぽやらなかった。東京工大で何か2〜3種持たされたな。北大へ行くことになったら、おまえ半年こっちにいられないかというんです。北海道と東京工大と半年ずつやれよというんだ。(笑) それで、じゃそうしましよというんで、北大の方に同意を求めたら、いいよというんだ。それで1年だけそれ実行しました。後半、10月こっちへ帰ってきた。

その次の年もまたそれやろうと思った。そうしたら、北海道からこっちへ来ようと思った1週間前に、医者につかま、ちゃったんだ。診療所のお医者さんと友達になったのがいけなかったんだな。「私も、少し胸に影があるといわれましたよ」といったんだね。そんなこといわなきゃよか、たんだけれども、そうしたら、「まあ写真撮ってみましょう」とかいて撮った。こっちは本当に何でもない、何げなしに写真撮たら、「内海さん、これはいけません、すぐ入院しましょう」というんだね。(笑) それで入院させられちゃって、気胸をやられた。ベチュー

ンが発明した療法だそうですよ。毛沢東の「医師バチューンを記念する」ってあるだろう。あれが気胸を発明したんでしょ。ものすごくやられたんだ。あれ置針みたいなのを突っ込んで、見ると肺がこんなち、ちゃくなっちゃうんだ、ここに空気を入れるから。両方やられた。

内海 私が京大に落ちついたのは昭和9年からなんです。昭和8年が滝川事件で、学校に行、て1月たたないうちにあの騒ぎが起こ、たんです。ところが、それよりちょっと前に、成城でや、ぱり成城騒動というものが起こ、ていた。私はそ、ちの方にかかわり切、ていたのと、もう一つは、まだ政治運動と絶縁していなかったもんで、その政治団体の連中が、「おまえは京都の学校へ行、てもいいけれども、東京に残、ていてくれ」ということで、京都に落ちつか、なかつたんです。事実上、新宿に下宿、していたんです。それだもんですから、京都に行くときに伊津野という京都の「文学部」の書記をしていた人のせがれが、や、ぱり成城で社研の事件に巻き込まれてつかまりまして、その妹の友達のとこに、個人的なつながりがある川端署の刑事が、何かお茶飲み話なんかよくしに来る。それが、水野の兄さんは成城で赤の一味だ、た。今度成城から赤の大物が来るから、何とかかんとか、って、そういうことい、たということを知ったわけです。ここら辺は、どの程度自分のしたことかばれているのか、何しろあの時期は、例の松本清張の「昭和史発掘」のち巻に出てくる松村という共産党をつぶしたスパイの事件ですからね。そういう関係があ、ったんで、何かいろんな

ことがばれているだろうと思ったんですが、小物ですからね。

東大農学部の全会支持団というものは、私がつくったんですよ。私が全会側の連絡係で、それが梅拳されちゃって、連絡があって、「内海、逃げろ」というわけですよ。姿をくらますんで、京都にいちますい。それは結局何が何だかわからなくなっちゃった。全会支持団のときに井上晴丸やなんかがやられたのかな。何かそういう連中ですよ。昭和8年に学生大会やなんかに何回か出ただけで、京都にはほとんどいなかったんですよ。

そのうちに天下の形勢ますます悪くなっちゃって、これはとにかく学士さんの称号をもらっておかないと飯が食えないと思って、それじゃ京都に落ちつこうと思って行った。あのころは、先生ご存じのように、縦割りの高等学校が生活の単位で、上級生にいたのが坂出秋彦とか木下孝夫とか、生きてるんじゃない、カルピスの前の社長の三島克騰だけですけども、その三島もこの間死にました。そういう連中が、「おまえは蜷川さんのところに行け」というんだ。1年のときに統計学の試験受けたんですが、そのときまで実は統計学の講義出たことはないんで、試験場で初めて蜷川さんの顔を見た。

その晩に蜷川先生のところへ連れていかれて、「先生、この男をゼミに入れてください」というぐあいだ。正直に、「先生の顔を見たのはきょうが初めてなんですけれども」といったら、「そんなやつ、試験落としてやる」というんだね。(笑) これはダメだったかなと思った。だけどそのとき、あ、これは統計学に唯物論を入れようとするんだと、蜷川さんのやつよりももっと詳しくそれ

を書いたんですよ。そうしたら後で坂出秋彦に、「これは
 と思って注意して読んだ。実によくわかってる。入れ
 てやろう」というんで、入れてもらったわけです。米の
 生産費やらされて、自分は農業問題の大家だと思ってい
 たら、米の生産費も扱えない無力な人間だということが
 しみじみわかった。

それで、最初の年のゼミ仲間が安井謙ですね。それか
 ら北京大学の日本語学科の主任で死んだ鈴木重蔵、河上
 良三のご亭主ですね。それから京都銀行の会長になりま
 した栗林四郎。安井と栗林は同級です。「日本国家独占資
 本主義論」の手嶋正毅。たしか雪山慶正も一緒ですよ。
 それから、長野の塩尻村の村長の中島弘嗣。とにかく一
 騎当千のつわものが大勢いて、しかもそれがみんな大学
 に5年いるような連中ばかりで、みんな一応つかまっ
 て、もう何にもやってはいですね。

鈴木はなにかギャング事件の関西版で、瀬谷小一郎か
 らピストルを預かって、鈴木の家から190丁のピストル
 が出てきたというんだ。それですごい拷問されて、2週
 間の間全然口をきかないでがんばった。もっとも、この
 男剣道何段というような体のがっちりした男です。おふ
 ろが好きで、北白河のところに家があるんですけども、
 道路に出るまでに、角のところにぶろ屋がありまして、
 そこへ手ぬぐいと石けんを預けてあるんだ。学校の行き
 帰りにぶろに入る。(笑) 英語がよくできるんですよ。そ
 れで、学校を出ると同時に東洋経済新報社に入って、オ
 リエンタルエコノミストに回ったわけ。そうしたら、外
 語学校の拠点に、そういう外語でない系統の者が入って
 きたということで、すごくいじめられて、結局いやにな

っちゃいまして、堀江邑一さんに頼んで満鉄へ行、たわけです。満鉄では、一等最後は大連の駅の助役やっていました。そういうことで、この人は統計はほとんどやらなかった。『統計学概論』の索引は鈴木重歳がつく、たんです。そのぐらいのことはしていただけますね。そのうちに、埴川という男は気むずかしいから、重歳が堀江さんに頼んで満鉄に入ったときに、自分に相談しなかったというわけで、きげんが悪くなっちゃって、大分縁が薄れた感じでしたかね。

最後に、終戦のときの8月6日か7日ぐらいの日に、重歳と上杉正一郎が同時に召集されているんですね。入ってみたら同じ中隊だというのね。それで、終戦と同時にシベリアへ送られちゃつまらないので、2人で逃げたんです。さすが満鉄で、いまぬの汽車が出るぞとか、(笑)あいつに乗っていけばいいというんで。それで2人で逃げてきて、そうこうしているうちに良子さんが死んじゃったのかな。重歳は結局帰ってこないで、向こうへ落ちついて、英語ができるんで、北京大学の日本語科の教授になって、ずっと向こうにいて、向こうで亡くなった。良子さんの子供はみんなこっちへ帰ってきて、もちろんもうお嫁に行、て、河上会にときどき出てきますかね。

重歳が向こうにいる間に、私何度か手紙出したんだが、集団主義の国だか鎖国主義の国だか知らないが、その後では一度も連絡なしだ。こっちから人を紹介してやると、それにござそうしてくれたりなんかしているんです。というの、つまり向こうから日本へ手紙出すのはきつ、まずいんだな。何か日本と内通しているみたいに思われ

るんじゃないかな。一等最後の消息は、東京河上会長の白石氏が向こうに行って、ちょっと病院に行ったら、重歳がそこに入院していて、ボンベみたいなのがそばにあって、けいれんが起るとあれを吸入していたというんだね。それで白石氏が通訳の連中に重歳の話をしたら、北京で活躍している通訳団はみんな重歳さんの弟子ですよといったっていうんだ。私は会ったやつに聞いてみるに、一向そんなことは知らないけれども。

手嶋はそのときに、安井と2人で満鉄に入った。その時分の模様は、安井がいま日経に書いているでしょう。手嶋の名前は出てこないけれども。経理課に回されて失望したとかね。きのうの記事はそうですよ。

私に、いま上にありますけれども、この間お話ししたように、織物染物業界の新聞の仕事を見つけてきてくれたのは、いま絵描きになっているけれども、堀内義夫という、竜川事件の花形の1人なんです。それをやり出して、それで原稿料を貰えば食えるんです。1回に1円50銭の原稿料で、1ヶ月が25回ぐらいになりますから、とにかくそれで最低食えるんです。足りないとしても、1ヵ月10円もあれば十分食える。その分は成城関係の友達が出してくれたり、家から少し送ってもらったりした。家はそこを貧乏しちゃってまして、その仕事があったもんで、大学で米の生産費やってみて、自分の勉強がどのくらい未熟かということがよくわかって、これはもう少し勉強しなくちゃいけないということで、あのころそうだったんですけども、もう社会運動そのものはやれないから、労働学校でもやろうかというわけで、坂出と2人で労働学校の計画なんか立ててみて、そこいらウ

ウロウロしていた。

それもダメなんで、また一服したりして、あのころ、大学院というのは、指導教官がオーケーといえれば入れるんですね。「おまえ貧乏なんだから、大学院に行くな」というのね。副手になれば待遇同じだから、大学院にそれを借りて、図書館に勝手に入れればいいんだからというので、私は大学院に籍を置かなかった。大学院に籍を置いたのは、何と終戦後なんです。再入学している。だから、私の学歴の終わるのは昭和25年か。(笑) 何か退学願を出さなかったから長くいたことになる。大学院は旧制の最後ですよ。

そのときの名目上の指導教官は豊崎先生です。蜷川がオレはもう大学にいないくて本も見られないだろうから、大学院に籍を置けというんですね。それで大学院に籍を置いた。そうしたら豊崎先生が指導教官だったんで、豊崎先生のところへ行ったら、高橋先生じゃないけれども、「オレはもう統計はやらぬ、おまえ勝手にやれって、いわれた。だから、豊崎先生と一度も統計の話したことないんじゃないかな。先生はあのとき、もう経済政策かなんかのお家元ですからね。

そのときは静田均が部長でして、何とか籍を置いていたんです。そうしたら、静田さんはこの鈴木先生と一緒にして、京城大学です。その関係で、私が東京でウロウロしていたら、北海道へ行かないかというので、静田さんから岡部さんを媒介にして私のところへいつてきた。そのときに、その前にとにかく大橋、上杉を蜷川の後に返さなければいけないという意識が私にあった。あのときは、あの2人が追放された形になっていて、とにかく

上杉がそのころもうレッドパーズ食っちゃたんですわ。
通産省の調査統計部の前にテント張って、ハンストなんかやっちゃって。

大屋 そのころ課長かなんかでしょう。

内海 いや、そんな。課長補佐ぐらいです。私と同じです。そんな偉くないです。だけど統調という労働組合の併合体をこしらえたのは上杉でしょう。いまでもあるんだそうですね、労働組合の単一組織みたいなものが。そういうものがあるなら、そういうものと経済統計研究会とでもっとなにするやいいなと思っているんですがね。

上杉がレッドパーズを食い、私に北大へ行けという話が出る前に、結局木村太郎のおかげで、大陸や南方から帰ってきた連中全部が就職できたんですよ。上杉に酒井に内海、また2人、3人いますね。

内海 酒井は稲葉さんにくっついて、そのまま安本へ入って、安本の金融班長ですからね。それで経済復興計画の金融の部分は酒井が書いたんですよ。そのころは、稲葉秀三なんかは酒井をケインジアンだとはばかり思っていた。また事実、役所ではそんなことばかりやっていた。私は酒井からケインズの図式の説明を聞いたことがある。

大屋 それでまた北海道で一緒になった。

内海 いや、北海道へ私が推薦したんです。そのころは北海道にだれかいい人いませんかというようなことで。そうしたら、12月の31日の日に、決心して「ワッ」と私のところへやってきて「行く」というんだ。行くといって帰らないんだよ。そのときちょうどうちのおふくろが危篤状態だったのに、いつまでもねばっていたのを、いまで

も覚えている。(笑)

それでケインズでもやるのかと思ったら、初めホー
レーとかなんとかやっていた。結局マルクスになっ
ちゃって。あれ私と違って、経済企画庁のとき、一橋の
連中やなんかと仲がいいんですよ。彼もゼミは蜷川の部
屋なんです。あれは浦和高校で、野上弥生子のせがれや
なんかと一緒につかまって、浦高を退学になった。宇都
宮徳馬が兎町で株屋かなんかやっていたことあるでしょう、
彼はそのときの宇都宮の店の店員ですよ。あの男は本当
に運の悪い男だね。在学中、浦高で資格試験をもらって、
京大へ来て、京大の哲学科に入って1年いてから転科し
た。もちろん軍教の資格ないんですよ。そうしたら、学
生で蜷川のゼミにいたら、召集が来ちゃったんだ。それ
で、たしか兵長かなんかになって、中支戦線で3年間ぐ
らいやって帰ってきた。それで卒業して、今度蜷川の世
話で松岡孝見の副手になった。なっただと思ったら2度目
の召集が来てインパール作戦。合わせて6年か7年、軍
隊生活やっちゃった。身寄りも何もない男で、木村とか
和合とか、ああいう連中が彼をしきりとかばった。

とにかく、蜷川のグループというのは、片っ端から木
村の世話になっっているんじゃないかな。私が統計委員会
へ入るときもそうですよ。上杉を通産省に入れたのも彼
です。上杉がレッドパージ食ったら、すぐに自分のとこ
ろで雇っちゃった。そうしたら1週間たたないうちに、
「どうして上杉を雇ったんですか」、と刑事が来た。日
本というのはおもしろい国で、「そりゃ君、大学の同窓だ
よ」といったら、何もいわなかった。(笑) 同窓生
というものは必ずそういうとき助け合うもんなんで、用

想傾向のいかにかかわらないんだね。(笑) 日本的です。
大屋 大学紛争のころ、大橋さんが、終戦のとき、たれ
たれにいろいろお世話になったという話とか、取り調べ
の捜事がどうかという話をすると、学生連中が全然わ
からなかったというんですね。ゼミの中で殴り合いやっ
ているんです。て。だから彼らは、ゼミ仲間というのは
こういうものかということも全然わからぬでしょうね。

内海 私も嵯川の手からは、戦後離れちゃうわけですよ。
軍隊から帰ってきた最初の1年は、嵯川の周りでウロウ
ロしていて、もしあれでウロウロし続けたら、恐らく私
も京都府の政権の小間使になれたんでしょうかね。やっ
ぱりそばにあまりいない方がいいと思ひましてね。

大屋 和合さんはずっと下の方にいたんですか。

内海 1年下です。だけど私のは、主要な側面は、やっ
ぱり嵯川さんにお行儀を教えられ、学問を教えられです
よ。和合の場合はそうじゃないんです。

もう1人、二塚正也の兄さんで二塚竜雄というのがい
まして、この2人が結局虎三ファンなんです。(笑) 二
塚に至っては親子でそうなんです。あれ、おやじが奈良
の商工会議所の会頭してまして、それこそ自分は自民
党を支持していても、選挙になると、嵯川の応援に駆け
つけるといようなんです。それから、たち吉のおやじ
がそうですね。あれは別に大した関係もないんで、あれ
も嵯川律子との関係じゃないですか。

大屋 とうりで。ぼくに、二塚さんが最近論文を送って
きますけれども、違うな、違うなと思って。

内海 二塚ね。

大屋 ええ。

内海 個人的に親しみを持っているんですね。

私は、連中の中じゃ一等蜷川に世話かけて、一等み、
ともない、自分が醜態を演じたときに、とにかく蜷川が
かばってくれたという意識があるんで、とてもそばにい
ようとは思わないけれども、ほかの人よりは蜷川を大事
にしましたがね。理論的には、ほかの人だれも批判して
ないから、私が蜷川批判の役割りを買ったみたいです。

やっぱり蜷川という人は癖がありまして、いいときは
いいんだけど、ちょっとな気に入らないことがあると、
とことんまできらいなんですよ。

松尾のことをテレビでののしっちゃってね。松尾とい
うのは副知事で、一生を蜷川のために費したような男で
あよ。気に入らなくなっちゃうと、見境ないんだな。悪い
癖で、私はいつでもそういう点での蜷川を自分の反面
教師だと思っているんです。私もやりそうになるから。

(笑)

大屋 そういえば、ぼくなんかも危ないな。

内海 自分ですぐに論理体系つくっちゃって、「あいつは
悪いやつだ」なんていい出すんです。その論理が、はた
から見ているとおかしくしょうがない。事実に基づか
ないんだ。やっぱり蜷川というのは観念論者だなと思っ
た。(笑)

ときどきはやっぱり困りましたね。松尾のことなんか。
この間納骨式の後でみんなで話したとき、男の予がいな
いからオレかわりにいうけれども、蜷川はどうも周囲に
いた人間のことを悪口いっちゃって、ああいうことはい
うべきことじゃないって、私はそこで蜷川の悪口いった
よ。それいっておかしいとおさまりつかないんです。だ

って、自分の第1の子分で、秘書課長、出納長、副知事とやってきた男が、何だかちょっと気に入らないって、「あのやろう、顔向けのできないことしやがって」と、テレビでどなっちゃうんだ。政治家なんてものは時の勢いでなれるんだな。(笑) そんな気がしますよ。決して大人物じゃないんだ。西郷隆盛が大人物だという意味の大人物じゃないですよ。小人物なんだ。すぐに敷居してね。あれで28年間知事やれるんだたら、オレは50年ぐらいやれるなと思っちゃう。(笑)

森 政治的じゃないわけですね。

内海 それから、負けおぎらいでしようがないんです。少しは娯楽を持たなきゃいけないと医者かなんかにいわれて、将棋をやり出した。私たちとやると負けるんだ。くやしがつて、将棋の本買ってきて、勉強そっちのけで一生懸命将棋の勉強始めるんだ。後ではずいぶん強くなったよ。そういうバカみたいな負けおぎらいのところがあつた。自分の第3子を扱うときに、いつでもそれがあつて、蜷川はあのときああやっただけれども、あれがいけなかったんだなんて。何人か本当に蜷川を恨んでいるやつがいますからね。蜷川の方が悪いんですよ。

だけと京都というところは三高、京大でなくちゃいけないんです。そこへ水産講習所から入ってきて、できるというので京大の先生になつたんだから、ずいぶんいじめられていますね。話聞いていても、ナンバー高校から来た人と、教養の構造やなんかが違うんです。それはしやうがないですよ。それだけに庶民的なんだろうけれども、大体三高はお公家さんですからね。

蜷川の口ききで残してもらいまして、残してもらった

ころには、1週間分の原稿が1晩で書けるようになった。あなたも経験があるかもしれないけれども、アルバイトというのは勉強の邪魔になるね。いつでもそれが頭にあるんですよ。土曜日の夜の8時ごろから2時ごろまでかけて、1週間分、6回分書きちゃうんです。平気で書けるんだ。いまはあれだけの腕ないですよ。結構大向こうが拍子するようなものが書けるわけ。ところがいつでも頭にある。いつでも、これは記事になりそうだなというのを探して新聞読み、雑誌を読む。本当に勉強に集中できない。だからやっぱり勉強に集中しようと思ったら、アルバイトはしないことだろうな。そのかわりどんな問題を出されても、インフレーションだろうが、恐怖だろうが、戦争だろうが、何だろうが、一種のシェーマを持っていてバツと片づけることができたけれども。

とにかくやらされたのがハーバラー。ところが経済原論は、やっぱり河上さんの『経済学大綱』というピドソースとリチャアノフで読んだわけだ。高田保馬なんというのには軽べつして相手にしないで、何が需要曲線と供給曲線の交点だ、需要曲線は価格の曲線じゃないかというような批判をやって、(笑)相手にしないわけですね。とにかくあまり尊敬する気になれない先生でした。後では高田の講義をもっとまじめに勉強しておけばよかったと後悔しましたかね。

森 彼は九大にも来ていたんですか。

内海 九大にいたのよ。九大の社会学の先生。

森 そっちが本職なんですか。

内海 本庄栄治郎が河上を追いついた後、彼を連れてきたんです。

大屋 高橋さんの転任のときに話が出たよ。高田保馬が大内さんに手紙を書いてこさせて……。

内海 京大事件の後で、高田保馬が学生をつかまえて、「どうだ、まいったか」というようなことをいった。いま考えても教師らしい態度ではなかった。沖電気の社長をしている山本なんか、いまでもそのときのことをくやしそうに話しますよ。

後期オーストリー学※もハーバラーも聞いたことない。ほかの本を読んじゃいけないで、それを読んで、いまでもできないけれども、ドイツ語はできないし、そのときは必死になってやった。それこそ一行にろつも辞引を引いて、一生懸命ハーバラーを読んだ。いつまでたっても進まない。ようやく何かぼんやりわかって、あの論文の前の論文を書いたんです。それで恐る恐る持っていったら、5〜6行読んだと思ったら、「何だ、これ」といって原稿を投げ飛ばされた。(笑) それからまた初めから読み直して、そのときのノートがいまでも残っているよ、泣き泣き訳したノートが。

大屋 初めの方のあれ全部読んでないですものね。初めの方バツと読んで、「これはもうダメ」って。

内海 「おまえは新聞記者だから、いいかげんなこと書く」といわれたよ。結局3度目ぐらいにようやく採用してくれて、「経済論叢」に載った。いま読んでみたら、自分にわからなくなっている。(笑) いまでも、「経済論叢」に載った2つの論文は読んでもらいたくない。ところが、高木秀玄があれ見つけやがって、「何だ内海、あの論文はって。(笑) だってわからないで書いているんだからね。

それで結局、カウマニとか、ザンダーとか、要す

るにオーストリー学派の方法論的基礎に気がついて、そのときにラエーバーやっただす。それで方法論的個人主義とかなんとかという、ほかの人よりはいわゆる近代派の方法論が早く手についたわけ。使用価値の大きさを比較するという問題は、いまだによくわからないな。何しろ、オーストリー学派についての素養皆無でハーバラー読むのは無理だよ。今度、あまり恥づかしいから、ハーバラー、フラスケンパー、両方とも訳文をそろえてあるから、もう一度書き直そうかと思っている。恥を残して死にたくないからね。(笑)

満州で書いたのは蜷川の本のいいかげんなデフォルメです。それで建大にいたとき、一度だけテキストをつくったことがあるんだ。『統計学概論』というのを書いたことがある。そのテキスト採しているんだけれども、私自身のところにももちろんないし、だれか建大のテキストを持っていたやつがいたらと思っているんです。要するに講義用のプリントですよ。

大屋 中川敬一郎とかは？

内海 彼も持ってないだろうな。

統計処へ行っ、て、そこで嵯鉄の連中がやられちゃう。それから、私のすぐ上にそのときいたのが大塚讓三郎で、これも桜花県農事合作社でやられちゃう。やっているうちに、何か関東軍が調査機関連合会をつくれというわけだ。いきさつは覚えてないんだけど、私と小島が相談をして、とにかく嵯鉄以外の調査機関をぐっと集めまして、嵯鉄はもちろん入っているんですけど、満州調査機関連合会というのをつくって、そこで「調査」という機関誌を出しました。その第1号に、蜷川の口ま

ぬして「資源調査と統計調査」とかいう、えらいいいかげんな論文を書いている。その論文を書いたら、いまの日産ですけれども、満州重工業で講演をしてくれと頼まれた。そこで何か国民経済バランスの話をしたんですが、その講演要旨が日産の機関誌に載っていますよ。これは全く私が戦犯的なことを意識してやっているんで、正しいと思っ、てやっているんじゃないんだから。それはもう満鉄事件の後です。

いまの大塚譲三郎の後に、近藤清成という資源課長が来たんです。これはずーと満州建国組で、ロシア語系といわれたんだ。ハルビン学院の前身かなんかを出ている人。これ、なかなかの人物でして、われわれ結構親切に扱ってもらいました。終戦後に、私と小島と代元正成が近藤清成の家に招かれたんだな。隣の部屋へ入っていったら、そこにマルクスだのレーニンというような本があるんです。近藤さんがこんな本読むはずはないと思って「何ですか」といったら、「いや、子供がこういうのが好きで、私はあまり大ぜい知らないけれども、何人か知っているから、そのうち紹介してやろうと思っているんだって、こういう話なんです。

近藤さんは何年いましたかね。どうもはっきり覚えていないんですが、何か日系県長って、県段階の長を日系にしたんです。ちょうど根本竜太郎が、あれはモンゴル系ですから、内蒙古の方のどこかの省に日系省長かなんか出ていたんですね。そのときに、いままで県長というのはロボットの中国人に決まっていたのに、近藤さんが出ていって、奉天附近のどこかに行った。小島に聞けばわかるんですが、どういうふうな関係だったか覚えていま

せん。

大屋 その子供さんはどなたですか。

内海 それが、メーデー事件のとき堀へ突き落とされて死んだ法政大学の近藤君なんですよ。子供は殺されちゃうし、何かしょんぼりしていました。近藤さんという人は、たしか後に鳥居製菓に勤めていたと思うんです。身に災難を受けた方です。近藤さんに世話になっているので、藤沢かどこかに住んでいるんで、小島に訪ねてってもらったことがある。小島から手紙が来まして、近藤さんが奥さんにつまづいて出てきたけれども、もう半身不随で口もきけない、話に行っても話もできないよといったのが最後として、そのまま間もなく亡くなられた。

大塚譲三郎の方は、監獄から出てきて、終戦後に中国共産党の東北に何かの仕事を一時していて、日本へ帰ってきて開拓団の引き揚げの仕事をしていた。いつの間にか統計とは関係ないところに行っていた。ですから、満州国統計処にいた人間で戦後に統計と関係を持ったのは、私と三國君、小島君ぐらいじゃないかな。

それで日本に帰ってきましたけれども、頭陀袋ひっかけついて、沖縄から真すぐ鑑川のところへ……。東京へ帰ってきて一等初めにやったのは、国民経済の仕事です。その時は稻葉さんが安本へ入っちゃっていて木村が私のために用意しておいてくれた統計班長の仕事が無くなった。ですから、留守部隊を小林義雄と木村太郎がやっている。それと併行して日農の調査機関をつくらうとして「日本農民問題研究所」という名前だけの研究所をつけたのですがそれが、お金がなくなっちゃったんで、国民経済の囑託ということにしてもらって、そこを使っている。

ました。それもやれなくなっ、結局解散しちゃっ、たんですけれどね。

大屋 稲葉さんというのは、昔からそういう傾向があっ、たんですか。

内海 あれは産労の京都支局です。産労右派ですよ。その産労右派というものが国民経済なんだ。相棒は今野良蔵ですから。今野良蔵は産労左派ですからね。それが企画院にいた岡崎文勲をかって、企画院から机までかつぎ出したんですからね。それで稲葉を中心にできたのが国民経済ですからね。

大屋 稲葉さんという人は相当な策士なんですよ。

内海 それでも結局、自由主義的な態度が資本家に気に入らないんでしょうね。結局最後には、クーデターみたいにして追い出されたでしょう。いまでもときどき国民経済の同窓会がありますけれども。私の妹は国民経済で佐藤武夫の助手だったんです。あれ農業問題やっていますでしょう。私も妹のおつき合いみたいにして、一応囑託であつたんで、妙に義理がたく。いまでも国民経済から『経済情報』とか『国民経済』とか、それこそ貰うと一月に何千円て払わなくちゃいけないんですけども、全部ただでくれるんですよ。だけど行、ても、知っている人は庶務課長している女の人一人しかいないんです。知っている人全部入れかわっちゃった。

私たちが出入りしていたことは、着鉄事件の三月がらすとかいわれる代元正成がおそこにいた。そうしたら、うちの妹が人も犯人の一人なんだけれども、よせばいいのに、「赤旗」に国民経済赤旗読者班とかなんとかいう名前でお金を出したんですね。そうしたら、いきなり経

団連か日経連が来て「お前らの中にアカがいる。アカを追いつたなければ、お前らのところに援助しないぞ」といつてきた。そして、そのとき、代元正成が、その第1号で追いつたんです。彼が「8000万人」の編集者になつたんです。それで私と大橋のところへやつてきて、そうしたら大橋が、北川・増山批判書くというわけだ。大屋「8000万人」というのは、そういう系列で生まれてきたわけですね。

内海 系列は前からあるんだけど、編集部へ代元が入つたわけ。大橋があれを書いて、私が世論調査の批判を書くということになって、事実私は書かなかつたんです。そこで書かないで、もう一つどこかの委託調査みたいなので、やっぱり大橋が同じ原稿をそっちにも出して、そのとき私は、何か集団論について推計学を批判した論文を書いて、それが私の推計学批判の最初の論文です。それで『国民経済』へ書いた『主観価値説と客観価値説』とどっちが先だったか覚えてないけれども、最初に『国民経済』へ書いたんです。後で『エコノミスト』の『対決する2つの経済学』へ書いた。内容はほぼ同じものです。指数論を2つ書いているんですよ。

そのときもう一つ、『国民経済』はちっとも売れないから、じゃオレ売れる原稿書いてやろうといて、あのときまだ農地改革のあとでして、『農業危機と農業恐慌』という論文を書いたんです。そうしたら後で井汲さんが、内海、これを私の編集する論文集に入れていいかということ、それにちゃんと載っているんです。そうしたら一夜にして農政評論家になっちゃった。(笑)それで『家の光』が原稿頼みに来た。私は『国民経済』に載ったら

売れそうな記事を書いたんです。別にそれほど一生懸命じゃなかったんだ。それで『供出恐慌をめぐって』を『地上』に書いたんです。(笑) 東京というのはすぐ専門家になれるところだなと思った。そうしたら、いま絶版になっちゃっているが、青木文庫の『日本資本主義論争史』の戦後編の文献目録に、私の『農業危機と農業恐慌』が入っているんだね。

大屋 守典さんじゃないですか。

内海 守典じゃない。早稻田の男ですよ。いま名古屋大学の先生しています。「社会主義運動文献史」なんかを書いている人だ。一時封建論争の専門家で袖山米(?) 的な見解だった。日本資本主義論争に私が登場したことになっちゃって、東京というのは本当にこんなでもないところですね。すぐに農政評論家になったりなんかする。東京に出てきてから、そんなものをずっと書いたわけです。

その前に京都で、民社党の永末がまだそんなに旗色はつきりしていなかったときに、「サーバー」という雑誌を出したんです。それで私帰ってきて、蜷川にすぐその仕事をやらされたんです。蜷川が編集ということになっていまして、何だか世論調査をまとめるという、いま自分が読んでもわけのわからないもので、『インフレ理論とインフレ対策』という論文をそこに書いています。それは、社会党と自由党のインフレ対策がどう違うかということが骨子です。

それから今度は、ドッジのときですね。あのときはもう北大へ行っていたんです。妹が国民経済者に勤めているもんですから、妹と一緒に帰ろうと思って、上野駅にお

りていきなり国民経済へ行、たんです。そうしたら井汲卓一と山田亮三が何かコリコソ相談しているんです。ドアあけて入、ていったらとたんに、「内海、インフレ収束したが、どうなる」というんだ。「何いっているんだ。矛盾がそのままあるんだから、押さえつけたってインフレは再燃するさ」というと、「おっ、それ書け」というんだ。3日か4日のうちに書けというんですね。それで「インフレ再燃の危機」というのを書いたんです。(笑)

森 インフレ論の権威になった。

内海 権威ですよ。私が「インフレ再燃の危機」を書いて、山田亮三がインフレは当分再燃しないだろうと書いて、その両方を何か総合したようなことを井汲卓一が書いた。(笑) いまでも出ていますけれども、日本経済新聞社の委託で、無署名で「景気観測」に書いたんです。

内海 とにかく北大は、あの時分共産党の杉原憐一が大変幅をきかせていたんです。法文学部ですからね。経済学科というのは法文学部に従属していて、伊藤俊夫が高岡周夫の義理の兄弟なんです。高岡周夫というのは、有名な高岡熊雄さんのせがれです。彼は満鉄、私は満州国でして、満州でつきあっていたんです。そうしたら高岡周夫が何かいったのかどうか、岡部さんの方からの推薦で私は北大へ行ったのです。24年の6月だったと思うんです。それで、自分がずっと考えてきた問題をゼミでやろうと思った。

私は、前に申し上げたように、唯物弁証法と統計方法との関係が私の問題意識で、こ、ちでは岩崎允胤やなん

かとテーマが近くなるのです……。私が初めに気がついたのは、弁証法なんてわからないけれども、万物は流転するんだという考え方が蜷川にないじゃないかということです。量と質との対立物の闘争とかそんなこといわず、蜷川のいう大量が運動しないじゃないか、それが最初の手がかりです。

私は旧制の最後の博士でしょう。間に合わないから博士論文を早く書けというんだね。何でもいいからすぐ書けというんで、何だか知らないけれども、自分の思っていることを1週間で100枚も書き飛ばしたんじゃないか。それまでにいろんな下書きなんかあったけれども。それが最初の論文で、考えてみると、簡単なことが落ちるもんだという気がしましたね。きっと私の理論も何か大事な簡単なことが落ちているんじゃないかと思えますけれども。

蜷川的大量というのは4要素で規定されちゃうんだね。だから流転すると考えると、どうしてもつながっていかなくちゃまずいんだ。そうすると、静態というのはつながっているものを従に切っただけのことで、動態と離れた静態というのは意味がない。それを考えて、さらに時系列は、蜷川みたいに単なる解析的集団の反映じゃなくて、歴史的過程の反映を意味しているといった方がよっぽど簡単じゃないか。蜷川の批判は実に簡単なことだったな。それに気がつくまでに何十年もかかった。それで今度、弁証法の諸規定というのをだんだん入れていくことを考えたわけですよ。

たとえば、いま私考えていることは、数理統計でイコールというけれども、イコールというのは同一性だろう。

弁証法では、差別と離れた同一性というのは認めちゃいけないわけだ。そうすると、イコールというものであらわされるようなものは差別なき同一性だからね。/対/対応の考え方というのは、同一性だけあって差別はないわけね。そうすると、どうしても数学的論理というやつは一面的だということになるわけよ。そこをはっきりいってやろうというようなことを一生懸命考えて、「数理哲学の基本問題」とか読んでみると、何だかむずかしいことを書いてあって、そういうわかり切ったことをいってないじゃないか。それは蜷川で味しめたんです。大先生のいうことだから、そんなつまらない穴があるとは普通思わないんだ。理論というのはそういうもんじゃないですか。わかってみると実にくだらないことだね。

2度目に、今度は毛沢東の「実践論」とがロディーの「認識論」を読んで、この規定を統計方法の中に組み込めるんじゃないかと思ってやってみたんだ。ところが今度は、岩崎さんがしきりと持ち上げている、その後でソビエトで「認識論」を書いた人（コアニン）が考えているのと違った考えをやっているからね。それをもう一度勉強して、あそこに組み込む理論を直さないといけない。そっちから考えてみたら、何かいやにややこしいものが非常に簡単なんですね。

私は自分としては、いままでは統計的方法がどうしても統計とくっつくというたてまえでいたのを、統計的方法を統計学から切り離しちゃっていいこうと思っている。そのかわり、ほかの方法もちゃんと出てきて、抽象的分析的方法の材料になる統計というのが主流なんで、こっちは傍系だ。蜷川みたいに、大量観察があったら必ず統

計解析やうなきゃいけない。そんな理論はないんで、大量観察の結果は抽象的分析的方法で研究されるんだ。それが社会科学の常道だということをおうというわけだ。森 内海先生は佐藤先生とか是永先生とか、山田喜む夫。そういう方々を育てていかれるプロセスと、内海理論ができ上がるプロセスは、ちょうど時代的にはくっついてるわけですね。やっぱりそういうやりとりというものの活性の中から生まれたのでしょうか。

内海 そうですよ。その最初のゼミに入ってきたのが佐藤博なんです。そのときには北川敏男を使ってたんです。例の「季刊理論」に載った「統計学の前進のために」。それを1行ずつやっただけです。それがキッカケで、佐藤は推計学批判を始めたんです。彼は原論が好きなんです。それで統計学ちっともやらないんです。結局彼の博士論文というのは「ツガンバラノフスキーの経済理論」で、統計学じゃないんだ。佐藤も是永も海軍経理学校なんです。2人とも海経の3年生と2年生なんです。

大屋 じゃ、ぼくと一緒ですね。ぼくは経理学校じゃないんですけども。

内海 佐藤の同期の井上目という男は、大学院をやめて高校の先生になっちゃいました。これはいま「アイヌの教育」というのを書いています。

佐藤と同期にもう1人吉武というのがいました。これがマルクスがきらいで、イギリス労働党が好きで、私のところこあまり大学院の特研究生が集まっちゃうんで、吉武だけ新川士郎のところに戻したんです。そうしたら結局、私とは縁がなくなっちゃったみたいで。同窓会には入っていますけれども。いまそれが小樽の社会政策やっ

ています。そういうのを入れますと、大学の先生の数が合計15人になるんです。

大学院に籍を置いていたけれども、私は研究より教育の方が好きだといってやめて、いま小樽で先生しているのもある。私といまでも仲よくしていますけれども。必ずしも大学院に残った人がみんな学者コースを歩いたわけではないわけですよ。

私もバタバタしゃべったからね。酔っ払ったみたいになっちゃったから。ただ、彼らは私をあまり尊敬しなかったということがあるね。それがよかったんです。だから、私のいうとおりや、たやづはだれもいないわけですよ。

たとえば山田喜志夫なんというのは、統計学やりゃしない。全然やらない。産業連関論だけだろう。あれは経済原論の一部としてやっている。もともとあれは農学部で遺伝をやっていたんです。彼は農学士さんなんだ。遺伝で、われわれとは無関係に推計学やっていた。何か民科かなんかの講演会を組織して、数学科の連中を呼んできて、スチルチェス積分なんてのを一生懸命講演させて、その司会みたいなことやっていた。私のところへやってきてそういうものやるのかと思ったら、「統計なんかつまらないや」といってやらなかった。

あの人はいっぱいと思うな。いろんなもの研究するときに、先に本の目次ができちゃうんだね。1章、2章、3章……の先の構成ができちゃう。だから、ずっとそのとおりやっていくんだからムダがないんだ。すばらしい力量だね。森「インフレーション」もそうですね。

内海 大体のものの目次は、勉強するときにできちゃっているな。

大屋 偉いもんですね。

内海 私なんか、書きちゃって、さあこれどうまとめようかなんて、思いつきで後から……。笑

田中章義は、学校出るまで一生懸命学生運動やっていました。それで「人民の中へ」なんていっていた。何になりたいといったら、総評の書記になりたいというわけだ。それでいいだろうというので、岡十万男が友達で、その時分に「労働経済旬報」をやっていたんで、岡のところに、総評の書記になりたいという男がいるんだという話をしたら、その時分、「旬報」と岡とまずくなっていて、がやがやしていたんだ。そうしたらそっちの話がましまらないんで、そのころ試験がわりと楽だったから、しばらくうちの学校に残っていた。先へ行って勉強して、税理士と公認会計士を取って、それで労働運動やったらどうだ、あの商売は統計学より食えるよというんで、経営統計から始めたわけ。そうしたら上杉が、統計も会計もできるやつがいるそうだなということで見い手がついた。一体どこで見い手がついたかといったら、経統研の総会だよ。それが市場になっちゃうんだな。

森 人身売買ですね。

内海 聞いていて、「おい、あれいいじゃないか」とかいって……。笑 ころちはそういうつもりはない。あれやらせないと度胸がつかないし、勉強もなかなか進まないだろう。やらせたら、結果においてはあれがみんな市場になっちゃったんだな。

森 内海先生のところがどうかわかりませんが、女性の方何人かいますね。田中先生の奥さんとか、伊達木さんとかいう方は北大でしょう。

内海 彼女は私のところだよ。いま東経大にいる高山洋一の女房の高山朋子なんというのもそうです。

伊藤と近は妙に仲がよくて、大学院中ずっと同じ下宿にいた。近は苦勞人で中学校行くのに雪の中を1里半とかって。きついきつい。酒井がそうなんですけれども、そういうふうに育った連中というのは人に容赦ないんだね。だけど、人を世話するという点からいえば最高だね。居城を連れていったのも近だし、函館うさールへ木村和範の先生の東郷を連れていったのも彼だしね。とにかくがんばり屋でがんばり屋です。

伊達木はちょっと事情があって、向こうが出てこなくなっちゃった。伊達木、いまもう労働省の課長ぐらいになっているだろう。

しかし、私のところにはあまりできるのがないんだ。大学院入って勉強はしたけれども、学校の成績が1番、2番というのはあまりいいないよ。一等悪かったのが山田喜志夫なんだ。彼はすでに経済学部の学生の時、一応大人なんですよ。どの先生の講義も気に入らないわけだ。もう猛烈な勉強をして、全部の答案にその先生の批判を書いたら、全部「良」だった。私は批判書かれると、喜んでみんな「優」をつけちゃうんだ。いいかげんな批判でも、批判するだけの態度が結構だって。やっぱり、先生というのはそういうものじゃないらしいな。それですごく悪い成績なんだ。だけどやっぱり一等できるだろう。

大屋 山田貢さんはどのあたりですか。

内海 喜志夫と同じぐらい。

あのクラスは10人のうち6人国家公務員試験に受かったんだが、だれもその資格を使わないんだ。それでみんな

な拓銀だの銀行かなんかに行っちゃった。山田真が研究所に入りたいというんだ。それで、彼だけが研究所、つまり農林省の総合研究所へ入るために、国家公務員試験パスしているという資格をつかったんですよ。だからあれは研究室へ残ったことはない。農林省からこっちへ移ってきたら、企画庁へ回されたんだ。そうしたら、企画庁へ回された彼の仕事は、大臣の答弁の下書きを書く係なんだな。予想問題というのがあって、そのとき大臣が読み上げりゃいいやつを書くんだ。そうしたら、恐って「やめる」というんだ。オレは自民党の支持者でもないのに、そんなもの書けるから。あれときどきしんでもないと考え出すんだ。大まじめなんだね。冗談でも本気にしちゃう男だ。「企画庁はいやだ、やめる」といって聞かはないんだよ。官庁で来たときは国立へ行かなきゃ損するし、いままでの経歴が消えちゃうから、もうちょっとしんぼうしろっていった。

今度いよいよ経済原論の本をつくるというので、近経とマル経と半分ずつ書きなさいといった。それは前からの宿題なんだ。いまのは、近経だけ、マル経だけのものだろう。そんなのしょうがないから。どこまでやれるかは知らぬけれども。農工大の教員の経済原論の先生だよ。

近の次は岩井だ。これが例の60年安保のときのあばれ者の1人だ。あれと横本広がそうなんです。横本は、甲田で唐牛建太郎と一緒につかまったんだ。バカみたい。食堂にたてこもって壁をぶちこわされて、警官につかまったら、向こうは、人物だということもちゃんと知っているんだね。「おまえ帰れ」というんだ。(笑)

もう礼儀正しくて、人当たりもいい。あの男が闘争な

んかやるかと思うような男だけれども、腕まくりしてやり出したんだ。丸幌でも、デモといひゃ、やっが先頭に立って、「安保反対ッ」とかやって、大通りの警察置の前で「おうーッ」とやる。それで、あまりそういうラフなことばかりやるんで、銀行に入れといひゃ北海道銀行へ入れたんです。

東京へ来る前に、いまの消費者センターの前身が消費何とか研究所といひゃたんですね、そこの総務課長をしていたのが京大時代の飲み仲間で、農林省のレッドパージを食ったような男で、久しぶりで飲んだわけだ。「オレのところのやつだれか採らないか」といひゃたら、「人柄さえよければ採ってやる」といひゃので、横本にいひゃたら、銀行から解放されるといひゃ喜んで。それで来たら内海がトロツキストを送り込んできたと。あれは、あのときの唐牛全学連だろう。共産党が警戒してね。そんな男じゃないんだよ。横本を警戒するバカがいるんだよ。

(笑) ふだんはデモなんかやるような面構えじゃない。講道館の創設時代の門番をしていた者のせがれなんだ。柔道9段とかなんとかいひゃって、彼自身もあんな小さな体しているけれども、3段か4段だよ。

大屋 一番最後が木村君。

森 杉森さんと木村和範さん。

大屋 岩崎君はもう定永君の最初のお弟子さんですか。

内海 ええ、そうです。そういうあれで、いまそれから離れちゃっているのは、いまの吉武といひゃのと、もう一人、卷手大で教育学部にいる武田。これは教育大の方から来まして、大学院は上杉重二郎のところへ行ったんです。あれが教育史ですから。そこでロバート・オーウ

エンやりまして、ロシア語がすごくよくできて、「ロシアにおけるロバート・オーウェンの研究」を書いた。

しかし考えてみると、ブルジョアもつくったし、いろんなのをつくったけれども、政治運動家だけは私のところから出なかったね。内海は立身出世主義の教育をしたというんだね。おまえのところは本当に出世が早いというんだな。何かと思ったら、学生運動をやると、「おまえそんなつまらないことやらないで、一生やる気で用意しろよ」というようなことをいったのが、結果においては立身出世につらなっただことになっちゃったね。つまり、学生運動やるなよというわけなんだ。オレやって後悔したから、おまえやるなということだ。いやもう共産党が私をにらんでにらんで、あいつのところへ行くとみんな転向しちゃうって。(笑) あのゼミ行っちゃいけないというんだ。

まあ、随分いろんなタイプのいろんな出身の人がいますが、不思議とみんなの協力がうまくもたれているのです。その意味で、みんなえらい人間たちだ、と実は、自分の弟子たちを尊敬しているのです。何がむづかしいって、一つの間人間関係を永く平和に保ってゆくことほどむづかしいものはありませんからね。「俺だけが偉くなるう」という人がいないんで、お互いに相手をたて合っているせいかもしれません。

御存知かもしれませんが、私どもの研字研究室出身の人たちだけで、今までに、三、四回、協同の労作を発表しています。第一回が「社会科学のための統計学」で、これは私が編者ということになっています。第二回目は「講座、現代経済学批判」の全三冊(日本評論社)で、

あれは、私の環歴記念論文集ですが、あのときの日評の編集長だった炭谷さんが、「環歴記念論文集」なんて銘うったのはでは、絶対に売れないぞ、それをひっこめて出すなら、日評で出してやろう」と忠告してくれたので、環歴云々は序文の中に入れることにして、表紙に銘記することは止めにしたのです。唯一冊、三冊を合本にして、私に贈呈してくれた方だけに、皆皮のところへ金文字で「内海庫一郎先生環歴記念論文集」という文字がはいっております。それから、今度の際には、三回目の協同労作で、「経済学と数理統計学」というのを二冊、第一冊は「経済分析と統計的方法」というのを、「経済統計研究会の機関誌の「統計学」を出している「産業統計研究社」から出しました。これも序文のなかで、この二冊が、私の古稀記念論文集であることが書いてあります。これは企画してから、対論をかさねて8年かかったそうです。前のものも、今度のものも、私は後からこういうものが出来た、と知らされただけで、その内容には、私はタッチしておりません。

とにかく、私どもの研究室出身者の協力ぶりには感心しています。しかし、もうそろそろ一人一人が、独立の著作を書く仕事にとりかかってよいのではないか、と思っております。もうそれだけの蓄積をみんな一人一人が持っているのですから。

我々の研究室の歴史や、経、統、研の歴史などについては、しづね「統計学」の誌上を借りてでも、もっと詳しいはなしをすることに致しましょう。

木村太郎先生

聞き手

伊藤 陽一

坂元 慶行

森 博美

昭和57年3月20日(土)

於 法政大学

I 蜷川ゼミナールと蜷川統計学

II 戦後統計制度再建期

III 地方自治体の統計活動

— 埼玉県経済調査会にふれつつ —

IV 今日の統計学に対する注文と当面の関心

Ⅰ 蜷川ゼミナールと蜷川統計学

(1) 蜷川ゼミナール

伊藤 本日はまず蜷川先生ご自身と、蜷川理論、蜷川ゼミ、それに木村先生がどういうふうにかかわられたかということと、大きなまとめとして幾つかお伺いしようと思います。前回もある程度お話はうかがっていますので、ダブったところは調整することにして、改めて順次進めて行きたいと思うんです。

木村 蜷川ゼミナールに集まる当時の学生はなによりもまず進歩的な学生が多かったことです。蜷川先生が河上肇先生の系譜を継ぐ残された数少ない教授の一人であり、優れた経済学者であることは、学生達も知っていたからです。それに当時は、高等学校で学生運動をやって退学処分になったりすると、大学に入ることもむづかしかったのですが、京都大学ではかなり大膽に受け入れていました。しかし経済学部には入れても、ゼミナールに入るとなると、ほとんどの教授は敬遠して、事実上はオフ・リミットでした。蜷川先生だけが門戸を開いておられたわけですね。そこでそういった学生達は、みんな蜷川ゼミの門を敲くことになるのですが、この連中は苦勞しているだけ優秀な人が多く、蜷川ゼミの理論的水準が高いということは評判でした。同時に一面では、あそこは赤い連中はかり集っているから、就職にはよくない、と敬遠する学生も少なくなかったようですね。(笑) いづれにしても、蜷川ゼミを志したのは、先生が進歩的経済学者で、そこに入ればマルクス経済学も勉強できるということが最大の理由で、たしかに現習名は、統計学と会計学が一年おきに掲げられてはいたけれども、初めから、統計学

や会計学を勉強しようと思って入った連中はあまりいなかっただけではないでしょうか。少なくとも私なんかは、統計学なる学問についてはまったく無知だったし、蜷川統計学がいかなる統計学であるかも知らないで、ただ蜷川先生に接触したいということだけで志望したわけです。蜷川先生にははなはだ申し訳ない話なんですが――。(笑)

セミナーも、それぞれテーマを自分で選んで、まず研究計画を発表せよということだった。その研究計画の発表の中で、統計学的なテーマを選ぶ人もいるけれども、全くそうでない人もいる。必ずしも統計学というものだけがテーマに選ばれていなかったように思います。というのは、セミナーに入るのは二年からなんですが、統計学の講義も当時は二年次から聴くようになっていたこともあったと思います。統計学に対する興味や関心も、セミナーによってというよりも、蜷川先生の講義によって目覚まされました。まずなによりもそれが社会科学であり、経済学の諸問題と大きく関連していることを知って、これなら俺でもなんとかやれそうだな、という気になり、親近感も湧いてきたわけです。

そこで最初は、「軍需生産と再生産」といったテーマで戦時下の再生産を理論的に問題にしようなんて考えていたんですが、途中でテーマを変更し、当時、経済評論という雑誌に連載されていた寺島一夫の「国民所得と再生産」、あの論文にちょっと触発されて、再生産論から国民所得論へという傾斜で、2年のときにそれなりの論文を書いて報告をやりました。3年のときには、それからさらに転化して生産指数をやるようになって、卒業論文も一心生産指数論を書いたわけです。

ただ、これはどうしてそういうことになったのか判らないけれども、ぼくの場合には助手の先生から、アルマン・ジユランの「トレテ・ド・ラ・スタティスティーク・ゼネラル」を訳せといわれて、2年間おれに大分へばりついてました。これは自分の関心と別個にいけば仕方なくやったんだけれども、全然わからなくて、統計学とはいかにつまらないものかという意識を持っただけで、興味も何も湧かなかったですね。(笑)

それから生産指数の方は、先生の物価指数論に追随して、労働価値説の立場からその実質的な意味を再検討し、その上に立って科学的な算式を定立しようと試みたものですが、これには関係文献を漁ったり、考えたりして、とうやら満足できるような結論を得ることができました。戦後国民経済研究協会にいたときに書いて発表した「生産指数の理論」は、それを土台にしたものです。

伊藤「それでは、ゼミナールのなかで、蜷川統計学について議論をするようなことはなかったのですか。」

木村「少なくともゼミナールの場で議論をするようなことはなかったですね。しかしゼミとは別個に4・5人集まれば、喫茶店や飲み屋などでいつも喧々ガクガクとやっていました。当時は本などを開いて談論していると、その本がどんな本であろうと、警察からいんねんをつけられる恐れがあったので、本なしで飲み屋をやっているのが一番安全だったのです。

仲間は大体、上杉君や大橋君、その他三、四人の人達でした。しかし、先生は、こういったような議論を外でやることには、大反対で、危険だから絶対やるな、もしやりたければ、我家に来てやれ、ということで、こちら

も得たりとばかり、先生のお宅にぬがり込むようになり
ました。(笑) 週に一回か二回、伺っていい曜日を選んで
下さって、その日になると夜の七時頃から、ゾロゾロ集
まって、時には徹夜して議論したこともあります。先生
はほとんど二階に上って勉強しておられ、時々降りて来
て議論に加わって下さるくらいだったけれど、奥様はお
茶を出したり、時には夜食を出して下さったり、あるい
は話の聞き役になって下さったりで、本当に大変だった
と思います。もっとも、いつも真面目な勉強の話ばかり
やっていたわけではなく、先生は将棋が好きだったので、
将棋もよく指しました。先生の好敵手は上杉君で、上杉
の方がちょっと上だったのか、先生は負けると大いに口
惜しなって、お前の将棋はズルイズルイといっていられ
たのが思い出されます。

伊藤 「統計学についてはどんな議論が中心だったのです
か」

木村 「矢張り集団論が中心だったと思います。それに先
生も、統計学の基本問題は集団論だ、と常々いっておら
れました。そこでわれわれも、先生の集団論についてか
なり突っこんで質問したりした。

伊藤 どういう点でですか。

木村 いまから思うと結局、統計対象論と統計調査論と
のギャップがどうも解けてない、殊に、先生の「はかる
べき大量」についての考え方は、その当時からみんなも
引っかかっていた問題の一つだったと思います。学問論
としては、戸牧潤の科学方法論について議論したことも
ありました。

ただその当時の雰囲気からいうと、ぼくらは大学に残

って統計学をやろうなんていう気持ちはなかったから、かなり気楽に議論も吹きかけられたし、先生もそれに応じて下さったけれども、大学に残って統計学をやろうと思っている人達は、なかなかそうもゆかなかったようです。未だ統計学のほんの一部しかやっていない癖に議論を吹きかけるなんておこがましいと考えられていたのかも知れません。概して先生は、普通の学生に対しては非常に優しい先生でしたが、大学に残っている弟子にはとても厳しく、それは意識的に区別されているように感じました。だからわれわれも大学に残ったりしたら大変だぞ、なんて話し合ってもいました。(笑)

しかし先生からすれば、それなりの理由があったわけですね。当時は大学院生ではとても生活できなかったから、金のない学生は助手となって残るしかないわけですが、助手になるためには大体卒業時の成績が４番以内でないといけない。といわれていました。しかもこれは一応役人になるわけだから、思想経歴などあると当然教授会では敬遠される。だからそういった学生はさらにもっといい成績をとっておかなければならないわけだ。先生はそれを楯にして、なんとか教授会を押し切って助手に採用するんで、だからボウらの近い年次でいうと、一期上の上杉君は、助手にはならなかったけれども、経済学部はじまって以来の優秀な成績をとって先生も喜んでおられたし、ボウらの期では、三年になって焼川ゼミに入ってきた河野健二君がトップで、二番が大橋君だったようです。河野君は無傷だから、どこにでも入れるということで、二年次のときに属していた谷口吉彦先生のところにゆくことになるが、傷もちの大橋君は、焼川先生のほかには

ゆき場はないし、もともと蜷川先生のもとで勉強するつもりで京都にやってきた人です。だから蜷川先生としても当然、採りたいんだが、同じゼミの学生だけに、大橋君が一番であってましかっただらしく、ボクに不満を洩らされたこともありました。二番でもござすよ。しかしこうやって大学に残ったとしても、いつまでも助手や院生でおいっておくわけにはゆかない。当時はいまのように受け入れてくれる大学はそうないし、まして経歴者には門戸が狭い。そこで勉強せよ勉強せよということになり、マナーまで細々と指示されることになるわけで、指示される方も大変だったでしょうが、先生もまた大変だったろうと、いまになっと思っています。「みんな呑気でなあ、俺の気持ちなんか全然わか、ちゃいないよ」とこぼされることもありました。

伊藤 ちょっと戻りますけれども、学部のゼミナール自身は、たとえば人数とか、構成とかはどういう形だったんですか。院生がそこに出ているんですか。

木村 私達のときは一学年10名ぐらい、二、三年合同のゼミでしたから、併せて20数名ぐらいの出席だったと思います。これに対して先生の側はまず前田（勇太郎）さんという一番先輩の講師兼副手の方がいて、その次に馬場（吉行）さん、岡本（愛治）さん。二年次の中には内海さんや有田さんも居られたが、三年次には内海さんは建国大学に行、て居なくなり、有田さんは病気で休まりましたが、ほかにも、東洋経済新報や、満州国などから留学に来ている人がいつも三、四人は列席していて、学生側からすると、なかなか威圧感がありました。同時にこれらの人々は、蜷川先生の講義にはすべて出席され

るので、われわれ学生もそれを見習って、単位をとったあとでも毎年聴講する習慣ができていましたが、これは更にためになっただと思っています。また講義が終ったあとに、これらの先輩たちと一諸になつて、芝生の上に車座になつて話し合ったものですが、こういった先輩達との交流からも大きな学門的な刺激を得たものです。学生が講義を繰り返し聞くということは、現在でも大切なことだと思ふんですが、いまは大学院生でもなかなかやりませんね。もっともここの講義がつまらない、ということもあるかもしれませんね。(笑)

伊藤 それで、レポートを各自研究計画に沿つて出して報告して、それをみんなで議論するという形ですか。

木村 そうですね。

伊藤 堀川先生はかなり議論を……。

木村 セミナールではほとんど何もいわれなかつたな。師範代格ということで、出席の先輩格の人が批判的な意見や質問をして討論のきっかけを作り、むしろその人達と学生との間、あるいは学生同志の間で議論を交すことの方が多かったように思います。それはかなり丁々発止とやるわけですね。先生は横からそれを聞いておられる。整理は夕方されたけれども、ほとんど口は出されなかつたような気がします。議論を聞いていて、後から、もっと勉強せよといかぬ、とかねんとかいわれたような気もするんですが――。

伊藤 時間としては夜に及ぶということもあるんですか。

木村 ええ、大体ゼミは時間の方もかなり自由で、どっちかという夜にや、た記憶の方が多いくらいです。4時ごろから始まつて8時か9時ごろまでや、たんじゃな

いですか。終、ても興奮が残っていて、喫茶店や金があれば飲み屋などへ行って、続きを論じあったものです。

伊藤 先ほど有志で蜷川理論の研究会をやった、中心は集団論云々ということでしたけれども、「統計学概論」などはテキストになるわけですか。

木村 いや蜷川統計学そのものをとりあげて研究会をやったというようなことはありませんでした。ただその頃大橋君が盛んにマイヤーをやっていて彼がマイヤーについて報告するから、お前達もそれについて意見を言えというようなことで、大橋君の下宿で研究会をやったことがあります。また岡本愛次さんを中心に、マルクス主義的な考え方をとり入れた最初の簿記理論といわれるスガチーニの本を読んだりしたことはありましたが蜷川統計学を対象とするような研究会は一度もやらなかったと思います。というのは、蜷川統計学については、研究会というような形をとらないでも、すでに話したように、いろいろなかたちで論じられていたからだと思います。それと当時のわれわれにとっては、むしろ、この革新的な蜷川統計学を基礎に、どうやって従来の伝統的な統計学を批判してゆくか、ということの方に主要な関心があったからだといえるでしょう。

(2) 蜷川統計学

伊藤 「歴史的には戦後、1950年代に内海先生の『弁証法』的な観点からの批判があり、1960年代には、統計学の基礎論としての蜷川統計学の再検討的なものがあったと私は思います。戦前の様子はさきほど先生がいわれた状況も背景に考えれば、大分わかってきましたけれども、どの程度お弟子さん自身が蜷川統計学を体系立てて検討するということがあったのでしょうか。

木村 それはほとんどなかったでしょうね。というのは、当時においては、蜷川統計学が一番新しい統計学であると同時に、ほかに匹敵してそれに対立してやるような議論自体がそれほどなかったからだと思います。同時に卒直にいわしていただくと、戦後、蜷川統計学に対する批判があったことは確かですが、それが本当の批判になっているかどうか、私は大いに疑問に思っています。批判というよりは批評といったところではないでしょうか。「弁証法」の問題だ、て、それを統計学のなかに、どのように入れるかが、解決されなければならないし、「二元論」といった批判も、「集団」を対象とするかぎりでは、そうかも知れないが、統計を首座において考えれば批判にはならないでしょう。ボクの考え方なんかは、むしろ蜷川統計学の継承、発展だと思っているんですけどねー。」

(笑)

伊藤 蜷川先生の講義の中身は、いわゆる蜷川統計学をずっと説明されたんですか。

木村 「批判の基本問題」や「概論」を教科書には使っていますけれども、講義自体は、経済学の話、たとえば主観価値学説の批判や時事問題などをとりあげ、学生の

興味をひきつけながら、それらと関連して、統計学の問題に入っていくといったやり方でした。先生のこの俗流経済学批判や時局批判は、さめめて含蓄も深く、また辛辣で、それだけを聞きに来る学生も多くて、教室はいつも満席で、熱気に溢れていました。統計学については、技術的な細かい問題については、あまりふれられませんでした。社会集団と解析的集団の関係、それに対応する統計調査法と統計解析法との関係などについては、特に力を入れ、黒板に図を書いて説明されたので、蜷川統計学の骨格は、本を読むより、よく理解できたくらいです。ついでにいえば、当時の蜷川さんの統計解析論についての中心的な問題意識は、その頃、日本でも流行しはじめていたハーバード景気研究所流の景気予測法に対する批判でした。『ああいう抽象的な分析技術を適用しても、現実には全く虚構以外の何ものでもない』ということをおそらく強調されていました。過去がこんなだったから、これからもこうなるというんだが、社会現象についてはそんな保証はでき、こないですよね』といった調子で、学生も大いに湧いたものです。先生が強調されたのは、それと代表値論です。これは現在もっと誰かがやらなきゃいけない研究課題だと思ふんですが、これは先生が本のなかでいわれている以上に、平均論批判で、最頻値とか中位数とかの代表値としての意義をより高く評価し、平均論としてではなく、代表値論というかたちで取り扱うべきであることを主張されていました。

伊藤 蜷川理論そのものについての話を先にしめくくりたいと思うんですが、蜷川理論の形成過程と現状分析の関係、日本資本主義論争に関する蜷川先生とゼミナール

の対抗とですね。10年代を過ぎると、それも学会全体として弱くなっていくということだろうと思います。日本資本主義論争なんかとかかわりを、蹇川先生は自分みずからの関心、みずからの理論の中に取り込むという点でどうなっていたのかというのが前からの疑問なんですけれども。

木村 先生がわりと関心を持っておられたことは確かです。水産経済学なんかの分析についてはかなり用語も注意深く使っておられる。ただぼくも、そのころ資本主義論争に学生なりに関心が非常にあった方だし、それでいぶん先生に食ってかかったこともある。

先生の考え方を想像すると、講座派に対しては批判的とはいえないけれども、じゃ労農派かというところでもない。だから、われわれ学生、といっても私だけかも知れないが、先生は、その問題を回避しておられるんだろう、と思ったりしていました。というのは、この問題は単なる経済理論上の問題というよりも、政治的党派性の問題でもあったからです。だからわれわれ学生は、元氣よく、講座派だ、労農派だ、なんていっていましたが、京都帝大の教授としてはそう簡単に発言できることではなかったと思います。しかし先生は、論争の経過や論点については、かなりよく知っておられたようです。そうして、そういった論争成果もある程度、踏まえながら「水産経済学」を書いています。つまり、資本主義段階における残滓としての封建制を問題にされているわけですが、その限りでは確かに講座派的ではないと思う。やっぱり労農派の前資本主義といわれる向坂理論に近いかも知れませんね。

伊藤 「水産経済学」とかそういう実質的な議論になれば、かかわらざるを得ませんね。現状を論ずるわけですからね。統計学そのもので見ていくと、統計利用論のところで時系列解析論批判ということもさることながら、資本主義論争の中でのいろんな統計利用があるわけですね。そういうものを取り込むというふうにはしないのかするののか。

木村 それは全然入ってないですね。それは先生の、たとえば農家集団というものの扱い方自体にもそういうものは出て来ないでしょう。農家一般になっちゃうわけですよ。その点は「水産経済学」を書くときには関心があるけれども、統計学はそのパターンまでは入っていかれてない。それは、先生の統計学自身の学説的な面から来ていると思うんですけれどもね。

伊藤 そうですね。蜷川先生のスタートから留学をふくめての形成過程から見るとちょっとずれているかなという。むしろ学説史に影響されて蜷川理論ができ上がって、それが一人歩きといっちゃちょっと強過ぎるんですけど、日本の現状分析での統計利用とはひとまず離れたところで蜷川理論が形成されたのではないかという……。

木村 「それはそうかも知れません。しかし、それはその当時の統計利用の状況というものが理解されていないから、いえることではないでしょうか。蜷川先生の統計学の構想が出来上がったくるのは恐らく1930年頃だと思いますが、それ以前に日本では民間の経済学者が統計を使って、論争をやるなんてことはほとんどなかったのです。あ、たとしても、ただ経済解説という程度で使われていたにすぎない。そうして30年以降になって急速に

統計を利用した分析が盛んになるわけですが、それを促進したのはマルクス主義経済学者であり、その頂点が、資本主義発達史講座だった、といってよいでしょう。だから先生は、資本主義論争で、やっ自分がか考えていた科学的な統計利用がおこなわれるようになった、ともいわれていました。だから蜷川先生が資本主義論争から、統計利用を学びとるなどということは時期的にもあやふさあり得ないことと思うんですが――。

蜷川統計学の先進性は、なんといっても、統計を作る支配者の立場に立っていた統計学を、統計を見させられ、使わせられる、被支配者の立場からの統計学におきかえた点にあると思います。そうして統計を見たり使わせられたりする、大衆を踏まえて、彼らに統計を批判し、利用する基準を与えるのが自分の統計学の学問的課題とされたことだと思うんです。また蜷川統計学は先生のそういった姿勢を理解し、前提にして読まないし、その意義もとらえにくくいんじゃないですか。

これはしょっちゅう先生がいわれていたけれども、われわれの取り組むべき学問の現代的課題というのは何か、それは学史的な発展段階とその上に立ての現代における実践的な課題とから規定される。だから統計学の現代的課題も、統計学の発展史と、現在、統計を見たり使ったりする一般大衆の立場から、何が必要かを考えて、規定しなければならない、というのが先生の一貫した考え方ですね。学史は非常に重要視したんです。それは基本的には、マルクスが、「余剰価値学説史」と現実の実践的課題――その主体はいうまでもなく労働者階級ですが――とから経済学の課題を現実したことを下敷きにされてい

るものとしてぼくらは素直に受け取っていました。

伊藤 「蜷川理論には、利用する者の立場という言い方がありますね。利用といっても……。

木村 利用よりも、講義やなんかで聞いた限りでは、「見る者」の方が先生には強いと思うんですよ。そこがまた内海さんとちょっと受け取り方が違うかも知れない。確かに本を読んで、本の構成から見ると、作る者と使う者との問題が大きくとり扱われて、見る者があまり登場しないような論理構成になっているけれども、結局見る者の立場から、作り方や使い方を問題にしている。統計を見る者のために、その批判の基礎や使い方の限界をあきらかにしようとしているんですね。しかも先生にとって見る者というのは、ごく普通の国民一。

伊藤 非常に大衆というか庶民的。

木村 庶民ですよ。

伊藤 したがって統計を研究する、国民的立場から統計を使っている分析する、というのではないわけですね。

木村 「統計利用ということを経済解析に限定し、蜷川統計学は統計解析に目標をおいているといったような批判もあるようですが、私はそうは受けとっていません。先生の本の序論に書いていることからわかるが、講義のなかでも、たとえばその頃流行したハーバード景気研究所流の景気分析法をとりあげ、ああいった手法は単なる時系列を、純解析集団としてとりあつかうもので誤まりだ、と強く批判されていました。単なる統計値の系列を純解析的集団と同一視して取り扱ってはいけない、というところに力点があるのです。

伊藤 いろいろわかりますけれども。

森 読んでいますと、なかなか統計を使いにくくなってきましたよ。ですから、信頼性とか正確性とかいっても、平たくいえば誤差の問題なんですけれども、じゃどれくらいの誤差として評価するのかというような観点はないでしょう。質的誤差なんですよ。誤差が量的に評価できれば、じゃこれくらいとして使おうということになるんですけれども、信頼性で理論的にここがおかしいなということになってきますと、どう使うかということになると、なかなか使いづらいということになってしまいます。

木村 同時に、統計解析論そのものもぼくらにほとんど僅かしか教えられなかった。先生はどうせ教えても学生には興味がないだろうということで教えられなかったのかも知らないが、(笑) 僕らは、統計解析法などは純解析集団的な仮説の上に立ったものだから、あまり勉強する必要もないんだなというような勝手な受け取り方をしていたな。(笑) ぼくらの段階では、いまいったようにハーバード学派に対する非常に強烈な批判を展開されていました。当時それが、マルクスの恐慌論に対立する形で移入され、恐慌も予測できるし、予防もできる、といった説も広がり出していたので、マルクス経済学をやっていた学生にとって、これをどう批判するかは、矢張り大きな関心事でした。だから蜷川先生のこの景気予測法批判は学生にも大いに受けたものです。

伊藤 そこでも支配的な傾向に対しての批判ですね。

木村 すいぶん先行的な批判だと思うんですよ。最近『統計利用の基本問題』などを読み返してみると、そういう問題意識は、1920年代の末頃からもうすでにあったん

じゃないかと思うんです。つまり日本での統計利用というよりは、国際的な水準で統計利用を問題にしている。と同時に、蜷川統計学が、その体系のなかに純解析的集団を含めているのは、数理解析に妥協するもので、なくしてしまっただ方がよい、といった批判もありますが、私はそれには反対です。いうまでもなく、蜷川統計学においては、非現実的で、観念的な純解析的集団を設定することによって、数理解析そのもの、形式主義を明らかにすることに成功していると思われるからです。純解析集団をとってしまうと、現実におこなわれている数理解析に対する批判的な基礎も、なくなってしまう。ただ、抽象的な批判になってしまうものではないでしょうか。

伊藤 たとえば現状でそういう時系列分析の支配的なものがあると、それに対して強烈な批判をする。その上で、それでは自分たちはどういう景気予測をするのか、景気予測というのは適切な例ではないかも知れませんが、自分たちはそれではどうするのかということが問題になってきます。この点に対して現在では蜷川理論が何を留意したかが検討点になる。出版後もう何十年もたった理論に要求するのはちょっと酷なのですがこの点が、いま要求されており、ある意味で蜷川理論の読み返しがあるわけですね。だから見る者の立場というか、庶民的な立場で、政府統計やなんかいきなり信用するな、支配的な景気予測というののもあれではまずいぞ、その辺を、支配的であればあるほど批判するというのは非常に重要ですが、それで研究者的といいますか、それなら批判の先をどう進むかということと、蜷川理論はどう答えるのかということですね。

木村 焼川先生は、なにも統計を利用するなとか、予測
 をしてはいけないとか、言っているわけではない。統計
 を利用する場合に、その統計がなにをいかに反映してい
 る数字であるか、ということをよく吟味、検討した上で
 利用せよ、と言っているだけです。政府は往々にして統
 計を掲げて、その政策の正当性を説明しようとするが、
 大衆は統計が示されれば、正しいかのように思うが、そ
 れではいけない、ということです。経済予測における統
 計利用でも、ただ時系列をトレンドに要約し、あるいは
 こういったトレンドを集めてモデル化し、そこから予測
 するようなやり方は、統計の背後にある経済実態を抽象
 したやり方だと言っているだけです。現在ではもっと精
 密化された計量経済学的なモデルに基づく予測法がある
 といわれていますが、現実にはそれもすでに敷北しちゃ
 っているのではないのでしょうか。企画庁などでやってい
 るものも、実際にはわれわれがやっているように、まず
 いろいろな経済指標の間近の動きを検討分析して現状を
 把握し、さらに今後の経済政策的な要素をも加味して予
 測判断をする。さらにこういった予測にもとづいて必要
 があれば、具体的な数量的な当てはめをやっていくとい
 う形での予測ですよ。だから、ちっともモデルなんか使
 ってやっていない。焼川先生は、こうい、た数理的解析
 に対して、一定の限界があることを理論的に明らかにし
 ただけです。だから、もし経済予測法が、もっと科学
 的なかたちでできるとすれば、それはそれとして大いに
 やっていいのじゃないですか。焼川統計学はそのこと
 を決して排除しようとしているわけではないと思います。
 それと同時に、現段階で予測というものが必要になって

きたとしても、それが蜷川統計学にないといって批判することもおかしいんじゃないでしょうか。それは当たり前だと思うんです。

伊藤「蜷川統計学が、統計の解析的な利用に消極的だ、ということになると、やっぱり見る者の立場というふうに規定してよいのでしょうか。

木村「少なくとももっとも新しい統計学概論の中であらわれている限りでは、解析論は、きわめて限定すべきで説明されており、積極的な展開ではないと思っています。

坂元「集団論で述べておられた？」ということを前回話されましたが、そのことじゃないんですか。

木村「さっきいったように、解析的集団と、客観的存在たる集団との区別については、先生は絶対に正しいと思っておられたでしょうね。この二つの集団の区別を、前提にして、むしろ存在たる社会集団の方が何かという点については、必ずしも十分に詰められてはいなかったのではないかというような気がします。解析的集団については、意識的に構成した集団ということで、またその局限に純解析的集団をおくことにより、はるかによく整理されていたと思うんですがー。

だから当時の蜷川統計学に対する批判点も、むしろ存在たる社会集団の方に向けられていて、それについては森田先生や米沢先生の批判もあったし、名古屋の郡菊え助氏も、自然集団を排除するのはおかしいじゃないかな。

森「集団の範囲についての……。

木村「そうですね。これは自然データと社会データとを同一視する従来からの統計的研究法的な考え方からする

と、どうしても納得できないことだ、たと思います。統計という特殊な数字資料から出発する蜷川先生からすれば、むしろ当り前の話だ、ということになるのですが、そこでこういった批判に対して、蜷川先生は、自然に開くデータの集団や存在する自然的集団には、そこに問題とすべき社会科学的な問題性がまったくないじゃないか、というような観点から反批判されています。先生は、これを一刀両断したと思っただろうと思いますが、相手方がそう思ったかどうかは問題で、相手側にすれば、何故、社会科学的な問題だけをとりあげるのか、自然科学的な問題はなぜとりあげないのか、といった疑問は当然残るはずです。つまりこの議論の段階で、先生は、先生が自ら原点とされた統計数字から離れてしまっているような感を受けます。

毎藤 前回のヒヤリングの際に、蜷川先生は「庶民の経済学を標榜し、京大アカデミズムへの批判を持っていた」との発言がありました。蜷川理論もまた学説史に深く依拠し、かなりアカデミックと受け取れるように思いますが、いかがでしょうか。いまのお話の「庶民の統計学」というのは、大分わかってきましたけれども。

木村 先生がアカデミズムとして批判されるのは、権力や体制の上に安住して、学問のための学問をやっているような人々のことです。それは結局、体制擁護のための学問であって、人民大衆のためのものではない。マルクスやエンゲルスも、その学説を展開するために、きわめて深く学説史に学んでいるわけだが、それは人民大衆の解放という立場に立ってやっているので、学問のための学問としてやっているのではないわけですから、だから蜷川

先生は、むしろ学説を重視されていたし、論述も学問的にすぎるようなところもあるのですが、そのこと、アカデミズム批判とは少しも矛盾はしていないのです。それともう一つは、先生の性格もあると思いますね。京大にいながら、先生は当時から西陣に出ていていろんな講演会をしたり、西陣の中小企業問題の解決に取り組んでおられました。そういうような話は大学のなかで勉強しているだけでは、できやしないというようなことを、いつもいっておられたです。そういう大衆と話ができないような学問は学問じゃないという問題意識で、これは多分に蜷川先生の育ちや性格とも関係している。いわば東京でいう下町庶民的なものが非常に好きでした。だからぼくら学生は、蜷川先生は、事ごとに大衆大衆というけれど、先生のいう大衆はマルクスのいう労働者階級ではなくて、むしろ中小商工業者のような階級じゃないだろうか、などと陰で話してゐたこともありました。いまから思うとはなはだ公式主義的な見方ですがー。

森 組織労働者じゃないわけですね。

木村 リなくとも労働者の階級意識というよりは、中小企業者を含めたもっと幅広い階層として考えられていたように思う。

坂元 中小企業主の意識ですね。

森 企業主の方ですか。

木村 いや中小企業主だけではなく、それらも、さらに中小商人、農民やさらに労働者をも含めた階層という意味です。

伊藤 書いたものを見ると、非常にアカデミックとはいえないませんか。

木村 一面では、先生の論理構造というのは非常にアカデミックですよ。それは持っていないきゃダメだということも非常に強調されました。特に学問的な概念の厳密性とかね。だから一つの言葉について、いい間違えると厳しいし、勝手な抽象的な議論はいつでもできるけれども、学説的なものをきちっと踏まえないう議論は全くダメだ、けんかもできないというような皮肉をいうわけだ。(笑)

伊藤 京都府義会でも、学説史のうんちくで反対派を説教していましたね。

木村 学説史を根拠にするというのは、確固たる信念だったと思います。だから弟子はつらかったと思うんですよ。みんな学説史の方へ向かなきゃならなかったようです。

伊藤 学説史の方に耽溺してしまって、現実の方へ戻ってこれない、そういうケースもあった。

木村 実際にはむずかしい問題だと思います。統計学説は、それぞれの歴史段階での統計の生産と利用に関する実践を理論として受けとめたものですから、現代においても多くの教訓を持っていることは疑いない。しかも、現実の実践に当っては、なんらかの過去の学説を手引きとして出発しなければならないことは確かです。しかし、統計的実践の目的も対象も、歴史のなかで変化、発展しているのですから、過去において正しかった学説が、今日でもそのまま適用できる保証もないはずです。それは現実の統計実践のなかから、学びとり、統計学の学問体系のなかにつけ加えてゆかなければならない。蜷川先生による統計学の、作るもののそれから、見るもののそれ

えの転換は、一面ではたしかに階級性の問題もあるけれども、統計を作る者の時代から、見る者の時代への転換という当時の時代的な変化をとらえていることもあきらかです。

伊藤 また前後しますけれども、蜷川ゼミ出身の諸先生の蜷川理論の受け止め方については、先ほどのお話で大分わかりました。しかし、現在では各自の研究方向は相分かれていると思うんですが、戦前段階に、弟子の諸先生の間で、蜷川理論についての共通の認識がどこまであって、すでにどこまで違いがあったのかということを知りたいと思います。

木村 蜷川統計学そのものについては、弟子たちの中では余り大きな認識上の違いはなかったんじゃないですか。少なくとも積極的な批判は持っていなかったんじゃないですか。

伊藤 批判もさることながら、前回にも幾らか話が出ているようにすけれども、重点の置き方が違いますね。片一方に、内海先生が方法論というか、哲学の方にぐっと引きつけていく、有田先生も一つのパターンですし、私なんかは、木村先生は比較的上杉先生の方に近いというか、方法論でずっと切ってはいないというんですか、大橋先生が真ん中辺なのかなという感じもしたりして、その辺の違いが……。

森 いつごろ出てくるんですか。はっきりした色分けみたいなものは戦後ですか。

木村 もしそれがあるとすれば、戦後でしょうね。つまり、蜷川さんの統計学に弁証法がないなんて、内海さんは学生時代からもいっていたような気がするし、私自身

も統計学自体が歴史的なイデオロギーだというような議論もした憶えはあります。しかしそれは、ただ蜷川統計学の外形だけをとらえての議論にすぎなかったと思います。統計学という学問をどのように規定するかという問題は、結局この学問にどのような内容をめたえるか、という問題なんだから。内容とすべき統計的な諸問題についての一定の視野が必要なのに少なくとも、この段階でめわれわれには、そうい、た基礎も問題意識もほとんどなかったといっているのではないか。そうい、た問題意識は、自分が統計学の講義をやるようになり、それをどのように展開するかを追られてはじめて出てくるのではないのでしょうか。

ですから、大橋君にしてもアカデミズムに入るとやっぱりそうならざるを得なくなってくるし、ぼくも統計学の講義を持つようになってから、自分の講義の展開のために考えることを追られてくるので、それは当時にはおそらくあり得なかったんじゃないかと思いますね。

当時は何といっても、蜷川統計学がもっとも先進的で民主主義の上に立った統計学だという認識についてはみんな一致していた。だから、そのほかの統計学はみんな俗流統計学だという認識も、先生の見解をそのまま継承して疑いませんでした。お恥かしい話ですが。(笑)

伊藤 戦後、蜷川先生は行政の方に入られて、弟子の諸先生が、時期はいろいろ違いはありますがけれども、統計学をしばらくやっていくうちに、それぞれ力点の置き方が違って出てきたというわけですかね、木村先生は、戦前から幾らかやっぱりリパーソナリティーの違いがあるように思います。

木村 いや、パーソナリティーは、ぼくだけじゃなく、みんなそれぞれ大いに違ってますよ。(笑)

坂元 蛭川先生は、なぜ戦後統計から離れていったんですか。

木村 これも、ぼくは必然的だと思うんですね。やっぱり先生は統計学者だけでも飽き足らない。まあなによりも、経済学者でありたい。しかも、実践的な経済学の指導者でもありたいという非常に広い問題意識を持っておられましたからね。逆にいって、そういう問題意識を持たなきゃいけないということもぼくらは聞かされていました。初めに知事になったのは偶然だろうけれども、入ってみれば、先生の性格が一番よく伸ばせる世界だったんじゃないですかね。先生は学問と政治とは区別してないですよ。やっぱり、自分の学問体系の実践過程だというふうに考えられていたようです。

学問というのは、抽象的なものではなく、大衆に役立つものでなければならぬ。そうして正しい学問であれば、いかなる学問でも必ず大衆の役に立つ、というようなことは、大いに聞かされました。

伊藤 先ほどの、戦前の西陣に出入りしていた、その辺のある面では延長、全面発揮というか……。

木村 そうですね。たい蛭川先生にとっては、統計学や経済学を学ぶ場合も、西陣で中小企業に対する場合も、中小企業庁の長官をやられたり、知事として地方自治にかかわる場合も、いつもその姿勢、つまり大衆の立場に立った反権力的な姿勢には変りはないわけですよ。それが違った場所や違った形で発揮されているだけだといってもいいかも知れません。ただ常人では、そおいろいろ

な方向で力を発揮することはできないが、蜷川先生はそれが出来る人だったということではないでしょうか。

坂元 そうはいっても、もしも統計に対して燃えるものがあつたとすれば、自分の気持ちの中で何かやっぱり決着がつかないですよ。実践といえどそうかもしれないけれども。

木村 先生は自分の体系の中で、自分なりに多くは解決すべき問題は残してはおられたかもしれないけれども、基本的には統計学についてはこれでいいんだという自信はものすごくあつたですよ。そのかわり、少しでも傷をひねくられると、物すごく怒つたです。(笑)

坂元 内海先生が、蜷川先生が戦争前に、何か自分の理論が発展できなくて苦しんでいたということをおっしゃっていたんですよ。要するに、それで行き詰まりを感じたとか、そういうことはないんですか。いや、これでもう全部おしまい、一切わかつたと……。

木村 基本的にはそうだったんじゃないかと思います。内海さんがいっているのは恐らく昭和13年頃のことかと思いますが。先生の逝去後、出版された『蜷川虎三の生涯』という本は実にいい本ですが、あれにも書かれているように、先生は昭和14年段階までは万年助教授で、かなり大学の主流からは排除されているような空気が強かった。それは、蜷川先生が基本的には、河上肇教授の系譜につながる左派グループの指導者と見られていたためですが、一方、より左翼的な側からすれば、蜷川はなお、徹底として批判するむきもあつたようです。蜷川先生が、当時としては、マルクス・レーニン主義について、もっとも造詣の深かった学者の一人であり、またその統計学は、

レーニンの史的唯物論や殊に、ロシアにおける資本主義発展事から多くを学びとっており、そのことは、先生の口からもしばしば聞いたこともあるくらいですが、にもかかわらず、その論文や著作のなかでは、その名前が使われたことはほとんどなかったといっているくらいです。蜷川先生が時局に対して、きわめて慎重だった現れですが、その点を批判する人もあったようです。先生の悩みもそういった面での行き詰まりではなかったかと思えます。統計学体系そのものとしては自分なりに完成したと思っておられたんじゃないですかね。

あとはそれをどう補強していくかだけである。先生の学問的な行き詰まりということではなく、あの様な時勢のもとでは学問的に良心的であろうとすればするほど、学者としてはそうして特に京都大学教授としては、ゆきづまらざるを得なかったと思われる。また蜷川先生が、そういった問題で悩んでおられたということは、先生の奥様からも伺ったことがあります。戦時体制の中では、先生はいわばもてたというか、使われたというか、一面からいってかなり信用されている。当時は学問的にしっかりした人ほど使われるという傾向があって、特に蜷川先生は、単なる統計学者というよりも、統計学以外の経済学的な知識と廣い視野を持っておられたから、滿鉄調査部や満州国の中堅官僚辺りの強い支持がありました。私もそのお蔭で滿鉄調査部に入れていただいたわけですが、伊藤 統計学以外の経済学に広く関心を持っており、学問だけでなく実際的にも動いておられる。蜷川先生ぐらいになれば、たかが統計学で行き詰まるというようなことじゃないんじゃないですか。

木村 ぼくもそう思います。

森 戦前の西陣でしゃべっておられた内容というのとはどういうことなんですか。

木村 ぼくらの学生時代の蜷川先生の講演についてはまったく知らないですけども、戦後になって大学を辞められてから、西陣の業者達の要請で再び、懇談会を始められました。財戦で、業者達は混乱するばかりだった時期ですから、この懇談会での先生の話は、彼らに大いに希望と勇気をあたえたようです。当時、関係されていた方々の話から推測すると、その時期時期における問題ととりあげ、先生独自の立場から解説を加え、それに対する中小企業の対応の仕方を示唆するというような形のものが多かったようです。特に中小企業といえども、日本経済や国際経済の動向に関心を持つことを強調しておられたようですが、これについての蜷川先生の見通しは、きわめて的確で、まったく信頼できた、ということでした。しかも、そういった話を、先生独自の皮肉や比喩などを加えて、面白く話されたようです。戦前の先生の話も、恐らくそういった時事解説を軸としたものだったと思います。

伊藤 蜷川門下生達の蜷川統計学に対する戦前の受けとり方については、大体理解できましたが、それでは現在蜷川統計学をどのように評価されているのでしょうか。またそこから継承すべき重要なことは、なんだと思われたいられるのでしょうか。先生方の間にはさきほど述べたようにかなりちがいがあると思っていますんですがー。

木村 蜷川統計学の受け取り方として一番重要な点だと思うのは、やはり、ぼくがいつも主張しているように

統計を統計学の首座に据えたことだと思っています。もちろん集団論としての社会集団論と解析的集団論との区別の問題や、統計調査と統計解析論との区別の問題といったものも重要な問題ではあるけれども、そうしてアカデミズムの人々はむしろそっちの方に問題の重点を持っていっちゃっているようですけれども。一般大衆の立場からごく素人的に考えれば、統計学という学問が、統計から出発するという発想は、むしろ常識的であり、したがってまた実践的な要求にも応えるものではないでしょうか。少なくとも大衆は集団なんかならば出発はしないでしょう。だからこの点こそ蜷川統計学が、従来の統計学に対して、もっとも革命的な点だと思うんです。

伊藤 いまの点について、すでに蜷川先生のお弟子さんの中で、どれだけカ点を置いて受けとめるかという違いが現在ではあるのではないかという……。そうでもないですか。

木村 すくなくとも、そうでもない、と思いたいです。統計を統計学の首座におくということを、なかなか多くの創意みtainなようにいう人もいるんだけれども、あれこそまさに蜷川統計学の真骨頂です。

伊藤 それでも、あの主著2冊からストレートに、そこが最重点だというふうに読めるかどうかもありますね。

木村 先生自身の言葉でもいっているんですけれどもね。冒頭の先生の序文で、「統計とは何か」というふうに統計から出発しているのは、統計学の教科書の構成としても初めてですよ。

伊藤 統計とは何かということを示されて、次に集団ということを書いて、その区別。

木村 つまり統計から出発することによって、はじめて統計対象として従来の社会統計学が問題としてきた集団と統計的研究法が問題としている集団とが、まったくちがった集団であることがわかってくるのではないのでしょうか。統計を抜きにすれば、社会集団と解析集団とを区別するという発想も出てこないはずです。だからこの点については、少なくとも焼川の弟子達にとっては、自明のことだったと思います。ただ自明のことであるだけに、この点についての議論をあまりしなかったことも確かです。だからもし、そういったことから、焼川統計学のこの点についての共通の認識が得られていないとすれば反省されなければならない、と思います。殊に、先生が自らの統計学を、統計の作り方・見方・使い方に関する知識の体系と規定されていることによってもあきらかではないのでしょうか。

問題はむしろ首座において統計の規定について、焼川先生の統計＝社会集団説から、なかなか脱却できなかったことにあったと、私は考えています。いやそうでもないかな。もし統計から出発するということが、明確に理解されていれば、焼川統計学は二元論だ、なんていうような批判が出てくるはずはないですからね。

伊藤 焼川先生はいしその理論についてさらにあれずまた後で補足することにして、焼川先生と日本統計学会とのかわりについてですけれども、どうでしたか。

木村 先生は、初めは非常に熱心にやられたようです。ところが、昭和10年ごろから先生は離れていかれる。少なくとも余り出られなかったでしょう。この理由はわからないですね。

伊藤 戦後はどういふふうになるのでしょうか。

木村 戦後は、實際上暇がなかったということでしょう。

森 戦前は、たとえば日本統計学会が、特殊なイデオロギーというのもおかしいけれども、それが違うことがはっきりしたということと離れていかれたとか、そういうことなんでしょかね。

木村 それもあったかも知れませんね。

森 杓見(三郎)さんみたいな人も統計にかかわってくるわけでしょう。そうすると、やっぱり戦争との関係で意識的にもずいぶん統計学会の主流と違う点がはっきりしてくるというふうに想像しますが。

木村 それも潜在的にはあったかも知れませんね。『日本統計学会の連中は、みんなお互いにお世辞をほめ合っただけで、まったくつまらん』なんていわれてもいましたから――。

伊藤 戦後の中人企業庁長官のときかな、森田先生の「統計遍歴私記」にでてましたが、戦後、予算の削減だからあるので、これには反発した方がいいというふうなことを、蜷川さんが統計学会に知恵をつけに来たというふうな一幕があったりして……。

木村 だから、統計学会それ自体は大切にしなければならぬというふうなことは、言っておられました。ただつまらないから余り出ないということじゃないかな。

伊藤 創設期の人々とは、ひとまず日本統計学会創設ということは何となく……。狭い世界ですわね。戦後まで、論争しつつある程度の関係はあるということなんでしょかね。

木村 妥協的にできない人でしたから、積極的にきらい

だということじゃなくても、話が合わない、そこまで無理に出ていくという人じゃないな。(笑)

伊藤 「吉田内閣が行政整理に際して官庁統計機構を縮小しようとしたとき（昭和24年の春頃のことだった）、蜷川氏が統計局にいた私のところへわざわざ訪ねてきて、『統計学会を動員して反対運動をやらにゃ』とけしかけられ、緊急評議員会を開いて『政党、国会、進駐軍司令部へ建議、新聞社への働きかけ』を協議したこともあった。」（『統計遍歴私記』p.106）戦後の再スタートのときですね。

木村 それは、そういう統計活動や運動は積極的にやるべきだという先生独自の姿勢の現われでしょう。先生からいへすと、統計学会の人たちはおとなしい、みんな政府に従属しているだけで、こっちから働きかけたり反対したりしないというような批判もしておられたから、批判される方からすればうるさい存在で、敬遠する向きもあったのではないでょうか。(笑)

Ⅱ 戦後統計制度再建期－国民経済協会から農林統計協会まで

(1) 国民経済研究協会時代

伊藤 「先生は大学卒業後、満鉄調査部に入られ、間もなく兵隊にとられて、敗戦の年まで大陸で軍隊生活をされたそうですが、その間のことは省略していただき、敗戦後間もなく国民経済研究協会に入られたわけですが、国民経済ではどんな仕事をしておられたのですか。

木村 国民経済に入ったのは昭和20年の10月頃でしたが、そこでまずやらされたのは、「日本経済再建計画」というものです。これは物資ごとの生産と流通とを、年ごとに組みあげ、5年間で一応戦前の水準まで復興させることを目途としたもので、いまでいう産業連関表のようなものです。稻葉秀三さんが鉄鋼・石炭・電力など鉱工業をやるから、私達に米・麦といった食糧や肥料さらに水産や畜産品をやってくれというわけです。しかもそれを今年中にやってくれということで、私と山田亮三君と三輪芳男君の三人でやることにしました。しかし、三人とも軍隊から帰ったばかりで、どうやってやるのか全然判らない。稻葉さんは企画院で物動計画をやっていたのでベテランだったわけだけれども、農業については全然判らないから、農林省の人に聞きながらやってくれというだけです。そこで三人で農林省の尾崎忠二郎さんやいろんな人々に聞き歩いてとにかくそれらしきものをデッサンあげました。昭和25年までの人口推定をやり、必要カロリー一量を基礎にして米・諸などの生産を配分し、年々の不足分を算出して、聯合軍に対する食糧援助期待量を示し、これを昭和25年までにのこにしようというような計画

でした。出来あがったものを稲葉さんのところへ持ってゆくと、ろくろく見もしないで、これを内閣の企画委員会で一緒に報告してくれという。で稲葉さんと一緒に企画委員会なるところに出て報告しましたが、稲葉さんはとうとうとやったのに、こっちは冷汗タラタラでなにを喋ったかわからないまじででした。けれども結果は大変立派な仕事だということ褒められ、農林省や通産省などから当時としては多額の金をもらうことができ、初期の国民経済の資金源として役立ったわけですね。この仕事はいまから思うと冷汗ものですが、生産統計を常給統計に分解して見ると、きわめて大きな矛盾に打ちかかり、統計の見方については大変勉強になりました。また経済安定本部ができてから、この仕事は経済計画の一次案として、稲葉さん自身が安定本部に入ってやることになりました。

伊藤 国民経済で生産指数や物価指数を作られたのはいつ頃ですか。

木村 当時はなにしろ政府の統計業務が混乱してしまっていて、現状についての統計などほとんど利用できませんでした。で、なんといっても現在の生活水準をとらえなければいけないということで、昭和20年の末頃から、昭和10～12年平均を基準とした生産指数を作りはじめました。これが戦後最初の生産指数で、G.H.Qや新聞なども一時はこれを使っていました。

敗戦直後のインフレで、物価の騰貴はものすごかったのですが、これを示すような物価に関する統計もありませんでした。日銀が小売物価指数を発表していましたが、公定価格で測っているものでまったく現実の物価を反映し

ていないんです。そこで闇価格を対象とする闇価格指数を作ってみました。これを戦前の昭和10年基準でやってみると、重工業品の騰貴率と食料品や衣料品といった生活物資の騰貴率の間にももの凄く大きな格差がある。相対的には重工業品はむしろ価格下落しているということになりました。生活物資は不足しているのに重工業の生産力は過大化している。つまり戦後恐慌の様相がこの闇価格体系のなかに顕れている。それにもかかわらず政府は傾斜生産と称して重工業中心の再建をやろうとして多額の価格差補給金をばうまいている。で、昭和24年頃にそのことを分析して、森山一郎というペンネームで、国民経済の機関紙や社会科学、という雑誌に書きましたが、当時かなり大きな反響がありました。殊に井上春丸君や宇佐美誠次郎君が高く評価してくれ、彼らが書いた「危機における国家独占資本主義」では、早速引用してくれました。しかしこれは国民経済の本来の仕事とはまったく別のことです。

国民経済の本務は、農林省その他から依託調査をとってそれをやること。統計部というのを作って、戦争中に散逸してしまっただ統計資料を集め、これらを経済統計資料というかり版刷りの印刷物にして月に回ぐらいの割合で発行したりするようなことでした。これを昭和21年から23年にかけてやってましたが、上杉君の「工業余剰価値率の算定」や大橋君の「経済循環図表」なども、最初はこの資料のためにやってもらったものです。

伊藤 「上杉先生や大橋先生も国民経済におられたのですか。

木村 「いや国民経済のなかにいたわけではないのです

が、依頼してやってもら、たんです。

伊藤 「生産指数の理論」というのを書かれたのはー。
 木村 「あれは、昭和24年頃、それまで作っていた昭和10～12年基準の生産指数の対象品目が少なく現状に合わなくなり、対象品目をふやすとともに、基準も10年に替える改訂をやったのですが、その際に生産指数というものが何を測るのかが問題となり、その理論づけのためにやったものです。生産指数は単なる平均指数ではなく、戦前に対する生産水準を示すべきものだから、総和指数に基礎をおくべきであるとして、それを労働価値説から裏づけたんですが、当時、経済企画庁や通産省辺りでも生産指数の作成を計画していたので、かなりの影響をあたえたようで、賛成する人も少なくありませんでした。そのせいかどうかわかりませんが、当時通産省の統計調査局長だった正木（千冬）さんから、伊大知良太郎氏と一緒に生産指数委員に命じられたりしました。また統計研究会で報告させられ、山田勇、高橋長太郎、鈴木諒一氏など当時専門家といわれていたと、6名の人々から、「労働価値説の生産指数なんてチャンチャウおかしい」とさんざん吊しあげられたこともありましたが、私の生産指数研究は大学時代の卒業論文でもあったんで、大いに蓄積を傾けて頑張りました。（笑）しかし衆寡敵せずと思っていたところ、戦争中にフリッシュの理論にもとづいて「東亞農業生産指数の研究」という本を書いた山田勇氏が「いやそういう考え方もあるんじゃないですか」というと、皆さん黙ってしま、たんで大いに助かりました。（笑）その点では未だに山田氏に敬意を表しています。ボクの生産指数論は、当時企画庁で生産指数をやっていた

た滝好英君が、その後「日本の経済指数」という本のなかでとりあげて批判してくれていますが、あれは基本的には批判ではなく、むしろボクの認和説を評価して、宣伝してくれたものと思っています。(笑)

(2) 農林統計協会時代

伊藤 「先生が国民経済研究協会から農林統計協会に行かれるのは、国民経済で農業をやっておられたからなんですか。」

木村 「ええそういうことだろうと思います。農林省にはもっともよく出入りしてましたから——と、同時に国民経済では稲葉さんが、2年ばかり経済安定本部の方にゆき、そのあとボクが多少とも経営の手伝いのようなこともやっていたので、経営の方も——これはまったく晒大評価だったわけですが——うまくやれると思われていたのかもわかりません、」

伊藤 「農林統計協会というのはどんな目的で設立されたんですか。研究機関だったんですか、」

木村 「これは農林関係の統計機構を大きくして、農林省が農林省統計調査局を作ったこと、密接な関係があるんです。戦後、占領軍の勧告もあって、各官庁はそれぞれで各行政機構のなかに分散していた統計業務を集中し、一本化して、統計調査局というふうにいっぺんに局までに格上げしたわけですが、そのことによって従来、各行政業務のかげに隠れていた統計業務というものが、はじめて行政機構の表面に踊り出ることになり、統計事務官も日の当たる場所に座ることになりました。しかし商工、労働その他の各省庁では内容的にみれば、それほど大きな変革ではなかったのですが、これに対して農林統計機構はまったく他の省庁とは比較にならぬほどの大変革でした。戦前戦中の農林省の統計課というのは、せいぜい農林省統計表や月報の編さんが主たる仕事で、農事統計や農家経済調査などは帝国農会に依頼してやっていたし、

作況調査は農事試験場の条列で、また林野、畜産、食品、水産関係の諸統計も各局でやっており、統計課もこれらの諸系統で生産されている統計を集めて統計書にまとめているにすぎなかったのです。ところが戦後、帝国農会が解散して農事統計に代るべき農業統計調査をやらざるを得なくなり、諸他の統計も統合してやらざるを得なくなったわけですから。特に重大な変革は、戦後の食糧危機の解決のために、占領軍天然資源局の指示にもとづいて、アメリカでやっている作物報告機構をとり入れ、従来の作況調査を作物統計の機構にまで拡充しなければならなかったことです。この作物報告機構をとり入れたことで統計調査局の人員も1万5000人という大世帯になったわけですから。また農地改革に備えて農地に関するセンサスもやらなければならないという状況で益々正月が一諸にやって来たようなものでした。

ところで一方では、これもまた占領軍の後押しと大内先生などの努力で、統計制度の近代化が進められ、統計委員会制度が確立されて、日本の統計は、この統計委員会を軸にして体系的に整序してゆこうという方向がとられていました。統計委員会は統計学者の中立的な委員と各省の統計調査局長や主任課長の委員によって構成されていたんですが、この中立的な委員と各省側の委員との間には、はじめから考え方の間に大きなちがいがあったようです。と、いうのは中立的な委員は、統計学者が主としてなっていただけに、将来的には内閣統計局を軸にした中央統計局の構想すらあったのに対して、各省庁の方は当面の行政的要求に対応するだけで大層わかったからです。しかも予算は行政業務から出ているから、それら

について委員会が干渉するなどは、もってのほか、というわけですね。殊に農林省は、いまお話ししたように、戦後の特殊事情のもとで、急速に膨大な機構を作らざるを得なくなり、市町村の末端にまで作物報告事務所という独自の統計組織を持つことになったのですから、寧ろ荒く、統計委員会ではもっとも強硬な反対意見を出していました。いまから思うとこの対立の底流には、農林省統計調査局の、少なくとも量的にはその主体になった作物統計というもののについての認識が充分になかったということがあるように思われます。というのは作物統計機構というのは、まったく測量組織であり、統計学者がいう統計調査でもなんでもないのに、これを統計調査として議論し合っていたむきが大いにあったからです。

坂本 「それは統計委員会が理解しなかったんですか」

木村 「基本的にはそうなんです、農林側でも、あまりハッキリしていなかったのではないのでしょうか。いづれにしても、農林統計協会というのは、農林省統計組織の中央統計組織に対する多少とも造反の産物として設立されたものといっていると思います。

従来、統計の普及事業のためには、日本統計協会があって、そこでやっていました。また各府県には府県統計協会があって、府県統計誌などを刊行したりしていましたが、その連合体として全国統計連合会というものを作っていました。それはいまでも続いています。しかし農林統計機構が大きくなると、いままでのように、これらの機関や組織にばかり頼っては行かない。独自に農林統計の普及、宣伝活動をやらなければならぬ、ということ、まず農林統計協会を作ったわけですね。またし

はらくた。それから、各府県ごとに農林統計協会を作り、全国農林統計連合会というのもできました。」

伊藤 「随分、対立的意識が強いわけですが、そういった対立は戦前からあったからではないでしょうか。たとえば近藤政正といったようなことでー」

木村 「そんなことはなかつたと思います。少なくとも当時の農林統計調査は、帝国農会に依託していたものを除けば、府県の統計機構に依存してやらざるを得なかったし、そのためには内閣統計局の協力も必要だったでしょうから。だから対立は戦後の特殊事情のもとで生じたことだと思うんですが、その背景には、当時統計行政はアメリカ占領軍の指示を受けることになったのですが、統計行政一般は占領軍のなかの経済局が担当していたのに対して、農林統計については食糧行政という点から天然資源局が担当しており、米麦から水産、林野、畜産の領域にまたがって資料提出要求があったりして、それに統計課題も答えざるを得なかった、ということもあったと思います。農林省は天然資源局の後盾にして抵抗していました。」

森 「先生も中央統計局構想には反対だったんですか。」

木村 「反対でした。現実を見いと反対せざるを得なくなつて、積極的に反対のキャンペーンもしました。」

森 「やっぱり、現場に密着した統計でないと具体的な数字があがってこない？」

木村 「統計の集積化は、とにかく統計の理念的な体系化を求めがちだから、現実的な要求からおこなわれている細部分に関する統計的実践を切り捨ててしまいがちです。統計の集積化は進まなかったけれども、その後の統計の

国民経済計算体系への集約化は、従来、そういった実践的な要求から作られていた、国全体からすれば大した意味はないが、大衆的な立場から見れば面白い統計を切り捨て、全体として統計をつまらないものにしてしまった。伊藤「それと現実にとんども事態は動いているわけですね。ある意味では現実が統計に先行しているんですね。木村「ばくも捲り統計学の信奉者でしょう。だからかなり悩んだですよ。当時は作物統計なんて全然わからないんだな。といってこれは統計じゃないというわけにもいかない。(笑) 統計は社会集団を語る数字でなければならぬですからね。だからはじめは、上杉正一郎君が、「マルクス主義と統計」に書いているように、作物統計も本来は統計調査によって、農家を対象としてやるべきもので、実測標本調査は供出のための手段にすぎない、というように考えていました。

しかし一方では矢張り不安で、諸外国ではどんな風にしてやっているか、を調べていました。そうするとどこの国もみんなみんなやり方でやっているんですね。作物統計を統計調査でやっているようなところはない。そういうことがだんだんわかってきて、こっちも自信がぐらついてきた。(笑) それで諸外国の収穫高統計の発展についてまとめてみたのが、「収穫高統計の史的発展」という論文です。後に国学院大学にいつてから書いたんですが――。

しかし測量のような方法でとらえた作物統計がもし統計だとすると、これを統計方法のなかでどう位置づけるかが問題だ。統計イコール社会集団じゃおかしいじゃないか、ということに立ち至ったわけですね。(笑) ただ統計

イコール社会集団説そのものについてハッキリと批判するようになったのは、大学にいて統計学の講義をやるようになってからで、それまではあれでなんとかなるんじゃないかなとか、とその枠内でばかり考えていました。

戦後、作物統計に実測標本調査が導入されたのが、供出量の確保のためであつたことは紛れもない事実です。当時作物報告員が農村に入つてゆくと、農民が半鐘を鳴らして抵抗したこともあつたくらいです。しかしだからといって実測標本調査法そのものが反農民的だとか、統計調査法ならば農民的だ、という風にはいえないのではないか。たとえば、昭和16年の農家統計の近藤政正とそれによる全国調査は、日本で初めての農家を対象とした、近代的な統計調査として高く評価されているわけですが、他面でこの調査が、農家を直接捕捉することで、その後の食糧増産政策や供出制度の基礎となつたことも疑いがない。供出のためには、供出主体の捕捉が前提で、単なる収穫量の推定だけでは駄目だからです。しかしそんなことを考えるようになったのもあつたことで、あまり大きなことはいえないんです。(笑) 当時は、矢張り、統計調査主義でした。(笑)

伊藤 「農林省サイドと統計委員会との意見の違いですけども、どう見たらいいのでしょうか。農林省が現実、具体的にはどんどん既成事実というか、現実を攻められて、その動きの上に乗っかって、現実の統計づくりを進めていったというのはわかるんですけども、片一方で、全般的な統計の整備とか、調査項目の調整とかを議論しているのも見ておかなきゃならないですね。」

木村 「そいふそうですね、

伊藤 農林省は、農林統計については自分たちの処置を進めながら、統計についても一応考えつつ、各省どうぶらの線を行ったことになるわけですが。統計委員会の議論をどういうふうに受け止めたのか。現実離れの空論というような……。

木村 空論ということでもないけれども、統計学者や統計委員会は、当然常時的な状況を前提にしてバランスとか体系を考える。しかし敗戦後の数年間というものは、あまりにも非常時的なしかも大きな行政課題があって、それに対応しての統計生産の必要に迫られていた。特に農林統計はもっともそれが大きかったといえるでしょう。食糧の供出問題もあったが、農地改革に備えての農地センサスも実施しなければならぬ。農地改革の規模も対象もはつきりしないなかでそれをやるわけだから、当然、調査項目も細密にならざるを得ないわけですが、統計委員会がこの農地改革という大改革に対して、どの程度の認識を持っていたかはなほだ疑問です。常時的な体系からすれば余計なことまでやることになるし、農林省は行政的な要求だ、ということでは突張ったわけですね。農地センサスにひきつづいて漁業権の近代化のための漁業権センサスをやらざるを得なくなるし、林野の所有状況を明らかにするために林業センサスもやることとなる。統計委員会からすれば、農林省は膨大な予算を使ってどうしてこんな調査までしなければならぬんだということになります。だから私は、戦後の統計制度の再建化特に中央集権化が行政各省のエゴイズムで破綻したといわれるし、統計学者はその点を強調するけれども、そうではなくて、統計制度の再建ということが、緊急異常な行

政的要求のもとで、きわめてアンバランスな統計生産として進行せざるを得なかったまさにその時機に登場したことが、挫折の根本原因だったと思っています。各省のイゴがまったくなかったとはいえないけれど、これをただそれだけに解消してしまうならばあまりにも皮相的な考え方だと思います。

伊藤 「農林統計協会は、一応農林統計のギャンペーン機関ということ動き出しつつ、どういう経過になっていくんですか。澤村善郎氏などとの関係は――。

木村 「その点については、さきに農林省統計調査局あるいはその後の統計調査部の機構について話しておいた方がいいと思います。最初の統計調査局には、総務課、統計課、経済調査課、作物統計課、水産統計課などがあり、統計課長は久我通武、経済調査課長は加甲信文、作物統計課長は福島要一、水産統計課長は北原恒造氏といった錚々たる顔ぶれでしたが、そのほかに局長の近藤康男先生に直属したような形で、企画調査室と数理研究室というのがあり、津村氏はこの数理研究室の指導的研究者でした。数理研究室の主な研究課題が標本理論を中心とするものであったことは当然ですが、少なくとも当初は、アメリカの作物報告機構を下敷きにして、わが国の作物標本をどう抽出するかといった作物調査を専ら対象とし、農業技術的な色の濃いものでした。で一つの統計調査局といっても、作物統計課や数理研究室は、他の統計調査を担当している課とでは、雰囲気もなんとなく違っていました。そういったこともあってか、あまり親しい接触もなかったわけです。これに対して企画調査室というのは、近藤先生の発想で作られたものらしいのです

が、局長室のそばにあって、栗原百寿とか副島統典、平野蕃といった経済理論家連中がたむろしており、また当時営農課長をやっていた井上春丸氏なんかも出入りしていました。栗原氏が農家統計、副島氏がソヴェット農業統計といったように、それぞれテーマを持ってやっていたようですが、小生としては知り合いが多かったし、話しも面白くできたので、おのずからそっちの方に頻繁に出入りしていました。この企画調査室は23年頃に行政整理でなくなりますが、他の課の連中にいわせると、みんな原稿稼ぎばかりやっていて、統計のことはちっともやってくれなかった、ということです。(笑) この企画調査室のあとに企画調整課というのができ、農業統計の加工、分析、編輯、普及といった業務を担当することになりますが、農林統計協会の仕事もおのづからこの課との接触が多くなり、現在も出している「農林統計調査」という雑誌や「ソヴェット農林水産統計」なども、ここと協同してやることになりました。この課にも国家独占資本主義論で活躍していた相澤次郎氏や後に経済統計論を書いている横山辰夫氏などがいたし、また課には鈴木稔、豊田尚氏など統計調査論で話が通じる人々も多かったのですが、そっちの方にはしばしば出入りしたんですが、作物統計課とか数理研究室の方は、こっちもよく判らないということもあってあまり近づきませんでした。(笑)

だから標本理論というものの、作物統計の世界だけのことで、われわれには無縁のものと思っていたのですが、だんだんそうでもなくなってきた。(笑) まず農家経済調査にこれを通用する、ということになり、次いで中間農業センサスもこれでやろうということになってきました。

さらには農業センサスも標本調査でやればいい、といったような議論までも飛び出してくるのですが、これはさすがにすぐ立ち消えになってしまいました。ただこういった風潮は統計調査部の内部から主体的におこってきたというよりは、むしろ外部の統計学界の潮流に巻き込まれていった面の方が強かったのではないかと、思います。そこで私も遅まきながら、やや真剣に標本理論を勉強せざるを得なくなりましたし、統計調査部からも、マスターサンプリングなどの研究を引き受けたりもしました。いづれにしても農業経済学者や農業センサスや農家経済調査などに直接従事してきた人々の間では慎重論や反対論が乏しくなかったことも事実です。

しかし統計学界の主流が急速に数理主義の方向を辿り、農林関係の外部で社会経済現象への標本調査の適用がどんどん進んでいくとやはりそれに巻き込まれざるを得なくなってくる。殊に戦後急速に膨張した農林統計機構は、その後の行政簡素化の最大の対象として風当たりが強かったので、費用縮減を標本調査法の採用によって切り抜けようとする空気も強くありました。標本理論の社会経済領域への適用にともなって、津村氏達の数理研究室の仕事も拡大したわけですが、実際に農業統計にも接触してきたこの人々は、さすがに外部の数理統計家達よりは慎重で、差別的な標本理論の流入に対しては、むしろづしーキ的な役割を果たしていたのではないかと、とも思われます。津村氏の調査論自体も、そういった折衷的な考え方の上に立っているのではないかと。私はそう考えているのです。

伊藤 先ほどちょっと話がでていたんですが、国民経済

から農林統計協会に引き次いで、なにか研究会というようなものがあつたんですか。

木村 標本調査に関する研究会ですか。

伊藤 ええ、『ソビエトの統計理論』を読したりした…

木村 ああ、おれは国民経済で昭和23年頃、農林省から依頼調査をもらい、「サンプル調査法研究会」というのを作って、その頃まだ東京にいた大橋隆憲君に中心にしていってもらったのが、そもそもの始まりです。かり版刷りの報告書を3巻まで出しましたが、3巻は『国際連合サンプル調査委員会報告』3巻はソ連のピサレフの『農業統計とその一般理論的基礎について』といった工合に外国文献の翻訳を主体とするものでした。研究会も多岐はやったような記憶がありますが、そのうちにソ連の統計学論争に関する情報が入ってくると、だんだんそっちの方に関心が移ってゆきました。しかし昭和24年から私が農林統計協会に移り、大橋君が京都大学にゆくことになって、この研究会自体は立ち消えになるのですが、この研究会に後から参加した井上輝丸さんと内海庫一郎さんが、この研究をひきつぎ、統計研究会の常務理事だった井上、内海のコンビでまとめたのが『ソビエトの統計理論(1)』です。だから農林統計協会はその発行者になっただけですし、私もこの段階では研究にも参加していません。

森 統計理論(2)の方は…

木村 統計研究会に対するこの依頼研究は25年だけで打ち切られます。こういった研究は必要ないと思ったのが、統計研究会だったのか文部省だったのかは判りません。いづれにしても井上氏は大いに困って、独力で継続する

こととし、内海さんよりも積極的に協力せざるを得なくなっただけですが、金はまったくないので、農林統計協会が印税の前渡しという形で引き受け、なんとか出版に漕ぎつけたものです。この編者は、当時まだ出来たばかりの経済統計研究会、その所在地は京都大学統計研究室となってますが、これはたまたま内海さんが京都大学に講義に行っていたのでそうしただけのことだそうです。また翻訳の大部分は井上さんがやり、内海さんは解説と翻訳の校閲を手伝っただけだと、これは内海さんから直接聞きました。

伊藤 農林統計協会というのは組織的には人数はどのくらいだったんですか。

木村 私のいる間は平均して100人ぐらいではなかったかと思います。集計の人員を入れてのことですが――。

伊藤 集計もやっていたのですか。

木村 いや業務としては集計がもっとも大きく、人員も80名ぐらいで、その他の編集、出版関係は、総務をふくめても15名足らずだったんでしょう。

伊藤 「研究や調査もやっていたんでしょう。上杉先生もおられたりして――」

木村 研究や調査はやりたかったのですが、実際にはほとんどできなかったといっていると思います。殊に私なんかは経営のやりくりに追いまくられ、放しで、なんにもできなかったのも、上杉君が入ってきたのを機会に、研究調査部というのを作ったのですが、とても自立できるところまではゆきません。そこで文部省に科学試験研究費を申請して、それで「日本統計調査年表」を作成しました。あれは私が主査として総括したのですが、解

説の人口と工業の部分は上杉君が、農業の部分は葛井定
 実君という人が執筆した協同作品です。上杉君はこの期
 間に『マルクス主義と統計』を書きあげたわけですが、
 当時は、マルクス主義者ですら、統計とマルクス主義と
 は関係はないもののように思っていた頃ですから、とて
 も大きな反響をあたえました。あの本は、基本的には境
 川統計学の戦後的な形をとった最初の発言といっておく
 私としてもとても嬉しかった。農林統計協会としては痛
 し痒しといった面もなくはなかったんですがねー。(笑)
 森 産業統計研究社の和合さんも農林統計に居られたん
 ですか。

木村 ええ、和合君だけでなく、中島享子さんや中山君
 も居られました。和合君はたしか普及出版関係の責任者
 だったと思いますが、彼氏はもともと統計図表を学生時
 代から勉強していたので、その知識をもとにいまやっ
 ているような統計の印刷方式を考え出して、独立の会社を
 作ったわけですよ。農林統計協会の経営も大分危っかしく
 なってきたということもありましてね。(笑)

森 どうして危っかしくなってきたんですか？

木村 根本的にはボク自身の経営についての考え方が甘
 く、経営者あるいは商売人に徹し切れなかったからだ
 と思います。一方で研究者でありたいなと思っていたら
 とも経営なんかやってゆけないですよ。(笑)

森 それなのにどうして経営者になったんですか。

木村 いやーこれは敗戦後の特殊な状況を知らないと思
 解してもらえないと思うんだが、敗戦で、戦時中海外や
 いろいろな経済調査機関のなかにいた大量の知識人がい
 っぺんに失業してしまっただけですよ。戦争中は大学にも

おれなかつたわけ。満鉄調査部から兵隊にいらっていたボクもその一人だけれど、幸い敗戦と同時に帰ってきて国民経済の創設にぶつかり、早々と就職できたんです。あとからも続々帰ってくる。もちろん闇商売なんかで喰ってゆける連中ではない。国民経済という調査機関に木村がいるから、なんとか相談に乗ってくれるだろうというこで、みんなやってきました。先に戦場にありついて喰えるようになった者としては、なんとかその機会を作ってあげなければならぬ責任があるわけです。当時このようなインテリ失業者の最大の受け入れ場所は官庁で、特に統計の分野や経済安定本部などが中心だったが、これもコネがないとなかなか入れない。とりあえずは国民経済をなんとかしなければ、ということになるわけです。と、いっても私自身、稲葉秀三さんに入れてもらったばかりの新米で、決して勝手なことが出来るような立場ではないんですが、稲葉さんという人が、またそういった時代的な責任感を持っていく、実によく決山の人を世話したり、受け入れたりしていました。稲葉さんは、国民経済の創設者として初めて会っただけの人なんで、それまでの関係はまったくないのですが、その点についても深い理解を示して協力してくれました。また当時の国民経済の経営は、仕事をとてくることが先決でしたから、私が仕事をとてきて財源さえ作れば、人の採用や経費の支出については任してくれるようなところがありました。そこで私は、ますます仕事の獲得に走り廻らざるを得なくなるんだが、同時にある程度経営者的な立場で行動していたかとも思います。九大にいた高木幸二郎君なんかも当時、相談にみえた一人ですが、末だに会

うと『お前に直接試験をされた』なんて嫌味をいいます。
 (笑) 私には全然そんな意気はないんですが——。(笑)
 しかし、国民経済の経営だって当時は決して楽なものではなかったから、人の収容には当然かぎりがある。だから国民経済の職員にはならないけれども、依託調査を出して嘱託のような形でつながっている人も沢山いました。しかも内部も外部の人達も混然として出入りしていて、全体としては失業知識人くらべとい、た趣きでしたが、お蔭で私もこの期間に多くの優れた学問上の先輩や友人達と接触する機会を得ました。みんなこのプールで一休みしてから、官庁や大学や経済団体などに入っていたわけですが、敗戦直後国民経済がこのような知識人職業あっせんプールとして果たした役割は非常に重要だったと思っています。

しかしいづれにしても国民経済だけではどうにもならない。稲葉さんは政治力もあり、政財界にも顔が廣いので、諸方を駆け廻って、別に新しい団体などを作っては人を入れたりしていましたが、こ、ちはそうはゆかない。で、悩んでいたところ、たまたま農林省から農林統計協会というのを作ってくれないか、というような話がでてきました。そこで農林統計協会を作れば、そんな問題もまたなんとかなるだろう、ということもあって引き受けたわけですよ。農林省は多分とも国民経済をやっていた私の経営者的な能力といったものを評価したからだと思うが、本人自体はそんな気持ちで引き受けたんだから、経営がいいことになるわけはないですよ。(笑) 稲葉さんは最初強く反対してひきとめてくれましたが、最後には承認して、当時として多額の10万円という多額の財団法

人設立基金を出してくれました。私が経営者の道に入る
こむようになつたのは、まあそういった経緯からです。

Ⅲ 地方自治体の統計活動—埼玉県経済調査会 にふれつつ—

伊藤 農林統計協会時代のことは、一応このくらいにしていただいて、国学院大学の方にゆかれてからのことについてお伺いしたいと思います。国学院にゆかれて最初のうちは統計学を担当されなかったということですが、なにを—。

木村 ええ国学院にゆくようになったのは、産業総論という講座の担当の先生が亡くなられて、そのあとをやってくれないか、ということだったのです。で、昭和33年から40年までは、この講座と農業政策を担当していました。その頃は学部も政経学部で、統計学は必置講座ではなく、創立以来、中川校長先生が兼任で担当しておられました。ところが昭和40年から経済学部にすることになり、統計学総論が必置講座になるとともに、専任教授で担当しなければならぬことになりました。それで41年からやることとなったわけですね。

伊藤 先生の統計学の学問としての体系化についての関心は、統計学の講義を担当してからのことだ、と先程うかがいましたが、そのことはまた後でうかがうこととして、先生は別に埼玉県で調査機関を作られて活動しておられますね。そのことについておし—。

木村 あれは正しくは埼玉県社会経済総合調査会というのですが、昭和47年に埼玉県で革新県政ができたので、革新県政の実現に協力して来た知識人達の要望を知事が受け入れて作ったものです。設立の初期には、ここに居られる伊藤さんやその他の経統研の方々にも大変協力していただきましたね。

伊藤 山田(貢)さん、広田(純)さん、それから横本さんとか
 ……。

森 ぼくも一回だけ伺いましたよ。(笑)

木村 いやそれはありがとうございました。しかし折角
 みなさんに協力していただいた埼玉調査会も、この57年
 7月で解散することに決まりました。一応表面上は自主
 的解散ということになっていますが、実際には、県会の
 野党である自民党系議員の圧力に、知事が屈服せざるを
 得なくなり、調査会としてはやむなく解散することにし
 たわけです。

森 県会の野党議員達が調査機関は要らないと考えてい
 るのですか。県の役人も同じような考えなんですか。

木村 調査研究について関心が薄いことは確かです。し
 かし不要とまではいいていない。県庁内で役人がやれば
 よい、とか、東京にあるもっと立派な調査機関に依頼す
 べきだ、というようなことを始終いうわけです。これら
 の立派だという調査機関の内容や能力についてはまったく
 知らないのに――。要するに革新的な人々が参加して
 やっている埼玉社会経済調査会に調査を依頼することが
 怪しからん、ということなのです。

森 県の役人や労組なんかは？

木村 県の役人は、まあ3分の1位は支持してくれてい
 たと思いますが、結局議員がこれいので、表面的には消
 極的な態度をとらざるを得ないわけです。調査会もそう
 いった県の事情を考慮して、調査も住民の立場からとい
 うよりは、ある程度県の意向に合うような形でやってき
 たのですが、野党側の議員は調査会に文句をつけてくる。
 今回もまったく関係のない他の議案を知事が提出したの

に対して、調査会の処理をしないかぎり、承認できないとおどかされて、知事もやむなく屈服したわけです。調査会もまたやむなしとして解散を決議しました。

森 埼玉県はこれから調査をどうしようというのでしょうか。

木村 埼玉調査会は、規模は小さかったとはいえ、全国の地方自治体のなかで、地域的調査機関の先駆として注目され、また調査業績もむしろ中央や県外から高く評価されてきました。殊に最近、地方の時代ということもあって、地方自治体の間で調査機関を持ちたいものがふえ、すでに二三の県で設立されています。またそのために、先駆的な事例として埼玉調査会を参考にしたいと、目に來る人も増えているくらいです。そんな状況のなかで、先駆的模範である埼玉調査会をつぶそうというので、すから、時代的逆行もいいところですよ。さすがに県も、そのことを配慮して、新しく総合的な調査機関を早急に作ることを公表しています。だから恐らく新しい調査機関を設立することと思いますが、これから作るとなると、その基本金も3億円以上はかかるということです。調査会の基本金は500万円でしたから、解散理由の一つである財政緊縮の面からいっても、なんのことが判らないことになりそうですね。(笑)

伊藤 調査会の活動は、研究者中心だったのですか。

木村 まあそういった方がよいかも知れませんね。

伊藤 県の行政の人たちとは……。研究者中心だと、どうしても外でやっていると感じるようになるでしょう。

木村 まったくそのとおりだと思います。ですから、初めはむしろ研究者と県の若手の職員の共同したよう

な調査、研究体制をつくっていった。そういう形で盛り上げようという方針で、それもかなりやったわけです。そういうことで初めは県の職員の人々に働きかけたんだけれども、これがやっぱり地方の県だからでしょうか。あそこに行くと赤になるというふうにいう。少なくとも赤い連中に同調しているということになるからそれが心配でやって来ない。戦時中と同じですな。(笑) そういう空気はものすごく強かった。ただ、最近になってやっとそれが解けてきたというところですね。

坂元 埼玉、千葉というのは古いですね。

木村 いや、千葉の方が新しいんじゃないかと思うんだ。というのは、いい意味でも悪い意味でも土着的保守性といったものが、埼玉の方がより強いような気がします。それは水田地域と畑作地域との違いから来るものかも知れないが、たとえば千葉県のように開発ブームに飛びついてゆくような投機性も少ないところは良い面でしょう。

伊藤 調査会と自治労や、自治体問題研究所とかの直接の関係はなくて、メンバー的には幾らかダブっていましたか。

木村 いや、メンバー的にも組織的にも何も関係はないです。自治体問題研究所というのはどちらかというと市町村との関係は深いので、県の市町村を対象とするような調査をやる場合には、紹介してもらったり、連絡をお願いしたりするようなかたちで協力をお願いしたことはあったと思いますがー。

伊藤 埼玉自治労とか、調査会活動をバックアップするというか、直接はちょっとかかわりないでしょうけれども、大いにやれというか、そういうふうな関係にはなら

ないんですか。

木村 初めは多分に県職員関係でもそういう気持ちは持っていたわけだけれども……。

伊藤 かえってそれをやらちまうと、ますますたたかれるという……。

木村 あそこでは組合勢力というものは、県職員の中で活動している人は40～50人しかいないんじゃないですか。ものすごく少ないですよ。それほじ組合自体が発展しない。ほとんど形だけです。

坂元 だから畑さんもしいまみたいにならざるを得なかったんでしょ。

木村 それもあるが、決定的なのは、なんといっても、県議会で与党がお話しにならぬくらい貧弱だということですよ。しかもこの貧弱な与党の中がまたどうばうなんですね。県の職員は、そういった勢力関係を敏感につかんでいて、それによってあちに行ったり、こちに行ったりしているにすぎないといっているでしょう。古い県の職員には、地縁、血縁で自民党の県議なんかとつながりの強い人も多いわけだから、県の行政が円滑に進行するためにはということ、知事との間に立ってパイプ役を務める人もいます。彼らにすれば、あちらの意向を打診して、丸くおさめることが、知事のためだと思っているふしもあるんです。そうして現状では、まあそれも仕方ないかも知れません。

伊藤 自民党はちょっと独自候補を検討して結局さげたんですか。

木村 いや、まだそこまで行ってない。いま出そうという構えでしょう。知事は出させまいとしているわけだし

よう。朝日新聞が書いていたけれども、知事の革新は徹
し調査会だ、今度調査会がなくなつたから、「憲法を暮ら
しに生かそう」という懐がまだかかっているわけで、結
局あれがいっ消えるかが問題だ。(笑) なんて皮肉ってい
ますがね。

森 九州に九州経済調査協会というのがありますね。や
っている仕事は委託調査がほとんどだと思ふんですが、
でも、内容は投資の波及効果とか、県でいえば、県の官
僚が好みそうなというか、その需要に対応しているよう
な内容が主だと思ふんですね。木村先生がなさっていた
仕事で、委託調査は県が委託するわけでしょう。その委
託の内容は、どういう調査を希望していたわけなんでしょ
うか。

木村 初めのうちは、むしろこちらからもテーマを考え
て、県に提案し、両方で調整したテーマを依頼してもら
うようなかたちでやっていました。しかしこういった自
主性はだんだん引、こめざるを得なくなり、もっぱら県
が必要とする調査を実施しているにすぎなくなってゆき
ました。県の行政に直接応えるような調査の需要は、最
近むしろふえているといつてよいでしょう。そういう調
査には金は出すが、県民の立場から必要だと思ふような
調査は、御自分達の金でやって下さいというわけです。
だから自主的にやった県民の社会福祉水準の調査なんか
も新聞は取り上げてくれたのに、県庁、役人の方の反応
は冷たいんです。全然評価しない。しかもそれが、遂に
革新だといわれることになるんで、むしろ最近意識的
にそういうものをやめて、県のいわれるとおりのことを

やりましようというぐらいのことでやっていたわけです。だから、ほとんど革新色がなくなっているという批判もあったし、したがってまた無理してまで調査会をやってゆく意味もないじゃないか、といった声も出ていました。それでも続けるべきだとぼくは思っていたんです。というのは、確かに三菱総研とか野村総研とかが出した報告は、かっこうやなんかはきれいにやりますよ。しかしただそれだけのことで、一回限りで無責任な調査になって結局調査の結果についての事後評価も何も残らない。

坂元 グラウンド志向みたいなものですな。

木村 本当に無責任なものでしょう。それは県でもやがてわかってくると思うんだ。これに対して埼玉県に常時関心を持っている人達がやれば、たとえ見ばえはよくなくても、その問題性はつかんだ上でやるから、県の意向にもとづいた調査だったとしても、無責任なことはできないわけです。事実、調査会の能力では、出来ないような調査もあったわけで、それらは大きな調査機関こそ使わせないでしたけれども、たとえば都市計画やなんかの調査については、専門家の先生方に頼まなければなりません。それはやっていますけれども、その専門家たちの意見にしても、いきなり大きなところでやるよりは、こうやってやらないと、県の自主性というのが全く無視されると口を揃えていっていました。これらの参加した先生はみんな非常に積極的で、よくやってくれたと思います。だからもうけしやらないきやならないという不満はこっちにも残ったけれども、ぼくはそれでも存在意義はあったと思います。

坂元 それがなかなか受け入れられなかったというのは、

やっぱり県庁の質ということもあるわけでしょう。

木村 基本的には県庁の質ですね。しかし、またそれと同時に、われわれとしてもそういった企画をもうけ積極的に県庁に売り込む、あるいはこっちがリードしていく、そういう政治感覚や積極性にも欠けていた面もなかった。先生方は結局、そういう社会福祉的な調査が出るに皆さん喜んで、それだけでいいんだろうと思っていたけれども、なかなかそれだけではいけない。

いま各県がみんな調査機関をつくり出しているんです。これはやはり各県が、地方の時代に対応して自主的な調査機関をつくらざるを得なくなってきたんです。それらはもちろん革新的でも何でもないので、資金自体も主として実業界に依存してつくっていますけれどもね。それはそれなりにその地域での固有の問題が出てきているわけだ。だから全国的な画一的な方法ではいまや対応できなくなっている。

埼玉県にそういう調査機関があるという話を聞いて、モデルにしたいということで、聞きに来たり、見に来た県も少なくありませんでした。滋賀県、三重県、など各地域で設立されており、もう大体半分ぐらいの県でできているんじゃないですか。その時期に、一番先になったところがやめるというんだから、皮肉なことなんだ。(笑)

そこら辺の調査を見ていると、やっぱり実業界を背景にしているだけに、確かに限界はありますよ。そこでは住民サイドのものなんか全然ない。だから、住民サイドと産業サイドの調和が問題なんだけれども、そういった問題意識なんか全然ない。今度は一方的に産業サイドばかりということですね。

森 埼玉県というのは、地方的でありながら地方性を發揮できないような場所であるというか……。

木村 ええ、だから一面では変な中央意識もあるんですよ。

森 それで、中央とそれぞれの回路で結びついているという感じで統一性がある。

木村 だから、野村総研など、中央の大きな調査機関であれば立派なもんだと思っているんだ。それと中央に負けないように同じようなやり方でやりたいというような志向がある。

森 そういう志向もあるかもしれない。

坂元 だけど東京だって、調査とかそういうことに対してはそうですよ。だから同じですよ。要するに、それは役人の体質ですよ。

木村 役人の体質もある。つまり内容じゃなくて、どここの調査機関がやった調査ですよということが終わっちゃう。やっぱり埼玉調査会じゃダメだ。500万円のところじゃダメなんだということになる。

坂元 どういう調査機関に委託したか、たとえばどういう手法を使ったかということまで指定する場合があるらしいですね。

北海道も道立経済研究所なんてあるんですよ。

伊藤 あれはつぶされた。

坂元 つぶされたんですか。大阪府立のもありますね。

木村 あれは完全な府の予算による公的な組織ですからね。ああいうのはまたいいんですが、調査会は一応独立の法人ですから、経費は自分で調達しなければならぬわけです。

坂元 大経調もそうですよ。あれはしかし財界からお金をもらっている。

木村 調査会も、もちろんそうしなければならぬし、また県からも強く要請されて努力もしました。しかし九州と埼玉とは財界の基礎が違ふんですよ。ほくらも初めはそういうふうを考えて、多々は財界から金も集めなければならぬと思っていた。しかしいかにも財界がないですよ。(笑) 埼玉なんていうのは、大きな工場があっても本社はみんな東京にある。だからお金の出し手はいないわけ。ですから、工業県とかいったって……。

坂元 工場県だから悪条件だ。(笑)

森 工場を貸しているだけだ。

木村 ただ財界から金を出してもらおうとすれば、多少とも財界に役立つような調査もやらなければならぬが、それもほとんどやらなかったことも確かです。僅かにいま山田貢さんやなんか手伝ってもらってやっている県の経済動向調査ぐらいが、それに相当するものでしょう。しかし、これをやるようになった契機は、50年に県財政がものすごい赤字を出したことなんですよ。高度成長期の情勢でそれまでは、かなり支出増を甘くみても、なんとか辻褄を合せることができたわけ。それが石油ショック後の不況で、壁に打ちかって、矢張り税收基礎としての埼玉県を経済動向をも、見ておかなければならぬ、ということになったわけです。しかしこの経済動向調査を私が引き受けてやることになったのは、ちょっとしたプロローグがあります。それは昭和49年度に、埼玉県の県民所得の将来見通し作業をやったのですが、当時の経済企画庁のきりめて楽観的な国民所得見通しに対して、

きわめて悲観的な見通しを立て、これがまあ見事に当
 て、県の財政関係者から大いに信用を博したわけです。
 この調査には、廣田純、山田孝志夫、川上正道、山田貢、
 それに経済企画庁の香西養君らが協力してくれましたが、
 なかなか面白い顔触れでしょう。この調査を通じてわか
 ったのは、埼玉県のいままでの景気動向を歴史的に見て
 みると、やっぱり埼玉県は最近急速に工業化しているこ
 ろですから、結局景気が悪くてもよくても先行性を持
 っていて、全国的な数字に対しても、その振幅も非常に
 大きいということでした。景気のいいときはものすごく
 伸びるが、景気が悪いときは、逆にものすごく下がる。
 考えて見れば、全国的数字は、農業県などをも含んだ、
 いわば平均値のような数字なんだから当り前のことなん
 ですが、この点を改めて認識したことは収穫でした。そ
 こで、こういった経験をふまえ、またそれにビジネス・
 サーバイとか、ディフュージョン・インデックスとかい
 った景気分析要具をもつけ加えて、今度は山田貢さんを主
 力に、埼玉大学の安部（昭夫）さんや浦和一女の森さん
 などと一緒に、継続的にやっているわけです。もちろん
 そのほかにも、経済企画庁や国民経済研究協会あるいは
 埼玉銀行といった、経済調査機関の人々にも、経済分析
 研究の都度集まってもらい、情報を提供してもらってい
 ますが、いまのところ少なくとも、中期的な見通しにつ
 いては、割と的確な結論を出してきたと思っています。
 ところが、県もそれに依存していればいいのに、もっ
 と直接的で数学的に財政そのものの見通しができないか
 というわけだ。埼玉県の経済動向と無関係に、そんな直
 接的な見通しなんて、数学的にはでき、こないだ。政

府だってそんなことはやってないんだというんだけれどもわからないんだな。特に最近の若いお役人達は、みんな計量経済学で育っていて、生半かな知識を持っているから、なんでもモデルにしたいという気持ちが旺盛ですね。そこで工業大学のどこかの研究室に頼んで、埼玉県の財政モデルをつくってもらったんです。そうして県は、その報告書を、知事が諮問機関として、わけわけ民間人を集めて作っている行政審議会というところに、態々披露し、今度、こんな科学的な方法が作られて、これで行くから財政計画も立派にやれますなんて説明していました。

ぼくが見たら、結局従来の経済成長率を不震と仮設しているモデルだから、歳出が決まれば歳入が決まるという方式になっているわけだ。そうだとしたら何も心配することはないですよ。県財政にして最大の条件であるべき埼玉県経済の問題が、ここではまったく簡単に捨象されているんだから――。にもかかわらず、県はこれで57年度の予算を作ったのです。果せるかな57年度は不況で税収は入らないから、大赤字になってしまったわけです。これに対して、ボクらの報告書は政府の57年度の成長率4%台という楽観的な見通しに対して、27%という低成長率を示し、景気の低迷を予言していました。当時の朝日新聞の埼玉欄は、埼玉調査会がこういった予測をやっていたのに、県は何故それを使って見通しを立てなかったのか、などと批判していますが、こういったこともあって、県も、わけわけのこの調査報告をかなり重視してくれるようになりました。(笑)

ところでボク自身は、こういったような予測なんかあんまりやりたくないんだけれども、県の行政という立場

からは、絶対必要だし、やらざるを得ない、ということについていっておきたい。県行政を計画的にやろうとすれば、どうしても県の社会経済に対する的確な見通しが必要だということだ。もともと埼玉県に革新県政が出来たのは48年ですが、それまでの保守県政が倒された大きな原因の一つは、当時の埼玉県の激動的な変化に対して、県側の見通しが甘く、的確な行政的な対応を欠き、それが住民の不満となって現れたことです。まずなによりも、急速な人口増についての見通しが甘かったし、人口増によって生ずるであろう、住宅不足、地価騰貴、交通の混乱、上下水道の不足、学校難といったような事情についてはほとんど対策らしい対策もとられなかったわけですね。ですからどんどん立ちあぐねてくる。住民運動からは、県政はまったく計画性がない、として突きあげられることになる。そうした県民の不満から保守県政が倒れ、革新県政が誕生したといっているでしょう。だから、この点についての反省は県の主だった幹部には非常に強いんです。それがあるから、すぐに予測、予測ということになってくる。それがまさにモデルでも予測できれば一番都合がいいということにもなるわけでしょう。そういった意味で、県の経済動向の見通しも、単に財政の推計基礎のためだけでなく、迅速的確な中小企業対策や雇用対策をおこなってゆくためにも必要なわけですね。少なくとも人口予測などは、的確にやっておかなければ、これからの県政の運営はできないでしょうね。住宅問題がすぐ出てくるし、それはもう中央も県も同じだが、特に埼玉県からいえば急速な人口増ですからね。それに対応して、当然環境が不十分になることはわかり切ったこと

とですから、そういった見通しを持つことは不可決だと思います。

伊藤 県当局ではもちろんぜひとも必要です。そういう経験の中で役人の上層部もそれを理解し始める。歳入欠陥が出た場合に、やはり議会なんかでとりあげられているんですか。議会の反対派から、どういう予測をやったのかという、その辺が出ればおもしろいんですけれどもね。

木村 議会も、それは社共の議員も含めてそういった関心はあまりないんじゃないかと思います。

伊藤 与党だからという面があるでしょうけれども。自民党でもいいんですけれども。少しその辺がもめばね。そこまでは国会レベルでもなかなか出ない。

木村 県会の質問というのは全部ではないが、大部分予行演習があるんです。あらかじめ事務局が議員さん一人一人から、どういうご質問が出ますかということをやんと聞いて、それにはこういうふうにお答えすればいいんですかというのが決まっているから、実に順調に終わって、ちっとも問題が出るようになってない。逆にいって、県の方から問題を出さないと、県会議員もそういう問題には触れてこないということもあると思います。だから外三者である朝日新聞などが、外部で取り上げてくるとやっとな反響が出てくるということなんです。

森 要するに、自分で判断できないということです。

坂元 そういう気もないわけでしょう。

木村 いや、この5年度の経済見通しでは、政府自体も間違っていて、大赤字を出しているし、たとえば佐々木だけだと、渡辺蔵相は、その責任をとって、一応辞表を出し、鈴木

首相から慰留される、という手続きはとっています。しかしそのことについては新聞でもあまり大きく出なかったし、国会でもあまり問題にはりませんでした。これもまさにおかしいんですが、国会も、そのくらいだったんだから、埼玉県会ぐらいでは、まあやむを得ないところかも知れませんね。(笑) ただそのせいかどうかはわかりませんが、県の企画財政部長は、県を辞めて自治庁に転出しました。見通しをモデルでやるか、どうかといったようなことは、むしろ県の事務局段階の問題なんですが、最近の若い官僚はみんな計量経済学だけで育ってきていますから、なんでもモデルでやりたがるし、それが科学的だと思いこんでいる。しかもある程度優秀な人が多いから、役達な上の官僚でも経験論だけでは太刀打ちできないということもあるようです。この財政モデルを採用することとした責任課長さんは、「木村先生からそういわれるとほろほとと思うんだけれども、ぼくは彼らからあれを使えといわれて、それが批判できないんですよ。なんかおかしいとは思っていたんですが」といっていましたが、それが正直のところだ、と思います。(笑) こういった若い計量経済学で育ってきた人達は、頭脳も良いし、仕事にも積極的で熱心だけれども、もっぱら数字だけに頼って実態とか経験とかいうものに対して全く信頼しないところがある。そういう連中がいま育ちつつあるから、地方の時代といいながら、そういう人たちが育っていくと将来どういうふうになるか、ぼくは大いに危機感を感じているんです。(笑)

伊藤 予測は、モデル方式じゃなくて、人口と県民所得について行ってあり、あと連関分析をやるとかやらない

とかいう話があったようですけれども。

木村 いや調査会としては、49年にやっただけで、それ以降はやっていません。ただ県民所得のおおまかな予測推計を、この調査をひきついだ経済動向調査の一部としてやっているだけです。産業連関表は、県が作成しましたが、なお不十分なもののようです。ただ企画庁から新S・N・A方式に切り換えることを強く要請されており、県は新しい県民経済計算の体系化を急いでいるようですが、未だに信頼できるようなものにはなっていません。というのも信頼できる産業連関表がなかなかできないためですが、県段階で多少とも信頼できるような産業連関表ができるものか、どうか甚だ疑問です。

伊藤 そのほかにやっているのは県のどの部局ですか。

木村 統計課だけといってよいでしょう。ここで県民所得や産業連関表の作成をやっているわけですが、推計はそれだけで、本業は中央から依頼される統計調査ばかりです。

伊藤 統計課と調査会との関係は余り強くはなかったということですか。

木村 いや、弱かったわけではないけれども、本来、県の統計課というのは、中央の統計調査の業務をやっているところだから、資料提供や技術援助は若干してもらったけれども、それ以上ではありませんでした。それとわかれわかれが、やっているのは推計といっても、予測なので、正確性を旨とする統計課が直接タッチして、責任を負わなければならないようなことがあってはまずいとも思っていました。ですから、予測的な推計は、あくまで調査会独自でやり、また調査結果についても責任を

負うという建前をとっていました。私はもし、予測的なことを県でやる場合でも、統計課の業務とは独立して別個にやるべきだと思っています。だから、もっぱら個人的な方たちで協力してもらってはいたわけですが、県会の議員のなかには、「あんた予測なんか、統計課がやればいいじゃないか、調査会なんか頼む必要はない」といって、統計課に圧力をかける人もあったということです。そこで、県民所得の予測推計なんかは、山田（貢）さんや北川（豊）さんなど数人と県の統計課の人に集ってもらい、経済動向調査の討論の結果を下敷きにして、各要素ごとに数量的に固めてゆく、という方法でやっていました。いわば“腰だめ式”といったやり方なんだが、それでもいまのところではよく当たっているんですよ（笑）森 木村先生が企画庁に入ったらいい。予測はよく当るんじゃないでしょうか。（笑）

木村 いや企画庁からは情報を、しかも懸け値なしの本音の情報を頂戴して大助かりしているんだから、義理でもそんなことはいえないんですが、（笑）最近批判にさらされている企画庁が、地方の経済動向を重視するようになり、そういった面からこの調査を注目してくれていることも事実のようです。

伊藤 中央のとは別の手法をまうり込んでいるんですか。

木村 いや、大体同じだけれども、たとえばDIをつくるにしても、輸出入がないでしょう。ですからいろんな面で違うですよ。利用できる統計に限界もあるし、また家計調査は、補和と所沢しかないといった点にね。だから相当な工夫は必要だし、しているけれども、基本的な手法は同じです。そうして同じ手法をとっている一番

大きな理由は、それで全国と埼玉とが、どう違って現れるかを見ることが出来るからです。

IV.今日の統計学に対する注文と当面の関心

伊藤 最後に木村先生の統計学。それから現在の統計学の状況、学会活動についてのコメントがございましたら。

木村 コメントというよりは、ぼくの現在の統計学者のあり方に対する感想といったものからいうと、蜷川先生が日本統計学会に関心を持ちながら、ぼくを向かれた一つの原因でもあるんだけれども、統計学者はやはりあまりにも従来の統計学の枠内ではばかり議論をしているけれども、それでは統計学は発展しないんじゃないだろうかということです。ぼくの考え方からすると、統計学は、社会科学の補助科学なんだから、なんたかんだいって、社会科学的な問題意識がないと新しい問題提起もできなくなってしまう。そこにマネリズム、あるいは抽象的、形式論的な議論の中に閉じ籠もらざるを得なくなる原因があると思う。

これは私の統計学という学問に対する考え方にもとづくもので、普遍的な方法科学だという考え方の上に立てば、それとは違った意見も成り立つと思うんですけども、もし私のように社会科学の補助科学だと考えれば、それは丁度、医学における諸々の医学的測量技術のようなものです。医学の発展のなかで、もろもろの医療測量技術も発達してきたんだが、その逆に医療測量技術の発達が、医学の発展を促がしてきた力も非常に大きかった。社会科学と統計学との間にはこういった相互関係があるにもかかわらず、やはり統計学そのものは、従来の統計学の枠内での議論に終始しちゃっている。そこに統計学の議論がつまらなくなっちゃうという原因があるんじゃない

なからうか。統計学の内部に個々の重要な問題があることは疑いないし、そういった問題にも、もっともっと取り組んでいかなければならないことも明らかなんだが、基本は社会科学や経済学の問題に、なにかをいかに寄与できるかという点にあると思うんです。そうい、た問題意識があって、その上に統計学的な問題がとりあげられれば、議論も面白くなってくると思うんです。しかし、そのためには、社会科学や経済学の諸問題について、幅広い関心を持たなければなりません。幅広い視野をもてば、経済問題の中で片づけなきゃならない統計的課題はまだ、数知れずあるんじゃないでしょうか。たとえば物価指数というようなものを一つ取り上げてみても、消費者物価が世間で問題になると、統計学者はみんなそれととりあげて問題にする。そのこと自体は重要なんだが、しかしそれだけで終ってしまって、他の側面の物価との関連なんかは、まったく問題にしないわけです。

しかし、いまや為替問題と絡んで、物価水準の問題は重要な問題であるし、この物価水準が、いかなる物価指数で測られる物価水準なのか、ということも今日、再び問題になっているわけです。そうしてこの問題はなんといっても、統計学的な実証的研究を抜きにしては解決できない問題なんですから、統計学者も大いに関心を持つべきだと思うんです。ケインズなんかは、もともとそういった問題意識の中で、彼の指数論を展開していますよね。また高度成長期には卸売物価指数と消費物価指数との乗継が問題になって経済学者達はいろんな議論をやっていたが、あの問題なんかは、むしろ指数の対象品目の問題なんだから、当然、統計学の俵で、とりあげて教え

てやるべきだ、たんですね。

ただ率直に言って、いまの経済学者達の経済統計利用を『経済』なんかで見ていると、ただ使うだけでそこから統計批判とか統計体制批判といったものが出てこないんだな。しかしそれにもかかわらず統計は使ってみなければ、そういった統計や統計方法に関する問題も具体的に与えられることはできないんじゃないかなと思う。誰かが「経験のある木樵は、鋸の切れるか、切れないかを、それで切ってみることによってきめる」なんていっていますが、まったくその通りで、議論もさることながら、使ってみることも大切だと思います。

そういった意味で、統計調査にしても、統計解析にしても、もっと実践的な課題にぶつかって、そこから問題を引き出してくることが大切なんだけど、そういう問題意識が少し稀薄になっているんじゃないかなと思う。

ただ、統計利用や統計生産の実践にとりくんでいくためには、そのための既成の方法的な知識がなければならぬこともあきらかだ。使う鋸そのものは持っていなければ、試めすこともできないわけですね。そういった意味からも既成の統計方法やその発展についての知識は、絶対に必要です。しかもこれからの諸方法は、それぞれの歴史的段階で、特定の社会的条件のもとで、実践的な課題を果すために考え出されたものなんだから、それなりの歴史的、社会的な意味を持っているものです。だから統計史や統計学史を研究することはさきわめて重要なことだと思えます。問題は、ただそのなかだけに着りこんで、そこから出て来ないことで、それだけであれば、こういった学問自体の意味もなくなってしまうんじゃない

か、またそういった点から考えると、従来の大教法則論の発展史を軸としてきた統計学史そのものも、再検討し、もっと違ったものにすべきではないかと思います。亡くなった松川（七郎）さんとも話し合ったこともあるんですが、統計学史の源流である政治算術について、統計学者は、とにかくパーティイよりもグラントを、より高く評価するんだが、あれはおかしい。政治算術そのものが、統計実践の歴史的な先駆なのだから、そのかぎりでもパーティイこそが、高く評価されなければならぬ。ということで大いに共鳴しました。ただ松川氏自らもっとそのことを、声を大きくして言っていただけなかったことが残念です。

伊藤 実質的に経済分析をやっている人々の『経済』やなんかの分析を見ていると、統計をそのまま使っているという感じがありますね。分析方向の是非はあるんですけど、土地制度史学あたり、農業統計その他にかかわりを持っている人は比較的統計いじりが好きなんだろう。うか、ちょっとこった利用が出てくるという程度です。いわゆる『経済』系を含めて、あれよあれよという単純な利用が横行してきている。実質分析家の方でも非常に弱まってきていて、『統計日本経済分析』をやったときに各分野の人々の参加を呼びかけたんですが、結局来なくて、その辺が弱くなっている。かなり荒っぽく片づけちまうというか、省エネですね。だから、それではこちらが出ていこうかということになるわけですが、やっぱり出ていくのも大変ですね。

木村 だけど、『統計日本経済分析』は1つの段階だと思ふな。やっぱりあれを土台にしてもう一歩どう突っ込

んでいくかということ。あの過程を缺いたら、どうしてもできなくなる。やっぱり自分で使ってみなきゃ、そこから問題が出てこないと思うんです。

伊藤 いま先生の当面の関心は？ 典型調査は坂元君がいるんだけれども、あれはひとまず終わられたんですか。

木村 終わりました。もちろんまだ書き加えたい点もくはないんですが、ボクの考え方の骨子はあれで理解してもらえらと思うんです。それに矢張り、あれに対してもっと批判してもらわないと、次が書けないですね。

坂本さんは大変賞めて下さって、光榮に思っているんですけど、(笑) おかしい点だ、てあるかも知れない。なにか反響がないと、次は書けないですよ。しかし一般的に最近、批判し合わないですね。といって賞めてくれるわけでもない。賞めてもらえれば、人間だから矢張り嬉しくなって勇気も出てくるわけだが、(笑) どっちもなければ、とり上げるに値しない、という風に考えるも得ないですよ。そうい、た風潮は矢張り低調を加重してよくないと思います。ところで私の統計学の研究課題として、なにをやるのか、といわれれば、復古主義になるけれども、代表値論をもう一度やりたい。それからもう一つは、代表値論とウラハラの関係にある推計論を、社会科学的推計論という観点からつくって、あともう一度物価指数に還りたい。その三つをやれば大体いいんじゃないかなと思っているんです。

だから、現代の問題意識というわけじゃないけれども、自分なりの統計学の体系の完成をやっておかないとちょっといけないなと思っている。

伊藤 社会科学的推計論というのはどういう内容ですか。

木村 推計は大きくは統計生産的な推計と予測的な推計とに区別しなければならないと思うんですが、その上に立って、社会科学的な認識目的を類型化し、その類型によって、推計技術を整理してみようと思っているんです。果してうまくいくかどうか。未だまったく模索中といったところなのですがー。

伊藤 ひとまず各論風にそこを埋めてということになるんでしょうか。先生が立てられた体系の中で、方法論的なものと、大屋先生の、ある意味では上杉先生もかんでおられる上部構造説的というか、そういう問題を先生が「狭い」「広い」でカバーされた。そういうふうに見ていいのかと思うんですけれども、その点についてはどうですか。蜷川統計学自体に大分議論があった。それを、一方の側面に上杉先生がタッパされている。その側面を切り捨てたといってしまうと言い過ぎかもしれませんが、内海先生が方法論にどんどん入っていかれるという展開。木村先生が統計生産の歴史的形態として論じられているのは、ある意味でそのものずばりだろうと思うんですけれども。蜷川さんには歴史的規定性といった考えはありましたか……？

木村 ぼくは、端的にはあったと思うんですよ。だから、統計史が重要だということを盛んにいっておられるんです。統計学史と同時に統計史をもっとやらなきゃいけないとね。

伊藤 それは書かれたものに出ていますか。

木村 出ています。ぼくは統計学概論のなかのそのところをあの「歴史形態」の論文のなかで引用しているんですが、折々の言葉の中にもいわれていたと思います。

ただ先生は、集団の形態が違ふんだというふうにいつておられるんですね。つまり、集団論という枠内で考えられようということだ。ぼくも一時はその上にのって、地域を集団にしようかなという考えもあったんだけど、どうも地域というものを集団と見るというのは、最近では地域も集団化するけれども、やっぱり封建制下の地域を集団と見ることは、歴史概念からすると、おかしいと思うんだ。そこで、統計対象のものを問題外にせざるを得なくなり、社会集団を歴史的なひとつの存在形態とすることで解決したわけですよ。もちろんそのほかにも作物統計の対象をどうするかといった問題もあったんですが――。

伊藤 ちょっと話を戻すことになるかもしれませんが、統計調査史をやるというのは、蜷川先生の場合、はっきりに方法論なんで、それをいわば補論的にカバーするということになるんでしょうか。あれはあれでいいんですか。

木村 ぼくの体系からいえば、蜷川先生はあくまで狭義の統計学として完成されて、広義の統計学といわれるものは、未竣はされているけれども、積極的なものでなかったことは確かです。少なくともそういった言葉でいわれているわけではないです。またマルクスが広義の経済学といったものを展望した上で、自らの資本論を狭義の経済学として位置づけたような同じ意味で、統計史を考えておられたかどうかは疑問に思います。だから伊藤さんのいわれるような受けとり方もあると思うんです。しかし蜷川先生のいわれる方法という言葉自体にも問題があるのではないか。かなりいろいろなニュアンスで使わ

れていて、研究方法であったり、学なる技術であったりする。しかし統計の作り方といったものが、いったい研究方法なんですか。内海さんは研究方法が好きだから、その面を強調するんですが（笑）ボクは、作り方、使い方、ということで、方法といっても技術にすぎないと思っているんです。そういった観点もあるのでボクは蜷川先生は、狭義の統計学の完成者というふうに位置づけているんです。

伊藤 そういふふうにとらえれば、若干折衷的な気もするけど、全部おさめますね。（笑）

木村 おさまりすぎますかなー。（笑）

伊藤 内海先生は統計学の体系は、蜷川先生の狭義のところをさらに突っ込んでおられるというか、（笑）大橋先生も広義というふうには展開しないで、あくまで狭義に肉づけするというニュアンスですね。狭義を、内海先生とはかなり違う実質的なものを加味しつつ……。

木村 やっぱ狭義になると思うんです。それは上杉君にしても狭義だろうと思うんですよ。ただ、上杉君とはいつもかなり議論しているでしょう。そこで感じとっているかぎりでは、歴史的規定性ということを非常に重視していると思うんです。上杉君は、「人口統計」なんか書いているとき、人口統計の歴史性を強調して、社会の基礎が変わってくれば、おのずから統計の作り方も変らざるを得ないことを云っているはずですよ。ただ彼は、統計学の体系をどうつくるのかという問題になると、ぼくよりもむしろ忠実な蜷川理論ですね。それと内海さんは、僕のあの体系を批評して、狭義の方は要らない、全部広義にしてしまった方がいいなんて言っていましたよ。伊

藤さんのさっきの話とは少しちがうんじゃないですか。

ぼくは、結局統計学という学問は、社会科学の補助科学であるから、その内容を構成する諸技術も対象に変化があれば必ず変化せざるを得ない。いつか是永さんから、木村はどうも目的論的だという批判も手紙で受けたような気もするけれども、やっぱりまず統計的認識目的というものがあって、そこから統計的実践がはじまる。しかしこの認識目的を達成するための方法は、対象のあり方によって拒否されたり、修正を余儀なくされたりする。対象が方法を規定するというのは、このような過程についていっていることです。だから基本的には人間の実践的課題から規定された統計的認識目的というものが前提になると思うんです。この目的規定は蜷川先生にも調査論の方ではあるんだが、統計調査論では余りない。調査論になると非常に目的意識を問題にされる。

伊藤 調査論というのは？

木村 蜷川先生が「社会調査論」を書いているでしょう。目的ということを密んにいっておられます。ところでボクの統計学体系構想についていうと、広義の統計学の歴史的な形態は、統計の生産過程については、できたし、一応あれでいいと思っているんですが、統計の利用過程については、まったくやっていないわけです。統計解析論に歴史性があるのかどうかとなると、ちょっとまだぼくもわからないんですがー。(笑)

森 木村先生があと30年ぐらい若かったら、いまから何やられますか。

木村 本当のことというと、ぼくは、実際に統計を使って資本主義分析をしたいですね。ぼくはぼくなりの……。

森 資料論を踏まえて、吟味しながらというようなことですか。

木村 ええ。それは当然なことですが、一応は統計学とは別個な形で、独立にやりたい。というのは現在数多くの資本主義分析がおこなわれているんだけど、どうもこれだというものがなくて、倦き足りないからです。その倦き足りなさ、基本的には経済理論的なものなんだけども、統計資料の利用の仕方があまりうまくないことにもある。で、まあ自分なりにやって、資本主義分析の水準を少しでも高められれば、なじと甚だうぬほれもいいところなんです。だから、もしそれが出来れば、結果的に統計学にも貢献することにはなるが、直接には経済学の土俵にあがって相撲をとってみたいということなんです。勝てるかどうか判らんですがね。と、同時に僕自身、統計学の中だけでやってゆくことに限界を感じているということもあります。

坂元 ぼくはそう思いますけれどもね。ぼくは絶対そうだと思う、それは数理統計学も全くそうです。何の場合でも、数学でさえそうだと思うんです。やっぱり具体的な目的を持っていて、分析対象があって、そのためにいろんな手法がある。平均にしたって何にしたってそうだと思うんです。それだけをつかみ切れない部分があるからほかの分析表、ほかの統計表ということになるわけです。発達はそうなんです。ところが2代目から、必ずそれを理論的に整合性を図るとかいうことになって、形式化していくということだと思うんですね。ぼくは、木村先生のおっしゃることは全く賛成ですね。

木村 ただボクは、どんな方法でもドンドンただ適用す

ればいいといっているわけではない。対象と問題とをふまえて適切な方法を選ぶことは必要です。しかしどんな方法でも限界はある。その限界を知って、その範囲で使うことが大切ですし、また対象に対して適切な方法でないかと判断されれば、思い切り良く捨て去ることが必要だ。ところが社会科学の領域では、実はこの判断がなかなかむづかしいんです。医学的な測量や観測の世界だと、それが悪ければ人間がコロリと死んで了うから直ぐ判る。(笑)しかし社会科学の方法の適否は自分で判断するほかないから、なかなか手放せないで、いつまでも同じ方法に固執して、無意味な作業を繰り返していることが多いように思われます。そうして社会科学の領域で生じるであろうこのような危険は、他人から批判してもらうことによって回避するほかはない。だからボクは統計学の領域では、もっと批判活動をやってゆかなければならないと思うんです。

それから統計学の理論的整合性という問題ですが、ボクも統計学は結局、社会測量の諸技術を内容とする学問だ、と考えていますから、そういったような整合性はもともと成立し得ないものと考えています。しかし統計学も一個の学問なんだから、まずなによりも“なにを”教えるかを明確にしておかなければならないでしょう。そうしてこの“なにを”は、それぞれの時期の社会的な要求によってあたえられなければならないが、少なくとも現在では、統計の作り方や見方や使い方だと思うんです。それらは大なり小なり従来の社会統計学も、それらの内容をより統合的なかたちで継承しているだけだ、といっていると思うんです。しかし重要なことは、その内容を

「いかに」展開するか、ということなんです。そうして
 捲II統計学が、それを徹底した統計批判という視座から
 展開していることが重要なのです。だから私の統計学だ
 って、内容そのものは、あまり変らないわけです。ただ
 従来の統計学で、あいまいな位置にしかおかれなかった
 作物統計とか国民所得統計などがある程度明確に位置づ
 けできたと思うんです。そうして内容の展開の視座に、
 歴史性が加ったことが、捲II統計学からの多々の発展と
 うぬぼれているわけです。そこでちょっと統計学の学問
 論義にふれておきたいんですが、学問論は大いにやるべ
 きだと思います。しかしその論義を聞いていると、「なに
 を」内容とするかを考えないかのような議論が多いよう
 に思われます。統計調査論をやるのか、やらないのか、
 統計解析論をどう取り扱うのか。まずその点からハッキ
 リさせてもらいたいと思うんですがね。

伊藤 経済学と統計学、統計学の人には経済学に飛び込む
 べきだということを先生はおっしゃられたわけですが、
 とも、もう一つ、調査会活動とか、そういう実際活動と
 研究者のかかわりといいますか、丸山先生が、経統研内
 では、がんばっておられるんですけれども、経統研の先
 生の中では、木村先生は、境界線というか、そういうと
 ころで大分苦勞されてきていますので、その辺について
 ……。

木村 丸山さんの場合には、医事統計と衛生統計という
 御自分の専門領域で、学問と実践とが直接結びつくよう
 なかたちで活動されているわけですが、その積極的な姿
 勢についてはたぬがぬ敬意を表しています。また御本人
 自身も大いにやり甲斐を感じられていると思うんです。

これに対し私の場合はまったく違うんで、少なくとも自分の学問的な動機なんていうものは、ほとんどないわけですよ。前の国民経済や農林統計時代はそうでもなかったにしても、埼玉調査会に関係するようになる動機としては、そんなものはまったくなかった。なんとなく周囲の状況からやらざるを得なくなっただけで、そうなったわけで、まったく自主性のない話です。(笑) 調査会は、たしかに私が積極的に動いて創ったんですが、これも周囲の人々から、折角革新県政が実現したんだから、これを支えてゆくような調査機関が欲しい、この機会に是非創ってくれといわれて創っただけで、私個人がやりたくて創ったわけじゃない。しかしこれができると、自ら責任のようなものができて、その経営から調査企画にまで協力せざるを得なくなり、とうとう最後の後始末までしなければならなくなった。学問の面からは、少なくとも直接的にはマイナスだったともいえるでしょう。

しかし、間接的には、これは結果としての話ですが、いろいろな経験をするこたができて、それを補うぐらいの収穫はあったと思っています。

森 どんな収穫？学問と行政の関係とか、統計と行政の関係とか、そういったことについての経験ですか？

木村 まあ、そういったことですね。現行の統計体系は非常に膨大なものになっているけれども、県段階でそれを使ってなにができるか、というところ、大雑把な県勢報告ぐらいには使えるが、具体的な行政施策をやるとなると、ほとんど役に立たない。そこで調査会の仕事として、はじめは、特定の問題に焦点を当てた実態調査と、統計があっても長期的な動態分析なんかもやっていなかったの

で、そういった分析をやろうと考えたわけです。そうして実際にもやったわけなんですが、問題は県がそれを使ってくれなければ意味がない。ところが、調査を終って報告書を持ってゆくと、御苦勞様でした。どうも有難うございました、なんていって受けとって、一応は関係の名簿に配ってくれるんだけど、それだけで、お終いになってしまうんです。(笑)つまり全然使ってくれないってわけ。われわれは特に行政の追加調査を重視して、いろいろ実態調査をやって、なかには学会や新聞なんかでかなり評価してくれたものもあるんですが、県の役人の間では、ほとんど使ってもらえませんでしたね。文章が多くて読むのが面倒臭い、数字だけにしてほしいなんていう人もいるくらいで、ガッカリしてしまいました。(笑)その頃、ボクは「社会調査論序説」という論文を書いて、少しはその意味を評価してもらいたいと思って、彼らに持っていったこともあるんですが、これもほとんど効果はなかった。(笑)要するに彼らは、マクロ的な調査が好きで、ミクロ的な調査には興味がないし、即効的なものに関心を示さないということが判りました。それと実態調査の結果をどう利用していいか判らないということもあると思います。判らない、ということは、行政組織のなかで、どう利用してゆくか判らないということも含んでいるんですが――。

坂元 役人はやらないし、よいいなことですけれども、要するに個別事例調査ですね、実態調査と統計調査は相互補完的なものであると思うんです。統計調査は、規模が小さければ普通はサンプル調査になるわけですが、サンプル調査がなぜこんなにはやったかということ

はいろんな理由があると思うんですけども、いままでに指摘されていない理由では、具体的な段階で考えると、非常に楽だという面があるんですよ。つまり、調査員が無知無能な人でもいいわけですよ。要するにど素人でも調査できるわけです。ところが個別調査の場合は、調査票が規格化されていませんから、研究者自身が行って聞き取らないとわからない。要するに、泊まり込みで調査しなきゃいけないでしょう。これはきついい大変ですよ。だから、なかなか実施できないということがあるんですね。

もう一つは、ちょっとつまらないかもしれないけれども、特に政党色、イデオロギーを鮮明にできない場合—公的な組織だったらできないですし、そういう場合には典型調査みたいなのがいい。事例研究の場合は問題意識がワッと出てきますから、それがなかなか出せないわけですね。それでやりにくいという面が非常にあります。

神戸市というのはすごく統計に熱心なところなんですけれども、一度相談を受けたことがあるんです。そのときに、わけのわからぬサンプリングなんかやらないで、もっと具体的なものでやれといったんです。そのとき障害者の問題とかいっぱいあったんですね。そういうのを何人かつかまえて調査したらどうかといったら、要するに「統計神戸」とかいう雑誌があって、それに出しているんですけども、それをやったらそれに出せないというわけですね。したがって調査できない。そういう面がやっぱりあるんですね。

木村 標本調査でやるというのは、結局全体を知りたいわけですよ。

坂元 そう、だから数を集めたただけですわね。数値の確定だけです。

木村 数値を確定するだけのことで、数値のうしろにある本質的な問題を掘り起こすことはできないわけですよ。全体の統計調査をやるかわりにという意味ではサンプル調査でもいいんだが、どちらでやるにしても、そこから新しい問題を掘り起こすことは、ほとんど出来ないでしょう。それとお役人がアンケート調査が好きだ、ということは、重視すべきことだと思います。それは企業やなんかで、それがはやっていくということもあるんですけど、行政の立場から、客観的な事態を調査して、そこから自分で政策を考えるよりも、県民の意識を調査して、それにもとづいて政策をやる方が、安直であると同時に、責任回避もできることでもあるんじゃないかな？客観的な事態がどうなっているか、とに角、県民はこう考えているんだ、ということになりますからね。またそれが民主主義的な方法であるようにも思っている。しかも、これこそサンプル調査で簡単にできるわけですから――。わが坂本さんの活躍の場は益々拡大というわけでしょうね。(笑)

坂元 そんなことはありませんよ。やっぱり役人は大変になるようなことはしないですからね。(笑)